

1997年度教育改善推進経費

# 言語研究 VIII

1998

東京外国語大学

特集

文と文の接続

— 命題間の意味関係 —

## まえがき

本学の「言語教育」が、一般的な「語学校」のものと異なり、大学教育に相応しい質の高さを獲得するためには、本学の個人レベルの「言語研究」を有機的に統合し、研究の「質」を高めることが急務であり、不可避と言えよう。このような認識に基づき、従来、特集を組み合わせながら、「言語研究」という冊子の形で、本学の言語研究者の協同作業を試みて来た。

現在まで、品詞範疇、時称など、「文」レベルでの文法現象を主に扱ってきた（研究成果は『言語研究Ⅰ』から『言語研究Ⅶ』にまとめてある）が、今回は、「文」レベルを超える文法現象、すなわち「命題」と「命題」の結合をテーマに特集を組むことを試みた。このことにより、従来の「文」レベルの文法現象をより「広い」観点からまとめ直すことが可能になると考えたからである。

今回の「特集」は、残念ながら、十分な数の論考も集まらず、また、研究会などを通しての議論など、本格的な「共同作業」も実現しえたとは言えず、かならずしも当初のねらい通りにいかなかった。しかし、このような営みは、どのような状況でも継続すべきものであり、また、強固な志向性と粘り強い意志力に支えられてはじめて実現しうるものであろう。

いつの日にか、このような小さな試みが一つの大きな流れとなり、本学の「言語研究」「言語教育」の新たな「方向性」の確立に寄与しうることを夢みながら……。

1998年2月20日

在間 進

## 目次

古フランス語の等位連結辞 et と si について .....	川口裕司 .....	1
L'inépendance phrastique : coordination entre prédicats ou entre phrases .....	Yoichiro TSURUGA .....	29
[研究ノート]		
複文構造の使役文についてのおぼえがき ー使役文における命題と命題の接続ー .....	早津恵美子 .....	57
スペイン語の過去分詞構文 .....	高垣敏博 .....	97
<hr/>		
ドイツ語文法の生成的規則体系 ー生成性、表現機能、形成上の制限ー .....	在間 進 .....	111
中国語における文末の「了」と二つの事態 .....	望月圭子 .....	123
<hr/>		
【資料集】 ドイツ語基本動詞 1 3 0 0 (1) .....	在間 進 .....	139

## 古フランス語の等位連結辞 et と si について<sup>1</sup>

川口裕司

はじめに

言語学の基本原理によれば、言語伝達の中で用いられている複数の言語形式は、一般に二つの異なったやり方で相互に置換可能であるという。第一の方法は、ある特定の一時点において言語形式を相互に置き換えることであり、第二の方法は、時間的に継起する複数の言語形式を相互に置換することである。言語学では、前者の言語形式はお互いに「範列(paradigme)」を成していると言われ、後者は「連辞(syntagme)」を成していると言われる。範列を形成する言語形式と連辞を形成する言語形式が、お互いに決定的に異なっているのは次の点においてである。すなわち、範列を構成する言語形式は、範列を手がかりとして、同一の範疇に属する形式と見なされるのに対して、連辞を構成する言語形式は、連辞を手がかりとして、その複数の言語形式の間に統辞関係が発生していると言われるが、一般にそれらの言語形式が同一範疇に属するかどうかは問題にならない。これをまとめるならば、我々は、「各々の時点において、同一範疇に属する(=範列を形成する)言語形式の中から、適切な形式を選択し、継起的にそうした選択を繰り返すこと(=連辞を形成すること)により、複数の言語形式の間に統辞関係を構築している」と言うことができる。そのようにして範列の中から継起的に選択された言語形式が連続してできた連辞は、理論的にはどこまでも拡大可能である。例えば、名詞連辞が拡大され、名詞連辞+動詞連辞となり、さらに拡大され、ついには俗に言う文と見分けがつかなくなる。ところがその文も

---

<sup>1</sup> 本論文は文部省 1997 年度科学研究費(基盤研究(C)), 課題番号 08610498)の補助を受けた。この論文の全体について一つだけ断っておきたい。本稿に出てくる様々な操作概念と分析手順、さらに数箇所の古フランス語文の解釈に関して、十分に検討できなかった部分がある。また本論文は、連結辞の定義と分析に関する筆者なりの作業仮説を提示したに過ぎない。最後に、論文執筆にあたり、以下の基本論文に目を通せなかったことは誠に残念であった。L. Emirkanian, *La coordination en français*, Thèse de Doctorat, Aix-en-Provence, 1979. M. Ruppli, *La coordination en français moderne*, Thèse de Doctorat, Paris III - Sorbonne Nouvelle, 1988.

さらに拡大可能であり、我々がここで観察しようとする連結辞(connecteur)によって互いに結ばれる。

上に述べたように、何らかの統辞関係をもつ言語形式の連続体である連辞をお互いに連結するのが連結辞の働きの一つであるから、その分析は連辞関係の観点から行われることが確かに多かった。しかし近年では、むしろ、連結辞の範列関係に注目した論考が目立っている<sup>2</sup>。本稿では、まず最初に、連結辞の基本的な言語機能が考察される。具体的には、連結辞と連辞がどのように関わり合っているのか、連辞の内部に生み出される基本的な統辞関係とはどのようなものか、さらに連結辞と指示関係はどのような関わりを持っているのか、以上を筆者なりに問い直したい。また、連結辞がどのような範列関係を形成しうるのか、どのようにして特定の連結辞が選択されるのか、その言語的選択のメカニズムを推論したい。

連結辞の問題を考える際に、この小論が資料体としたのは、13世紀に書かれた古フランス語の証書類である<sup>3</sup>。筆者は数年前から、この証書類を様々な言語学的観点から分析してきているが、本稿もそうした一連の分析の一つに過ぎない。資料体の制約と限界について少し述べておく。確かに本稿で扱われる証書類は、古フランス語の資料として、とりわけ文体的、統辞的、語彙的に制約と限界があり、資料体として否定的な側面があることは否めない。しかしながらその一方で、できる限り均質な言語体系を共時的に記述しようとした試みとしては、必ずしも否定的な側面ばかりを強調するのは適切ではないと考える<sup>4</sup>。またこの小論では、資料体における出現頻度がある程度高く、範列をなしていると比較的容易に判断することができ、先行研究が既に存在する連結辞のみを対象にする。私見によ

---

<sup>2</sup> Antoine (1962) pp.945-1010 では et と si の対立、Reenen et Schø sler (1994) では si と or の範列が分析されている。他方、Antoine (1962) pp.1114-1157, Kleiber (1978), Ponchon (1990) p.50, Queffélec (1995) p.320 は mais と ainz の範列を扱っている。

<sup>3</sup> Aube, Seine-et-Marne, Yonne 諸県に保存される 1230-1271 年の証書類で、Dominique Coq による刊本を利用した。 *Chartes en langue française antérieures à 1271 conservées dans les départements de l'Aube, de la Seine-et-Marne et de l'Yonne*, 1988, Editions du CNRS。

<sup>4</sup> 文学作品と古文書の両者を資料体とすることで、古フランス語に関する言語学的仮説は、より綿密に、より十全に検証されるとも考えられる。例えば Reenen & Schø sler (1994) は九つの文学テキストと六つの古文書を資料体として Fleischman の仮説を検証した。本稿の資料体の特徴と利点に関する詳細については、Kawaguchi (1994), pp.2-8 と川口 (1994), pp.56-58 を参照。

れば、古フランス語の連結辞に次の二つの範列が見られることは、研究者の間で異論の余地がないように思われる。第一の範列は、俗に言う順接の *et/si* であり、第二の範列は、逆接の *ainz/mais* である。本論考ではこのうち、順接の *et* と *si* を分析の対象とし、逆接の *ainz* と *mais* については今後の課題としたい。順接の *et* と *si* は、いずれも俗に言う等位接続詞である。従って、以下では等位接続 (*coordination*) の現象を主に扱うことになる。

## I. 連結辞、連辞、統辞関係

連辞が範列の中から継起的に選択された二つ以上の言語形式により形成され、それらの言語形式の間には統辞関係が成立していることは既に述べた。その場合に観察される基本的な統辞関係のタイプとはどのようなものであろうか。その基本的なタイプを具体的に記述しようと思うならば、恐らく André Martinet が挙げたような三つの基本的タイプを挙げることになるであろう<sup>5</sup>。

- (1) ネクサス関係 (*nexus*) (言語形式のAとBは、一方がなければ他方も存在しない。つまりAはBを、BはAを互いに前提とするような関係)
- (2) 依存関係 (AはBなしでも存在するが、BはAなしには存在しない。BはAを前提とするような関係)<sup>6</sup>
- (3) 共存関係 (*co-présence*) (AとBはお互いに条件づけなしに共存する)

連結辞はこの三つの基本的な統辞関係とどのように関わっているのであろうか。本稿の冒頭において、範列と連辞の本質的な違いについて触れた。範列を形成する言語形式は、互いに同一の範疇に属するが、連辞をなす言語形式においては、同一範疇に属するかどうかは問題にならない。しかしながら、連辞を形成する要素間の統辞関係においても、言語形式がお互いに同一範疇であるのかが問題になる場合がある。そのような場合に、構成要素が互いに同一範疇に属することを連辞上で示すのが等位接続(*coordination*)なのである。

---

<sup>5</sup> Martinet (1985), p.145 参照。

<sup>6</sup> 連辞は時間的に継起する連続体であるため、先行する言語形式AがA Bに拡張されると考えるのが現実的である。但し、この作業仮説は、AとBが共に統辞的自律性(*autonomie syntaxique*)を持った独立的記号素の場合にだけ成り立つ。以下の註9も参照。

(1) 15[1] Je, Gautiers, sires de Vaignunru, et je, Marie, sa femme, faisons savoir a touz ceaus qui verrunt ces presentes [2] letres que nos avons fait eschainge (...) <sup>7</sup>

「余、Vignory の領主 Gautier とその妻こと私、Marie は (奴隷の) 交換を行った(...) ことをこの書状を見るであろう全ての者に知らしめる」

例文(1)では、Gautiers と Marie の二人は、「知らしめる」という事行を成立させる行為項であるばかりか、証書作成者にとってこの二人は、同一の地位をもつ行為項、すなわち同一範疇に属し、互いに範列をなす項として捉えられている<sup>8</sup>。そうした証書作成者の認識は、連辞軸上に現れた連結辞 *et* によって表示される。この事実を確認することは極めて重要である。なぜならば言語使用者にとって、異なる二つの言語形式 *Gautiers* と *Marie* を、同一の時点で両方を同時に選択することは不可能であり、結局のところ、等位連結辞を利用して統辞関係を表示しながら、*Gautiers et Marie* のように同一範疇に属する言語形式を継的に選択するより他ないからなのである<sup>9</sup>。

このような等位接続に対して、二つの言語形式の間に依存関係があることを示すのが従位接続(subordination)と言える。これは先に挙げた第2の基本的な統辞関係にあたる。上例(1)では、従位連結辞 *que* が連辞軸上で二つの事行、*Je ... et je... faisons savoir ...* 「私... と私...は知らしめる」と *nos avons fait eschainge* 「我々は交換を行った」の間に依存関係が発生していることを知らせる。すなわち、報告されるべき内容、「我々が交換を行った」ことは、報告者による発話行為、「私...と私...は知らしめる」を通して、その内容が真であると断定される。つまり、報告されるべき内容は報告者の発話行為により断定されることを前提としているのである。この前提こそが、報告内容と報告行為の間に構築される依存関係の本質と言えよう。

---

<sup>7</sup> 例文(1)の中に用いた数字、15[1]では、15が Dominique Coq による証書の通し番号を、[1]が行番号を表している。以下の例も同様。

<sup>8</sup> この場合に *Gautiers, sires de Vaignunru* と *Marie, sa femme* は相互に置換可能な要素であるが、それは理論的にであり、現実にはこの等位要素は相互に置換できない。少なくとも、領主の妻が領主の名前より前に記載された例は一例もない。

<sup>9</sup> ここで言う言語形式とは独立的記号素を意味する。この場合、独立した最小の記号単位が、同一時点で複数選択されない点が重要なのである。逆に、記号素の中にはアマルガムにより同時に選択される例が数多くある。例えば、名詞連辞 *mes fiez* 「余の封地 (複数)」においては、非独立記号素である文法性や数は、所有形容詞や名詞と同時に選択される。



一方、例文 (1)の中に現れる関係代名詞 *qui* は、残されたもう一つの基本的な統辞関係、ネクサス関係を表示する。なぜなら、*touz ceaus qui verrunt ces presentes lettres* 「この書状を見るであろう全ての者」という箇所、*touz ceaus* と *verrunt...*は相互にその存在を前提とし合っているからである<sup>10</sup>。

結局のところ、先に述べた三つの基本タイプのうち、(3)と(2)がそれぞれ、所謂、等位接続と従位接続に対応している。(3)の共存関係とは、AとBが同一範疇に属することを意味し、依存関係ではBがAを前提とする。従って、この意味で連結辞とは、単に連辞Aと連辞Bを連結する働きを負うだけではない。等位連結辞は、連辞の内部に現れる言語形式が、同一範疇に属することを、すなわち範列を形成することを示す。一方、従位連結辞は、連辞内部の言語形式に依存関係があることを知らせる。

## II. 等位連結辞 *et* と先行文脈指示

前述の如く、一般に言語伝達の中では、一時点において複数の言語形式を同時に選択することができない。この制約により、発話者は等位連結辞を用いて、連結辞の前後に現れる言語形式が互いに範列をなし、同一の範疇に属していることを示すことになる。ところで、等位連結辞の前後に現れる連辞 *p* と *q* が「同一の範疇に属する」という場合、*p* と *q* が同一の範疇に属することを保証するのは、「*p* と *q* の先行文脈を指示する機能」であると筆者は考える。そのことは次の例を見れば明らかである。

(2) 11[10] (...) *elle des or en avant [11] ne reclamera rien en ces devant dittes maisons et la ditte vigne, (...)*

「(...) 彼女は今後、それらの前述の館と上記の葡萄園に関して、いかなる要求もしないであろう(...)」

例(2)の *ces devant dittes maisons et la ditte vigne* 「それらの前述の館と上記の葡萄園」は、言語形式の上からも、既出の要素 (*devant dittes*~, *ditte*~があるため) として記録され、先行文脈を明確に指示している。具体的に言えば、その指示対象はさらにもっと前

---

<sup>10</sup> 従って、ここでの定義を敷衍するならば、関係代名詞 *qui* は、「ネクサス関係を表示する連結辞」であると言える。

の文脈の中に出てくる。11[4](...) les maisons qui sont a Waissei [5] et la vingne qui siet entre Waissei et Broseval (...) 「(...) Wassy にある館と Wassy と Brousseval の間にある葡萄園 (...)」である。ところでこうした先行文脈を指示する働きは、広い意味での前方照応(anaphore)と呼ぶことができる。例文(2)では、代名詞のような代理形式によって先行文脈への指示が示されているのではなく、名詞に先行文脈指示辞(devant) dittes を付加することで指示を行っている。従って、この(2)の例では、等位連結辞 et 自体に先行文脈指示の働きは無いように見える。しかし本当にそうなのであろうか。比較的短い証書の全体を例に挙げてさらに考えてみよう。

(3) 12[1] Je, Mahius, sires de Montmirail et d'Oisy, faz savoir a touz cez qui ces presantes letres verront que je, pour le remede de m-amme et de mes ancesseurs [2] et de mes successeurs, hai donné an pure et pardurable aumone a la Meson Dieu de Prouvins, qui siet devant la fonteine, trante souz de [3] prouvenisiens de rande par an pour acheter ançans an la devant-dite Meson Dieu, pour metre an l-anfermerie aus malades qui leianz seront; [4] et weil et coumant que quiconques tanra mon paage de La Ferté Gauchier, que il pait au mesage certain de la devant-dite Meson Dieu les [5] devant-diz trante souz chacun an, le jour de la Seint Remi, sanz atante d'autre coumandement. Et a-cestte aumone paier a touz jourz oblige [6] je moi et mes oirs et le devant-dit paage, tant com la-devant-dite aumone s-estant. Et ce temoig je par mes letres. Ce fu [7] fet an l-an de-l-Incarnation mil et .CC. et cinquante et trois, ou mois de fevrier. Et weil que cil ançanz soit ars an [8] la chapele de l-anfermerie.

「余、Montmirail と Oisy 領主 Mathieu は、この書状を見る者全てに以下のことを知らしめる。余は余の魂と余の先祖と余の後継者の救済のために、泉の前にあるプロヴァン施療院に純粋かつ永続的布施として、上記施療院の中で使う香を買い、将来そこに療棟を設置するために、年税収入のプロヴァン貨 30 スーを贈与した；そして余は、La Ferté-Gaucher の余の通行税を徴収する者が、上記施療院の確かな使者に、毎年他の受任者を待たずして、聖レミの日に上記の 30 スーを支払うように欲し命令するものである。そして上記の布施が続く限り、余とその後継者は、常にこの布施として、上記の通行税を支払わねばならない。そして余は余の書状によってこれを証明する。これは主の受肉の年の 1253 年 2 月に作成された。そして余はこの香が療棟の礼拝堂で焚かれることを望むものである。」

例文(3)の pour le remede de m-amme et de mes ancesseurs [2] et de mes successeurs 「余の魂と余の先祖と余の後継者の救済のために」の部分を検討しよう。既に述べた 3 つの基本的な統辞関係に従って解釈するならば、等位連結辞 et は連結辞の前後に現れる 3 つの名詞連辞 m-amme, mes ancesseurs, mes successeurs が互いに共存関係にあることを表示している。確かにこの 3 つの連辞は、互いに条件づけなしにそれぞれ存在することがで

きる。3つのうちの1つを消去しても、他の2つに影響が及ぶことはない。こうした等位連結辞 *et* は次のように図式化することができる。

共存関係の等位連結辞 *et*

p — *et* (共存関係) — q<sup>11</sup>

一方、例文(3)では *Et* や *et* が文頭にも現れている。連結辞が文頭に現れると、連結辞は文と文を連結している訳であるから、必然的に連結辞が先行文脈とどのような関係にあるのかが問題になる。例えば、例文(3)の5行目の途中から始まる文を考えてみよう。

(3) 12[5] (...) *Et a-ceste aumone paiera touz jourz oblige je moi et mes oirs et le devant-dit paage, tant com la-devant-dite aumone s-estant.*

「(..) そして上記の布施が続く限り、余とその後継者は常にこの布施として、上記の通行税を支払わなければならない。」

この連結辞 *Et* も共存関係を表していると解釈できる。先行文脈では、通行税収入を使って布施を行うように希望し命令すると述べており、この箇所では、布施の支払いのために通行税を支払うことが述べられている。つまり両者はほぼ同一内容と考えてよい。

今述べた共存関係を表す *et* に対して、例えば次の箇所をご覧いただきたい。

(3) 12[4] *et weil et coumant que quiconques tanra mon paage de La Ferté Gauchier, que il pait au mesage certain de la devant-dite Meson Dieu les [5] devant-diz trante souz chacun an, le jour de la Seint Remi, sanz atante d-autre coumandement.*

「そして余は、La Ferté-Gauchier の余の通行税を徴収する者が、上記施療院の確かな使者に、毎年他の受任者を待たずして、聖レミの日に上記の 30 スーを支払うように欲し命令するものである。」

この部分は、先行文脈において布施として 30 スーの贈与を行うことが述べられたのを受けて、その布施の支払い方法を規定している。支払い方法を規定するためには、前もって

---

<sup>11</sup> このような図式化には何の意味があるのであろうか。本論の後半では、よく似た機能をもつ複数の等位連結辞の比較対照が行われる。その際に、文脈の意味解釈による影響をできる限り小さくし、等位連結辞が現れる環境をできるだけ論理化しなければ、等位連結という現象を幾つかのタイプに分類することができない。上に掲げた図式化は、意味解釈を最小限に止め、論理構造化を行うために必要な手段であると筆者は考える。

布施の贈与が認められている必要がある。贈与の事実認定が前提になれば、その支払い方法を規定できる筈がないからである。連結辞 *et* は、先行文脈に出てきた布施の内容を事実と断定した後に、支払い方法へと進んでいく一連の手続きの連関性を表していると言える。従って、この場合、連結辞 *et* は、明らかに先行文脈を指示する機能を持っていると考えねばならない。連結辞 *et* がこうした断定操作を行っていると言える背景には、*weil et coumant que...* という構文の働きがあることも否定できない。Oisy 領主 Mathieu が *weil et coumant* 「希望し命令する」するためには、予め、彼自身がその内容を真と断定していなければならない。逆に言えば、*et* が断定操作を担っているが故に、*weil et coumant* という発話行為がその後が続くことができるのである。これとよく似た例が6行目の半ばから始まる部分にも見られる。

(3) 12[6] (...) *Et ce temoig je par mes letres.*

「(...) そして余は余の書状によってこれを証明する。」

この場合、先行文脈との指示関係は指示詞 *ce* により示されているが、「そして余は余の書状によってこれを証明する」という内容は、先行文脈に現れた諸々の事行を総括した上で、それらの事行が真であり、「それに相違ない」と断定することに等しい。従って、ここでも等位連結辞 *et* は、それ自体が先行文脈指示の機能を持ち、先行文脈の事行を真であると断定しながら、後に来る *ce temoing...* という発話行為に結びつける働きをしている。こうした断定の連結辞 *et* は次のように図式化される。

断定操作の等位連結辞 *et*

$p \leftarrow et \text{ (断定操作)} \rightarrow q$

この定式化では、連結辞 *et* は先行文脈に現れた事行 *p* に対して指示機能 ( $\leftarrow$ ) を持ち、断定の発話操作を行う。断定操作をもう少し具体的に述べておこう。それは、事行 *p* の否定である  $\neg p$  を真ならずと判断することであり、その結果、事行 *p* は真であると断定される。従って、連結辞 *et* が行う断定操作とは、「事行 *p* が真であることにより、次に事行 *q* が合法的に現れる」ことを意味する。

最後に、文頭に現れる *Et* がもう一つある。証書の最後の7行目の途中から始まる部分

である。

(3) 12[7] (...) *Et weil que cil ançanz soit ars an la chapele de l-anfermerie.*

「(...) そして余はこの香が療棟の礼拝堂で焚かれることを望むものである。」

指示詞 *cil* は直前の文脈ではなく、先行文脈の [3]... *pour acheter ançans* を指示する。確かに、連辞の内容は先行文脈を指示するものであるが、連結辞 *Et* そのものは、直前の文と後の *weil que...* を連結しているとは言い難い。なぜならば、直前の内容は、この証書が作成された日時を述べているからである。連結辞 *Et* はこの場合、先行文脈と一旦関係を絶たれた文に、前の内容を補遺的に付加するために用いられている。この連結辞 *et* の働きは次のように図式化できよう。

補遺的付加の等位連結辞 *et*

p ---- *et* (補遺的付加) --- q

この場合、2つの事行 *p* と *q* は同一の範疇に属するような内容として捉えることができない。*p* の内容とは関わりなく、*q* は付加されているのである。

ここまで概観したことをまとめておこう。等位連結辞 *et* が連辞ではなく、俗に言う独立した文と文を連結する場合、先行文脈指示という観点から等位連結辞 *et* を分析するならば、連結辞 *et* によって連結される二つの文の間には、少なくとも三つのタイプが見られる。それらは (1) 共存関係、(2) 断定操作、(3) 補遺的付加である。しかし恐らくこれ以外にも *et* に様々な連結機能が想定されることは想像に難くない<sup>12</sup>。

### III. 等位連結辞 *si*

古フランス語の連結辞の中で、この *si* ほど研究者の興味を惹いた形態は他にない。例えば、Gérald Antoine は、その大著 *La Coordination en français* (1962) pp.945-1010 に

---

<sup>12</sup> 実際、古フランス語の文法書の連結辞 *et* の項目には、時間や結果を表したり、新たな話題への移行を表したり、対立を表す例が挙げられている。特に Ménard (1988) § 194,195, 196,216,415,417 と Hasenohr (1993) § 324 を参照。

において、si に関する古典的な研究を引用しながら、時代を追って最古フランス語から 17 世紀に至るまでの si と et の変遷を述べている。また Christiane Marchello-Nizia は *Dire le vrai: L'adverbe "si" en français médiéval* (1985) の pp.162-164 において、過去の研究を 3 つのタイプに分類し、極めて簡潔に先行研究の要点をまとめている。彼女はまた、単に連結辞としての機能に止まることなく、様々な si の働きを分析し、最後にその歴史の変遷を概観している。この二つの著作の参考文献に目を通すなら、連結辞の si が如何に魅力的で、かつ捉えどころのないテーマであったかがよく判る。本稿がこうした優れた先達たちの研究成果を基盤としていることは言うまでもない。しかし、本論考の目的は si の包括的な分析を行うことではない。ここでは、限られた資料体の中に現れる独立した文と文を連結する si を網羅的に分析し、si と同じ範列を形成すると考えられる他の連結辞との関係を筆者なりに考えてみたい。

通時的に見ると、我々の資料体 1230 年から 1271 年までのシャンパーニュ地方南部の公文書は、連結辞 si が次第に衰退してゆく、そうした変化が見え始める時期に作成されたと考えられる。決定的な衰退は 15 世紀末(Marchello-Nizia op.cit., p.200)あるいは 16 世紀始め(Antoine op.cit., p.988)に起きたとされるが、頻度的に見ると、この時期に既に始まっていたと言えるかもしれない。まずは全体像を見てみよう。

### III. 1. si の機能

資料体における si

様態辞 si com (69) (= tel que, etc.)

等位連結辞 et si (15)

等位連結辞 si (5)

従位連結辞 si que (5) (= de sorte que, etc.)

様態辞 si (6) (= ainsi)

様態辞 si (2) (= tellement)

(括弧内は出現回数。綴り字の変異があるため代表的形態のみを挙げた)

一目瞭然であるが、連結辞 si は単独で現れるよりも、連結辞 et と結合して、複合連結辞 et si の形式で記載されることのほうが多い。この et si については後に詳しく述べることにしたい。様態辞としての si は ainsi 「こうして」の意味になる。

(4) 16[9] Et ses lettres si furent faites 「そしてこの書状はこうして作成された。」

(5) \*3[1] Li roi de Navarre si dit que (...) 「ナヴァール王は以下のように言う(...)。」

文と文を連結する等位連結辞の *si* は全部で5例しか見つからなかったが、それらを全て詳細に分析してみよう。

(6) 64[1] Gié, Jehanz, (...) faiz a savoir a touz ces qui verront et orront ces presentes lettres que gié los et appreuve (...) la [3] vendue que Jehanz, (...) a faite, (...) au [4] maistre, au freres et au serors de la Maison Dieu Saint Nicholas de Troies, d'une piece de [5] pré qui muet de ma censive, (...) le quel pré (...) delez mon pré, d'une part, et [8] delez le pré aus anfanz faü Pierre de Ruillei, d'autre part; *si* voil et otroi que li dit maistres, [9] frere et seror de cele Maison Dieu et lor successor taignent et aient an paiz (...)

「余、(...) Jean はこの書状を見聞きする全ての者に知らしめる。余は、(...) Jean が (...) トロワの聖ニコラ施療院の院長、修道士や修道女たちに、余の年貢徴収地から不動産移動する野原の一部を売買したことを認める、(...)その野原は(...)一方で余の野原に接し、他方で故 Pierre de Ruillei の子たちの野原に隣接していた；そして上記の院長、修道士や修道女、また彼らの後継者たちが平和にそれを所有することを余は望み許可する。」

連結された二文の主語はいずれも Jean(Jehanz)である。前段で野原の売買が述べられ、*si voil et otroi* は、野原の売買の事実を断定し、その野原の所有を許可するための発話行為として捉えることができる。以下の図式を参照。

p (野原売買の周知) ← *si* (断定操作) → q (野原所有の許可)

(7) \*3[1] Li roi de Navarre si dit que (...) la garde de Chablies (...) appartient a-lui pour les causes devent [4] dites; *si* requiert pour ce que la garde li en-soit delivree et offre a prover et a-montrer [5] ce que li souffira de choses devent dites.

「ナヴァール王は、(...) シャブリの保護権が (...) 上記の理由により自らに属しているとこのように述べる；そして、その保護権が自らに引き渡され、上記の内容が自らに十分なものを証明し立証するために提出するよう要求する。」

例文(7)でもやはり連結された2つの文の主語は一致する。*si requiert* は保護権がナヴァール王に属することを述べた後に、ナヴァール王自身がその保護権が自らに引き渡され、内容が証明されるようにするために行った発話行為と考えられる。以下の図式を参照。

p (保護権譲渡の周知) ← *si* (断定操作) → q (譲渡内容の証明)

例文 (6)と(7)は、いずれも si に先行する事行が、si に後続する事行によって実効に移されることを示した内容と解釈できる。その場合に、si は先行文脈の事行 p を断定する働きを持っている。すなわち、p の否定命題 (= p は真ではない) を排除し、結果として p が真であることを断定しつつ、第二の事行 q へと連結していく役割を果たしている<sup>13</sup>。

ところで、今、「si は先行文脈の事行 p を指示する」と述べたが、これは si に後続する部分 q が si に先行する部分 p と明らかに同一指示的な内容を持っているためである。si が断定の発話操作を担っていることは、(8)の例を見ればもっとはっきりする。

(8) 53[2] (...) Je vous faz a savoir que je ai donné e quité a touz jours a monseigneur Jehan Britaut, [3] mon cousin, le fié que Jehannet Choisel tenoit de moi a Miri seur Yonne, le quel fié je tenoie de [4] vous. *Si* en recevez s-il vous plet le devant dit monseingneur Jehan a home, ausi com je en estoie [5] vostres homs.

「(...) 余は殿にお知らせ申し上げる、余から Jean Choisel が所有権を得ていた Misy-sur-Yonne にある封地を、余は永久に、従兄 Jean Britaut に与え、権利を放棄する、その封地は (元来) 余が殿より所有権を得ていたものであった。従って、余が殿の臣下であったように、上記の Jean 氏を臣下として受け入れ下さるようお願い申し上げます。」

(8)では、si の直前の文と直後の文の主語が異なる。前半は所有権が移転したことを、余(Je)が二人称の相手(vous)に知らせる内容であり、後半部は所有権の移転に伴って、臣下の認定も新しくするよう領主をお願いしている (二人称の命令形 *recevez*)。この相手に懇願する発話が引き出されるには、正しく、所有権の移転が事実として断定されていなければならない。Je vous faz a savoir que...「お知らせ申し上げる」の後に、その内容を断定した上で、命令形 *recevez* が用いられている点に注目すべきである<sup>14</sup>。以下の図式を参照。

p (所有権移転の周知) ← si (断定操作) → q (臣下の認定を懇願)

<sup>13</sup> この点に関して Marchello-Nizia の次の説明は、さらに問題の本質に近づいているように思える。E1 (=p) étant posé - et *si* marque que c'est ainsi qu'il faut le recevoir -, E2 (=q) peut être énoncé - et *si* marque la légitimité de cette nouvelle assertion (Marchello-Nizia, op.cit., p.168)。

<sup>14</sup> 統辞論的観点から言えば、Si+命令形は、si がなくても構文上は成り立つ。Marchello-Nizia は文と文を連結する si とこの Si+命令形を別々に分類している。しかし、si がゼロと入れ替え可能である(commutable)こと、si 以下の部分が否定形になり得る点で両者は共通する(Marchello-Nizia, op.cit., p.143-145)。



### Ⅲ. 2. 連結辞 si と et

(9) \*3[12] Et pour que la chose va par bone foi et doit aler, li roys requiert que [13] les lestres que cil de Saint Martin ont qui font pour le roy que il les metent avent, (...) [15] (...) et requiert que l-en en mist de une partie et d-austre; *si* sanble a-ceoux devant [16] qui la chose est que bien soit:

「そして内容が良心により実行されるために、王は聖マルタン参事会が王のために作成した書状を提出することを要求する、(...) (...)そしてお互いに書状を交わすように要求する；それにまた、内容を前にする彼らにとってそれが良いように思われる。」

例文(9)では、主語が前半と後半で異なっている。しかし前半で要求内容が述べられ、それが断定された上で、*si* sanble a-ceoux...という感想が補足的に述べられており、*si* はやはり断定機能を果たしていると言ってよいものと考えられる。以下の図式を参照。

p (要求内容) ←*si* (断定操作) → q (王の感想)

このように連結辞の前後で主語が変化する例は、連結辞 *et* の場合にも見られた。しかしながら連結辞 *et* と *si* の両者には本質的な違いがあるように思える。既に見た例文(3)を思い出していただきたい。

(3) 12[6] (...) Ce fu [7] fet an l-an de-l-Incarnation mil et .CC. et cinquante et trois, ou mois de fevrier. *Et* weil que cil ançanz soit ars an [8] la chapele de l-anfermerie.

「(...) これは主の受肉の年の 1253 年 2 月に作成された。そして余はこの香が療棟の礼拝堂で焚かれることを望むものである。」

ここでは証書の日付の後に、言わば補遺的に領主の希望が述べられており、等位連結辞 *Et* は先行文脈にある事行 p (=証書の日付) と内容的に切り離された事行 q (=領主の希望) を補遺的に付加していると考えられる。それに対して連結辞 *si* は、例(9)のように、*si* の前後で主語が変わっても、補足的に述べられた事行 q (=王の感想) の部分は、直前の事行 p (=要求内容) と内容的に連続しており、先行文脈との間に内容的な断絶はない。この点は連結辞 *et* と *si* の大きな相違点であると言えよう。2つの事行 p と q の主語が異なるにせよ、内容的な連続性が保持されるため、連結辞 *si* は断定機能を担うことができるので

ある。

以上述べてきたように、等位連結辞 *si* は 5 例中の 4 例が、断定の機能を持っていると考えられる。では残りの 1 例はどうであろうか。

(10) \*2[f65 8r] (...); *iqui si* [9] *passe le-chemin qui vet a Vi-Nuef, si s-en-vet entre* [10] *le bois et le-chemin droit a la-Hae le-Conte;*

「(...) ;そこを Vinneuf への街道が通り、森と La-Haie-Le-Comte へ向かう街道の間を走る。」

(10)の例では *si* が断定機能を果たしているとは考えにくい。*si* に先行する事行 *p* と後続する事行 *q* は、お互いに関係はあるが、同じ範疇を形成するものとして並置されているだけのように思える。従って共存関係にある 2 つの事行を *si* が連結していると解釈できる。以下の図式を参照。

*p* (街道の位置) — *si* (共存関係) — *q* (街道の位置)

ここまでの内容をまとめておこう。文と文を接続する等位連結辞 *si* の主たる機能は断定機能である。*si* に先行する文と後続する文は、それゆえ多くの場合、同一指示的な内容になる。*si* の直前と直後の文の主語が一致するのはこのためである<sup>15</sup>。2 つの事行 *p* と *q* との関連で言うならば、連結辞 *si* は、第 1 の事行 *p* の否定命題  $\neg p$  を想定し、これを退けることで事行 *p* が真であると断定する。それによって同一指示的な内容をもつ第 2 の事行 *q* が連結辞 *si* の後に合法的に現れることが可能になる。これに対して連結辞 *et* の場合は、*et* の前後に来る文が必ずしも同一指示的な内容をもつとは限らず、内容的に断絶が生じていることも考えられる。

---

<sup>15</sup> Marchello-Nizia の調査では、Chrétien de Troyes の 5 つの物語において、*si* により導かれる独立節 1407 個のうち、90%にあたる 1230 の文に主語が現れない。さらにその 1230 のうち、76%の 938 個の文では *si* の前後で主語が同じであるという。しかもこの相関関係は 2 世紀後の *Livre du Chevalier de la Tour Landry* においても基本的に変化していないらしい(op.cit., p.165)。

#### IV. 等位連結辞の範列

等位連結辞 *et* と *si* の違いについては今触れたばかりだが、これらと同じ範列を形成する連結辞には他にどのようなものがあるのだろうか。資料体の証書は、しばしば次のような文言で終わっている。

(11) 1[35] (...) *Et por ce que ce* [36] [soit] *ferm et estable ai ge fait cez letres seeles de mon seel. Ce fu fait en l-an de grace mil et .CC. et .XXX., ou mois de septembre.*

「(...) そしてこれが正式で確たるものになるように、余はこの書状に余の印璽を押した。これは主の年の 1230 年 9 月に作成された」。

100 件の証書のうち、作成年代を記載した部分に関しては、71 件の証書が例(11)のように連結辞 *Et* を伴わず、(...) *Ce fu fait en l-an (...)* と記録している。残りの 29 の証書のうち 23 件は、年代表記の部分の独立した文として記載されておらず、6[11] (...) *ces presentes lettres qui furent faites en l-an de l-Incarnation Nostre Seignour mil. [12] deux cenz. quarante et VII., ou mois de may.* 「我らが主の受肉の年の 1247 年 5 月に作成されたこの書状(...)」のように、関係代名詞等の構文をとっている。結局のところ、6つの証書だけがこの作成年代の箇所を連結辞 *et* を使って記録している。しかも興味深いことに、これら 6つの証書は全てその直前の文も連結辞 *et* で始まっている<sup>16</sup>。

従って、多くの証書作成者（71%の作成者）にとって、作成年代を記した箇所は、その前の文（ほとんどが印璽による証書の発効手続き）と共存関係をなす内容として捉えられていない。その結果、作成年代を表記する際に「連結辞ゼロ」が選択されたと考えられる。*Ce fu fait l-an...* は内容的に先行文脈と切り離されており、その意味では、II. で述べた補

---

<sup>16</sup> 8[11] (...) *Et por ce que ceste chose soit plus ferme, (...), j'ai en ces presente lettres [11] mis mon seel. Et ce fu fait en l-an de grace (...); 16[9] (...) Et pour-ce que ce soit ferme chose et estable, et ses presentes [9] lettres je ai fait saelees de mon sael. Et ses lettres si furent faites en l-an (...); 48[32] (...) Et ha promis cil Ansiaus par sa foi donee et ma main (...) Et fu [33] fait a Estarnai, l-an (...); 59[6] (...) Et pour ce que cete chose soit ferme [6] et atable, je hé saellees (...) Et ces lestres faites an [7] l-an (...); 87[29] (...) Et pour ce que ce soit ferme chose et estable, nous avons fait seeller ces lettres de nostre seel. Et ce fu fait an l-an (...); 88[15] (...) Et pour ce que [14] ceste chose soit plus seure... Et ce fui fait an-l-an (...)*

足的付加の等位連結辞 *et* の場合によく似ている（例文(3) 12[7]を参照）。以下の図も参照。

p（証書の発行手続き） --- 連結辞ゼロ --- q（作成年代表記）

さらに重要なことだが、我々の資料体では、先程の例 (11) 1[35] (...) *Et por ce que ce* [36] [*soit*] *ferm et estable ai ge fait cez letres seelees de mon seel.*のように、独立文の文頭に現れる目的節(*por ce que...*)の前には、連結辞 *et* だけが用いられ、他の連結辞が現れることは決してない。しかもこの場合、連結辞 *et* が連結辞ゼロと交替することも考えられない。先行文脈と文頭の *por ce que* を連結するための範列要素は連結辞 *et* だけなのであり、その場合、連結辞 *et* の選択は義務的である。若干の文型変異は考えられるものの、*Et por ce que* 型は全部で 48 件の証書に記載されており、一種の慣用表現のようにになっている<sup>17</sup>。

連結辞 *et* には、この他、例(12)のように、*com* で導かれる原因理由節を連結した例も観察されるが、このような結合可能性は他の等位連結辞には全く見られない。

(12) 46[22] *Et com li devanz diz Girauz les devant dites quatre lb. de rente et les devant diz sis sous de cens nos ait donez et quitez a faire nostre volanté, nos ces quatre lb. [23] de rente dounons et otroions aus chainoines de Saint Pere de Troies (...)*

「そして前述の Giraut は前述の 4 リーヴルの地代と上記の 6 スーの年貢を我々に贈与し、我々の自由になるよう権利を放棄したため、我々はこの 4 リーヴルの地代を(...)トロワの Saint-Pierre 教会の参事会員に贈与し許可する。」

ところで、連結辞 *si* が用いられる場合は、前後の内容が同一指示的であり、内容的に断絶がない連続した話題を連結する場合が多かった（Ⅲ. 2. を参照）。この事実は連結辞 *si* が断定機能を果たすことと無関係ではない。しかし連結辞 *et* も断定機能を担う場合があった（Ⅱ. を参照）。すなわち、連結辞の *et* と *si* は条件さえ同じであれば、ともに断定機能を果たし、両者間の選択は随意的となる例があり得る。例えば、先に挙げた例文(6)と次の例文(13)の場合がそうである。いずれの連結辞も類似の文脈の中で断定機能を果たしていると言える。

---

<sup>17</sup> 資料体の文型変異に関しては、川口(1996)を参照。以下に *Et por ce que* 型の表現が現れる証書の番号を挙げる。1,3,8,9,10,11,14,15,16,18,19,20,21,25,26,31,39,41,44,46,47,49,50,51,52,55,59,64,67,74,75,77,78,79,80,83,86,87,88,89,90,93,94,95,96,98,99,100.

(13) 46[26] (...) et pour-ce que li devant dit chanoine avoient [27] sis sos de-rente sor une maison et .XII. deniers de cens sor une autre maison, (...) nous, en eschange [28] de ces set sous, lor dounons les devant diz sis sos de cens qui furent au devant Giraut; *et volons et otroions que li devant dit chanoine [29] tieignent an pais sanz contredit a touz jours ces choses devant dites, (...)*

「(...) 上記の参事会員たちは (...) ある館に対して6スーの地代を、もう1つの館からは12ドゥニエの年貢を得ていたため、我々はその7スーと交換に、上記の Giraut のものであった上記の6スーの年貢を彼らに贈与する。そして我々は上記の参事会員たちが平和に反対もなく上記の財産(...)を永久に所有することを望み許可する。」

断定操作が行われていることは、事行 q に発話行為を表す表現 *volons et otroions* があることから明らかである。そして例(13)の文脈的な環境は例(6)の 64[8] (...); *si voil et otroi que li dits maistres, (...)*と同じであると言える。以下の図式を参照。

例文 (6) p (野原売買の周知) ← si (断定操作) → q (野原所有の許可)  
例文 (13) p (年貢贈与の周知) ← et (断定操作) → q (年貢贈与の許可)

このように例文(6)と(13)は、ほぼ同一の論理構造を持っていることが判る<sup>18</sup>。

さらに、資料体の中にたった1例しかないが、連結辞 *eins* にもよく似た文脈で用いられた例がある。しかし *si* や *et* に比べて *eins* の場合、前後の事行の間に原因と結果の関係があるように思える。

(14) 47[9] (...) e après [10] gié vuil que tuit saichent que lou poulain que cil de Ponteigni m-ont otroié a-ma-vie [11] per les covenances qui sunt entre moi e aus, e lou me-randent chasqun an, gié ne lou doi [12] prendre mais que tant com je vivrai e que cil de Ponteigni ne seront tenu a randre [13] poulain a nul de mes hors ne de mes successeurs après ma mort, *eins* en-seront quite a [14] touz jourz.(...)

「(...) そしてその後、余は皆に知ってもらいたい、Pontigny の修道士と余が交わした契約に従って、彼らが存命中に余に以前に支払った子馬と、余に毎年支払っている子馬を、余は存命中に限り受け取るべきであり、彼らは余の死後、相続者と後継者に子馬を支払う義務はなくなるであろう、こうして彼らはその義務を永久に免れるであろう。」

<sup>18</sup> 「連結辞 *si* は連結辞 *et* の地理的変異形に過ぎない」という仮説は全く成立しない。*si* は Troyes(例文 6)、Tours(例文 7,9)、Provins(例文 8)、Sens 近郊の Popelin 施療院(例文 10)といった様々な地域で作成された証書に現れるからである。

Noyers 領主の Miles 八世は、自分が存命中に限り、子馬で支払いを受け取る権利を認めた。これによって彼は必然的結果として死後の権利を放棄したのであった。生前の権利承認 (p) と死後の権利放棄 (q) という二つの事行の間には、明確な因果関係を認めることができる。eins は確かに断定機能を果たしていると言えるが、事行 p と q は原因と結果の関係にあり、それは単なる事実の断定よりも依存関係に近い。つまり事行 q は明らかに事行 p を前提として成り立っているように思える。以下の図式化を参照。

断定かつ依存関係の連結辞 eins

p (生前の権利承認) ← eins (断定操作+因果関係) → q (死後の権利放棄)

この他に、等位連結辞としては or も考えられる。しかし我々の資料体の中に or は1度も現れない。van Reenen と Schø sler の分析が既に指摘しているように、or が現れないのは証書という文体に依るのかもしれない。また主語がお互いに共通している節や文が、主語を表示しないで連続する場合、連結辞 or が用いられることはほとんどないという。このことも or が現れない原因の1つと考えられる<sup>19</sup>。

我々の資料体に関する限り、等位連結辞の範列要素としては、et, si, eins, 連結辞ゼロ<sup>20</sup>が想定される。連結辞ゼロについて言うと、例えば、作成年代を記載する部分では71% (100の証書のうち71文書) が連結辞を選択しない。すなわち連結辞ゼロの状態にある (例文(11)を参照)。

他方、連結辞を選択する場合、et が最も結合可能性が高く、結果として範列の中で話者により選択される可能性も一番高い。例えば、目的節(por ce que...)や原因理由節(com...)を連結することができるのは連結辞 et だけである (例文(11)と(12)を参照)。

連結辞 et は、一般に、前後に現れる事行 p と q が共存関係にあることを示す。しかし稀に si も同じく共存関係を示す場合がある (例文(10)を参照)。

連結辞 si は一般に断定操作を行う。そのとき2つの事行 p と q は、一般に、同一指示的な内容を表し、p と q の間に内容的な断絶はない。しかしながら連結辞 et も条件さえ同じ

---

<sup>19</sup> Pieter van Reenen and Lene Schø sler (1994), p.414.

<sup>20</sup> これを「連結辞省略(asyndète)」とするか、範列要素が選択されていない状態 (連結辞ゼロ) とするかは解釈の違いである。筆者は、連結辞の範列要素と言語的選択という前提に基づいているため、これを連結辞ゼロ(connecteur-zéro)と呼びたい。

であれば、断定操作を行うことがあり、連結辞 *et* と *si* の間の選択は随意的になる (例文(6)と(13)を参照)。

連結辞 *eins* は単なる断定操作だけでなく、前後の事行 *p* と *q* の間に依存関係 (=原因と結果の関係) が観察される (例文(14)を参照)。

## V. 等位連結辞と統辞構造

Ⅲ. 2. で連結辞 *et* と *si* の相違を発話の論理的関係から検討し、その際に連結辞 *et* に他の連結辞には見られない統辞的な結合可能性があることを指摘した (目的節(*por ce que*) や原因理由節(*com*)との結合可能性のこと)。しかし統辞的な観点から、さらに連結辞 *et* を見てみると、実は *et* と *si* には決定的な相違があることが判る。

(3)[7] (...) *Et* weil que cil ançanz soit ars an la chapele de l-anfermerie.

「(...) そして余はこの香が療棟の礼拝堂で焚かれることを望むものである。」

(15) 40[15] (...) *Et* otroient devant moi ci devant diz Bernarz et Adeline, sa suers, tout ce [16] davant dit marchié, (...)

「(...)そして前述の Bernard とその姉妹 Adeline は私の前で前述の取り引きの全てを認める(...)」

(16) 28[10] (...) *Et* je, Gautiers, sires davant diz, et je, Ysabiliaus, fainme dor dit Gautier, loons et graantons ceste partie (...)

「(...)そして余、上記の領主 Gautier II と上記の Gautier の妻、私 Isabele は、この取り分を承認し保証する(...)」

(17) 89[11] (...); et ce don et ceste aumosne ai je faite par le grei et l-otroi de mon chier signor devant dit (...)

「(...) ;そして余は上記の親愛なる殿(Thibaut V)の恩寵と許可により、この贈与と布施を行った(...)」

これらの例から連結辞 *et* の後では、OVS(例(17) *ce don...ai je faite*)、VSO(例(15) *otroient ci devant diz Bernarz et Adeline ce davant dit marchié*)、VO(例(3)[7] *weil que...*)、SVO(例(16) *je ...et je..., loons et graantons ceste partie*)の語順が可能であったことが判る<sup>21</sup>。

---

<sup>21</sup> 代名詞目的語の場合も、例文(3)[6] (...) *Et* ce temoig je par mes letres. 「(...)そして余は余の書状によってこれを証明する。」のように、OVSの語順があり得る。

ところが文と文を連結する *si* の場合、我々の資料体について言えば、VO の語順しか許されない (例文(6)-(10)を参照)。つまり主語を表示した例が 1 例もないのである。

断定機能を主な働きとする連結辞 *si* では、必然的に連結辞の前後にくる事行 *p* と *q* は同一指示的な内容でなければならない。従って既に述べたように、事行 *p* と *q* の主語が同一で、かつ事行 *q* において主語が表記されないことが多かったのである。

しかし実際に VO の語順をとっているのは、連結辞 *si* ばかりではない。既に見たように (Ⅲ. 1. を参照)、我々の資料体では、単独の連結辞 *si* は 5 回しか現れないのに、複合連結辞 *et si* は 15 回も現れていた<sup>22</sup>。

(18) 81[1] Je, Johans de Neele, (...) et je, Raols, (...) faisons savoir [2] a tous cels qui ces letres verrunt que nos avons baillié par eschange a [3] nostre chier cousin Johan, (...) nostre moulin de Chanvres (...) a tout le cors de l-eigue (...) et toutes les aiesances (...) et trois arpens de vigne (...); [11] *et si* li baillons toute jostice et toute seignorie sus le devant [12] dit moulin et sus la terre et sus le patis devant dit et sus la vingne [13] devant dite.

「余、Jean de Neele と余、Raoul はこの公式書状を見るものすべてに知らしめる。我々は、(...) Chamvres の水車小屋を(...)川の流れと共に、(...) またその付属物(...)と 3 アルパンの葡萄園(...)を、我らの親愛なる従兄弟 Jean に交換により贈与した；そして我々は、上記の水車小屋、土地、上記の野原と上記の葡萄園に対する全ての裁判権と領主権を彼に委譲する。」

連結辞 *et si* の前後は同一指示的な内容であり、*et si* は明らかに断定機能を果たし、その論理構造は連結辞 *si* のそれに等しい。以下の図を参照。

*p* (水車小屋等贈与の周知) ← *et si* (断定操作) → *q* (権利譲渡の承認)

(19) 64[8] (...) *si* voil et otroi que li dit maistres, [9] frere et seror de cele Maison Dieu et lor successor taignent et aient an paiz et quittement [10] a toz jorz au non de la dite Maison Dieu ce dit pré par les quatre deniers de cens [11] desor diz a randre a moi ou mon commandement et a mes oirs chascun an a-touz jorz; [12] *et si* promet an boene foi que je par moi ne par autrui ne venrai jamais an [13] contre ces convenences ne riens de droit ja mais ne reclamerai, ne par moi ne par [14] autrui, an ce dit pré, ne por raison de main morte ne por autre raison, quex que ele [15] soit, fors que ces diz quatre deniers de-cens.

「(...) そして施療院の院長、修道士と修道女と彼らの後継者たちが、毎年、余あるいはは

---

<sup>22</sup> 複合連結辞 *et si* は 15 回現れたうちの 9 回が Troyes で作成された証書に現れるが、これが地理的特徴であるのかどうか判断しかねる。



余の受託人、あるいは後継者に、永久に前述の4ドゥニエの年貢を支払うことで、施療院の名で、永久に自由かつ平和にそれを所有することを余は望み許可する；そして上記の野原について、その上記の4ドゥニエの年貢を除いて、マンモルトが理由であれ、他の理由であれ、理由が何であるにせよ、余あるいは他の者によって、この契約に反対したり、権利主張をすることがないように、余は良心に誓って約束する。」

ここでは *et si* の後に発話行為を表す動詞、*promet* が来ており、*et si* に先行する事行 *p*、すなわち「野原所有の許可」は、連結辞 *et si* によってそれが真であると断定された後に、事行 *q* の契約遵守の約束へと繋がっていくと考えられる。しかしながら、連結辞 *si* の場合に比べると、事行 *p* と事行 *q* の同一指示性は弱いように思われる。以下の図を参照

*p* (野原所有の許可) ← *et si* (断定操作) → *q* (契約遵守の約束)

(17) 89[11] (...); *et ce don et ceste aumosne ai je faite par le grei et l-otroi de mon chier signor devant dit et si l-ai proumis a tenir bien et loialment, fermement [12] et establement, pour moi, pour mes hoirs et pour mes successours perpetuellement, sans rapel de moi ne d-autrui, de ce jour en avant.*

「(...) ;そして余は上記の親愛なる殿(Thibaut V)の恩寵と許可により、この贈与と布施を行った、そしてこれが本日以降、余と他の人にとって最終的に、余とその後継者にとって誠実に、確実にかつ安定して守られることを余は約束した。」

(17) 90[18] (...) *et ce don et ceste aumosne ai je [19] faite par le grei et l-outroi de mon chier signor devant di et si l-ai promis a-tenir bien et loyalment, fermement et establement, por moi, por [20] mes hoirs et por mes successourz perpetuellement, sanz rappel de moi ne d-autrui, de ce jour en avant.* (上の 89[11] と同一内容)。

この例でも *et si* の後には発話行為を表す動詞 *l-ai proumis, ai promis* が来ている。この論理構造は断定機能を果たす *si* の例文に似ている(例えば例文(6)-(7)と比較されたい)。以下の図を参照。

*p* (贈与と布施の周知) ← *et si* (断定操作) → *q* (契約遵守の約束)

(20) 94[28] (...) *Et ai promis par ma foi que se li dit religieux avoient domaiges ne deperz por ce que je ou mi hoir deffailsiens de-acomplir [29] ces choses, (...) nous lor rendriens et restabliriens enterinement. Et si vueil et hai otroié por moi [30] et por mes hoirs par ma foi que se nous deffailiens de faire parfaitement les choses (...) li commendemanz lou [31] roi de France ou li gardien de France (...) puissent et doivent prenre et faire prenre (...) toute nostre terre, touz noz biens (...)*

「(...)そして余は良心に誓って約束する、もし余あるいは余の後継者がこの内容を履行しないために、上記の教会関係者たちが損害や損失を被るならば、(...)我々は彼らに全てを賠償するであろう。そして、余と後継者のために良心に誓って余は望み許可をした。もし我々がその内容を完全に行うことができなければ(...), フランス国王の受託人あるいは保護官は (...)我々の全ての土地と我々の全ての財産(...)を取り上げることができ、かつそうすべきで

ある。」

やはり *et si* の後には発話行為を表す動詞、*vueil et hai otroié* が来る。しかし事行 *p* と事行 *q* の同一指示性はやはり単独の連結辞 *si* の場合に比べ弱い。以下の図を参照。

*p* (損害賠償の約束) ← *et si* (断定操作) → *q* (不履行の場合の罰則)

ところが次の例(21)では *et si* に後続する事行 *q* は、先行する事行 *p* と全く同一指示性を持たない。両者の間には断絶があり、事行 *p* と *q* はお互いに条件づけられることなく、それぞれ独立している。以下の図も参照。

(21) 1[10] (...) *Et ge retaign lo murtre et lo rat et lo larrecin, la ou cez choses seront coneues et [11] ataintes; et si retaign lo champion vencu dont j'avrai m-amende as us costumes de Troies; et si retaign la fause mesure de laquele j'avrai .XL. s., et li borjois de Troies en avront .XX. s.*

「(...)また殺人や誘拐や強盗は、それが発覚し判明したところで余が裁判権をもつ；そしてまたトロワの慣習と習慣に従って、決闘の敗者から余は罰金を得る；そしてまた偽の測定についても余が裁判権をもち、それについては余が 40 スーを、トロワ市民は 20 スーを得るであろう。」

*p* (殺人等の裁判権の周知) — *et si* (共存関係) — *q* (決闘の罰金受領)  
*p* (決闘の罰金受領) — *et si* (共存関係) — *q* (偽の測定の罰金)

結局のところ、*et si* は 3つの論理構造を併せ持っていると考えられる。例えば、(18)の例は連結辞 *si* の論理構造とほぼ同じである。ところが(17)、(19)、(20)の例では、*et si* が断定機能を果たしているものの、事行 *p* と *q* の間の同一指示性が弱く、その意味で、断定機能をもつ *et* の論理構造に似ていると言える(例文(3)12[4]を参照)。最後に(21)のように共存関係を表すこともあり、これは一般に連結辞 *et* に観察される機能である。

ある場合に *et si* は連結辞 *si* と同じ断定操作を行い、別の場合には連結辞 *et* と性格が似ている。複合連結辞 *et si* が持っているこうした論理的な複合性は、正しく形態それ自体に依っているとも考えられる。

次の例文(22)と(23)では、先程見た例(21)とは異なり、*et si* の前後に現れる 2つの事行 *p* と *q* が、それぞれ異なる主語を持っている。そのため、*p* と *q* は必ずしも同一指示的な内容である必要がなく、その結果、事行 *p* と *q* はお互いに独立した関係となる。これらの例では、*et si* は明らかに共存関係を示している。以下の図を参照。

(22) 1[6] (...) *Et est a savoir que, se [7] aucuns de la comuneté de Troies veult paier .XX.lb. en l-an, il sera quites do sairement et de la prise de cele annee vers moi. Et si lor doig et otroi la prevosté et la jostise de Troies et de lor terres et de leur [8] vignes qui sont dedanz lo finaige de Troies, si comme ge la tenoie au jor que ces lettres furent faites, por .CCC. lb. de provenisiens qu'il me rendront chascun an a Pentecoste.*

「(...)そしてもしトロワ市民が一年に 20 リーヴルを支払うつもりならば、余に対するその年の申告と課税を逃れるであろうことを知るべし。そしてペンテコステに毎年 300 リーヴルのプロヴァン貨を支払う代わりに、この文書が作成された時点で余が裁判権を持っていた、トロワの裁判管轄区の中にある彼らの土地や葡萄園とトロワ市の行政権と裁判権を

余は彼らに与え許可する。」

(23) 1[24] (...) et, se aucuns deffailloit de mon ost ou de ma chevauchie, cil qui defauroit lo m-amenderoit. *Et si* promet a bone [25] foi que ge nes semondrai en ost ne en chevauchiee por ax aquoisner fors que por mon besoig. *Et si* voil que chevax a chevauchier ne armeures a cez de la comune de Troies ne soient prises por detes ne [26] por pleges ne por autres amissions.

「(...)そして、もし誰かが余の軍隊と騎兵隊に損害を与えるならば、損害を与える者が余にそれを償うことになる。そしてまた余の必要以外に、この権力を濫用し、軍役と騎馬準備を彼らに命令することはしないと良心に誓って余は約束する。そしてまた借金や担保や他の没収品として騎馬や武具をトロワの市民から取り上げることはしないように余は望む。」

(22) p (免税措置) — et si (共存関係) — q (行政・裁判権の委譲)

(23) p (損害賠償) — et si (共存関係) — q (権力濫用の禁止)

ところが、以下の例(24)-(26)では、事行 p と q は異なる主語をとり、q の中で主語が V S O の語順で現れている。このような統辞構造は連結辞 si には見られず、連結辞 et だけに見られる構造であった (この V 章の冒頭を参照)。語順の点からも et si の複合性が明らかになる。

(24) 2[8] et cil Bartromiaus ne porra riens demander ne reclamer aus los et aus ventes de cele maison, se il avenoit qu-ele fust vendue. [9] *Et si* ont vendu cil Jehanz et sa fame sanz force et sanz contreignement a cel devant dit Bartromiau (...)

「そしてその館が売買されるのが適当であるなら、この Barthélemy はその館の権利移転と売買に関して如何なる要求もできないであろう。そしてまた強制も拘束もなく上記の Barthélemy にその Jehanz とその妻は売却をした。」

(24) 3[9] (...) et cil Bertromiaus ne porra riens demander ne reclamer aus lous et aus ventes de cele maison, se il avenoit qu-ele fust vendue. *Et si* ont vendu cil Jehanz et sa fame sanz force et sanz contreignement a cel devant-dit Bertromiau (...) (例文(24) 2[8] と同一内容)

q の主語は cil Jehanz et sa fame で、p と q はやはり共存関係にある。

(24) p (Barthélemy の要求禁止) — et si (共存関係) — q (売却の承認)

(25) 2[12] (...) Et ce sunt cil qui doivent le cens, si cum il dient et si-cum cil Jehanz et sa fame ont [13] reconeu (...) [19] (...) *Et si* ont fiancé cil Jehanz [20] et sa fame que de ces vendues il porterunt a cel Bertromiau garantie a toz jors (...)

「そして彼らが述べ、その Jean と彼の妻が認めたように、以下の者が年貢を課される者たちである(...) (...)そしてまた(...)その売買に関して Barthélemy に永久に保証をすることをその Jean と彼の妻は約束した。」

(25) 3[12] (...) Et ce sunt cil qui doivent le cens, si cum il dient et si cum cil Jehanz et

sa fame ont reconeu (...) 7] (...) *Et si* ont fiancé cil Jehanz et sa fame que de ces vendues il porterunt a cel Bertromiau garantie a toz jors envers totes (...) (例文(25) 2[12]と同一内容)

(25) p (被課税者提示) — *et si* (共存関係) — q (売買の保証承認)

(26) 4[8] (...) *et por* ceste vandue miez a tenir cele Marie an a obligié a cel devant dit Johan touz ses biens an mueble *et* [9] forz mueble, ou qu-il soient; *et si* viaut *et* otroie cele devant dite Marie que gié, Guillaumes, preoz devant diz, *et* li autre [10] preot de Troies qui après moi seront, porriens panre de ses biens (...)

「(...)そしてこの売買がより上手く成立するために、この Marie は上記の Jean に、それらが何処にあらうとも、自分の全ての動産と不動産を保証として与えた；そしてまたこの上記の Marie は、プレヴォである私こと、Guillaume や私の後継者となるであろう他のトロワのプレヴォたちが、(...)彼女の財産を没収できるように望み許可した。」

事行 q の主語は *cele devant dite Marie* である。ここでは q の中に発話行為を表す動詞 *viaut et otroie* 「望み許可する」が現れており、*et si* は断定機能を担っていると考えられる。

(26) p (担保保証) ← *et si* (断定関係) → q (担保没収の許可)

## 結論

本稿では 13 世紀シャンパーニュ地方南部の証書を資料体として、古フランス語の等位連結辞 *et* と *si* を考察した<sup>23</sup>。等位連結辞の統辞機能とは、その前後に現れる言語形式が

---

<sup>23</sup> 本論文では連結辞 *si* の異形態（恐らくは方言的異形態）である *se* とその複合連結辞形 *et se* に触れていない。しかし単独の *se* または *s-* が連結辞として機能している例は我々の資料体の中には 1 例もない。また *se* はその大多数が仮定を表す従位連結辞である。一方複合連結辞 *et se* は 2 例のみ見つかった。44[32] (...) *et porra* cil Giraus *et* ses conmandemens *et si* oir gagier es haies devant dites *et* en tout lou porpris, sans contredit [33] *et* sans reclain de justice, por les quatre livres devant dites, *se* il n-estoyent païé au termine devant devisé; *et se* li a vendu mes [34] sire Guillaumes sis sos de cens chascun an en la feste saint Remi sor maisons en la Corderie, des le premier pont jusques au secont [35] par devers la rue Nostre Dame qui vient dou marchié *si* com on i-entre a destre. (...); 46[13] (...) *et pourra* cil Girauz *et* ses counmandemanz *et si* oir gagier es haies devant dites [14] *et* en tout lou pourprins, sanz contredit *et* sanz reclain de justice, pour les

互いに範列を形成する要素であることを示すことである。これは、言語使用者が同一の時点で複数の言語形式を同時に選択できないことを解決するための一つの手段に過ぎない。

ここでは等位連結辞を連辞関係の観点ではなく、範列要素の観点から分析した。連結辞 *et* と *si* は、その連結の論理構造に若干の違いが観察された。

文と文を接続する等位連結辞 *si* の主たる機能は断定機能である。*si* に先行する文と後続する文は、それゆえ多くの場合、同一指示的な内容になり、多くの場合 *si* の直前と直後の文の主語が一致する。連結辞 *si* は、第1の事行 *p* の否定命題  $\neg p$  を想定し、これを退けることで事行 *p* が真であると断定する。それによって同一指示的な内容をもつ第2の事行 *q* は、連結辞 *si* の後に合法的に現れることが可能になる。

一方、連結辞 *et* は前後に来る文が必ずしも同一指示的な内容をもつとは限らず、内容的に断絶が生じていることも考えられる。しかし条件さえ同じであれば、連結辞 *si* と同じように断定操作を行うことができ、両者は競合することになる。

我々の資料体に関する限り、等位連結辞の範列要素としては、*et*, *si*, *eins*, 連結辞ゼロと複合連結辞 *et si* が想定される。それぞれの特徴を以下にまとめておく。

#### 文と文と連結する等位連結辞の範列

連結辞	結合可能性	OVS	VSO	VO	SVO	連結の論理構造
<i>et</i>	○	○	○	○	○	$p$ —共存関係— $q$ $p$ ---補足的付加--- $q$ $p$ ←断定操作→ $q$
<i>si</i>	X	X	X	○	X	$p$ ←断定操作→ $q$ $p$ —共存関係— $q$ (稀)
<i>et si</i>	X	X	○	○	X	$p$ ←断定操作→ $q$ $p$ —共存関係— $q$
<i>eins</i>	X			○		$p$ ←断定操作+因果関係→ $q$
連結辞ゼロ	X				○	$p$ ---補足的付加--- $q$

連結辞 *et* は目的節や理由節と結合可能であり、*et* に続く事行 *q* は統辞的に自由度が高

quatre lb. devant dites, se il n'estoient paie au-terme devant devise; *et* [15] *se li a vendu mes sires Guillaumes sis souz de cens chascun an a la-feste saint Remi sour maisons en la Corderie, (...)* いずれも事行 *p* と *q* の主語は異なり、VSOの語順になる。事行 *p* と *q* の論理関係は共存関係と考えられる。従って *et si* の場合と同じと考えてよい。

く、様々な語順(OVS, VSO, VO, SVO)が許容される。複合連結辞 *et si* は断定操作あるいは共存関係を示す。従って *et si* は連結辞 *si* と論理構造上で常に競合する関係にある。しかし統辞的には VSO という連結辞 *si* にはない語順をとることができる。連結辞 *eins* は断定操作を表すだけでなく、事行 *p* と *q* の関係は因果関係を表す。最後に、連結辞ゼロは作成年代を記載する部分に特に頻繁に現れる。

## 参考文献

川口裕司 (1994) 「古フランス語の態に関する若干の考察」, 『人文論集』 44.2, 静岡大学人文学部, pp.53-83.

--- (1996) 「文型の変異に関する若干の考察—ラテン語公文書と中世シャンパーニュ南部の公文書の関連性—」, 『言語研究 VI』, 東京外国語大学, pp.56-82.

ANTOINE Gérald (1962) *La coordination en français*, Éditions d'Artrey, Paris, 特に tome II, V. Histoire des coordinations conjonctionnelles, pp.703-1212.

BONNARD Henri et RÉGNIER Claude (1991) *Petite grammaire de l'ancien français*, Editions Magnard, Paris.

HASENOHR Genviève (1993) *Introduction à l'ancien français*, nouvelle édition, SEDES, Paris.

HERMAN József (1954) "Recherche sur l'ordre des mots dans les plus anciens textes français en prose", *Acta Linguistica Academiae Scientiarum Hungaricae*, 4, pp.69-94 et pp.351-382.

KAWAGUCHI Yuji (1994) *Recherches linguistiques sur le champenois au moyen âge: Phonétisme I*, Université de Shizuoka.

KLEIBER Georges (1978) "Sur l'emploi adversatif de *mais* et de *ainz* (ainçois) en ancien français", *Travaux de Linguistique et de Littérature*, 16, pp.271-292.

MARCHELLO-NIZIA, Christiane (1985) *Dire le vrai: l'adverbe SI en français médiéval*, Genève, Droz.

MARTINET André (1985) *Syntaxe générale*, Armand Colin, Paris.

MÉNARD Philippe, (1988) *Syntaxe de l'ancien français*, 3e éd., revue et augmentée, Editions Bière, Bordeaux.

MOIGNET Gérard (1977) "Ancien français *si/se*", *Travaux de Linguistique et de Littérature*, 15, pp.267-289.

--- (1978) "Sii et autour de *si* dans Les quinze joyes de mariage", *Travaux de Linguistique et de Littérature*, 16, pp.411-425.

--- (1979) *Grammaire de l'ancien français*, 2e éd., revue et corrigée, Editions Klincksieck, Paris.

MORLET Marie-Thérèse (1969) *Le vocabulaire de la Champagne septentrionale au moyen âge. Essai d'inventaire méthodique*, Klincksieck, Paris.

OLLIER Marie-Louise (1995) "Or, opérateur de rupture". *LINX*, 32, pp.13-31.

PONCHON Thierry (1990) "Observations sur le connecteur *mais* en français médiéval", *L'Information grammaticale*, 46, pp.47-51.

QUEFFÉLEC Ambroise (1990) "Coordonnants actuels et coordonnant virtuel en ancien français", *Revue québécoise de linguistique*, 19/1, pp.57-75.

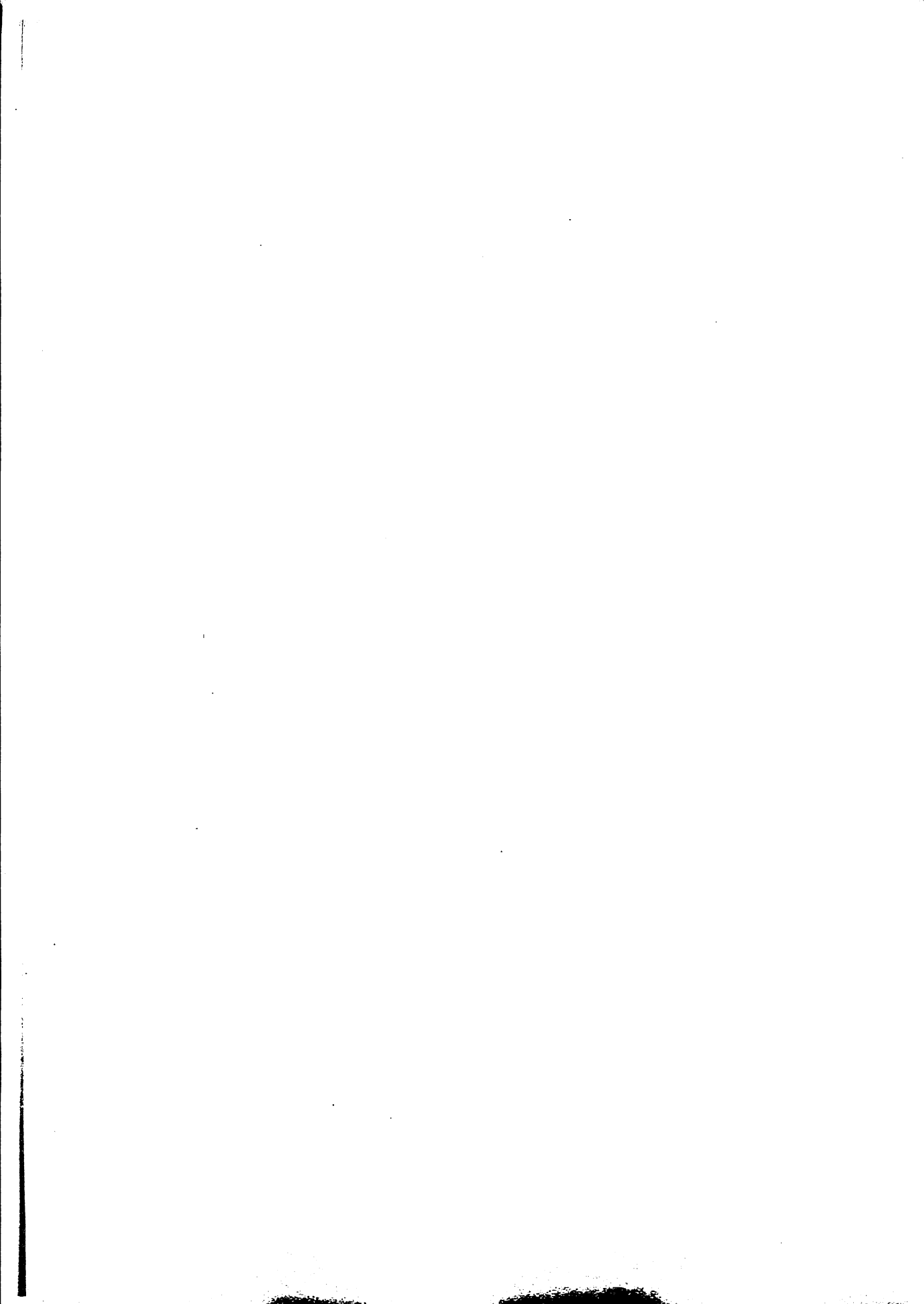
QUEFFÉLEC Ambroise et BELLON Roger (1995) *Linguistique médiévale. L'Épreuve d'ancien français aux concours*, Armand Colin, Paris.

QUEREUIL Michel (1989) "A propos de l'adverbe si: analyse de quelques exemples", *Revue des langues romanes*, 93, pp.101-107.

van REENEN, Pieter et SCHØSLER Lene (1992) "Ancien et moyen français: si <<thématique>>. Analyse exhaustive d'une série de textes", *Vox Romanica*, 51, pp.101-126.

--- (1994) "The thematic structure of the main clause in Old French: OR versus SI", in: ANDERSEN Henning (ed.), *Historical Linguistics 1993. Selected Papers from the 11<sup>th</sup> International Conference on Historical Linguistics*, John Benjamins Publishing Company, Amsterdam/Philadelphia, pp.401-419.

SOUTET Olivier (1983) "La question du car médiéval", *Travaux de Linguistique et de Littérature*, 21, pp.15-33.





## **L'indépendance phrastique: coordinations entre prédicats ou entre phrases**

Yoichiro TSURUGA

### **1. Introduction**

Comme définition de la phrase on peut lire dans *Eléments de linguistique générale* de A.MARTINET, "l'énoncé où tous les éléments se rattachent à un prédicat unique ou à plusieurs prédicats coordonnés". (*Eléments*, 1991, §4-33, p.131) Cette définition ne comprend pas "l'intonation", cela, dit MARTINET est "un sérieux avantage, étant donné le caractère marginalement linguistique de ce phénomène" (*Ibid.*)

Dans *Pierre travaille et dort dans cette chambre*, par exemple, *Pierre* et *dans cette chambre* se rattachent aux prédicats coordonnés *travaille et dort*. Et manifestement il n'y a là qu'une seule phrase. Dans *Pierre travaille dans cette chambre. Et il dort là.*, on considère traditionnellement qu'il y a deux phrases indépendantes. Et ce serait la même chose selon la définition fonctionnaliste de MARTINET. Mais ici, si l'on reconnaît *Et* comme un coordonnant, il faut aussi reconnaître que deux phrases indépendantes sont coordonnées par un coordonnant et que le coordonnant, malgré sa fonction généralement reconnue, n'altère pas l'indépendance des deux phrases. Dans *Pierre travaille dans cette chambre et il dort là.*, pourtant, traditionnellement il n'y a qu'une seule phrase. Fonctionnellement y a-t-il là une ou deux phrases ? Il y aurait deux phrases indépendantes si l'on y appliquait littéralement la définition de MARTINET, car chaque ensemble d'expansions se rattache là à *travaille* et à *dort*. Il semble que la définition de MARTINET néglige les phrases de ce genre parce que du point de vue de la construction élémentaire de la phrase fondée sur le modèle Prédicat-Expansion, les cas en questions, bien qu'ils ne soient pas marginaux, sont ceux qui dépassent le cadre d'une construction phrastique. La définition fonctionnaliste de la phrase se limite naturellement à l'intérieur d'une phrase. Mais il faut bien sûr demander s'il y a une ou deux phrases quand deux ou plus de deux phrases sont coordonnées, étant donné que les cas de prédicats coordonnés sont bien pris en considération.

Dans cet article nous nous proposons d'examiner des cas variés de coordination de prédicats et de phrases, et de chercher s'il y a une solution unitaire qui nous permet de donner une définition de phrase qui peut expliquer aussi les cas où des phrases semblent coordonnées.

## 2. Prédicats coordonnés

Jetons un coup d'œil aux exemples.

(1) [...] cet Henri qui *est et n'est pas* celui que [...]. (M.Yourcenar, *L'Œuvre au noir*, p.146)

(2) [...] laquelle de ces larves *est viable et arrive* à terme. (*Ibid.*, p.183, La page seule sera indiquée ci-dessous.)

(3) [...] que de bêtes *ont vécu et sont mortes* pour sustenter cet Henri qui est et n'est pas celui que j'ai connu à vingt ans. (p.146)

(4) [...] où *vivent et meurent* une série de philosophes prisonniers. (p.187)

(5) [...] Jacqueline *dégrafa* son corsage de drap d'argent, *et commanda* qu'on lui apportât son fils cadet [...]. (p.56)

(6) Déconcerté, Colas *promena* autour de lui ses prunelles pâles, *et se signa* en reconnaissant dans l'âtre le jeune clerc [...].(p.60)

(7) Il *entra et s'assit* dans la cheminée qu'on avait festonnée de feuillages, *et regarda* autour de lui cet Olympe humain. (p.55)

(7) est un exemple qui montre bien divers degrés de cohésion de coordination. *Entra et s'assit* font un groupe bien uni mais entre ce groupe et *regarda*, la cohésion est moins forte. La présence de la virgule, soit la pause, devant le coordonnant *et* peut y contribuer. Mais les trois prédicats sont malgré tout bien coordonnés et c'est autour de ces trois prédicats coordonnés que se forme la phrase de (7).

(8) [...] et Henri-Juste avait *convié* les notables [...], *acheté* un peu partout des provisions [...], *fait venir* [...], *et préparé* un divertissement [...]. (p.55)

Le prédicat représente le noyau d'une proposition, et quand plusieurs propositions sont reliées ou coordonnées, il s'agit de prédicats qui sont mis en relation. Mais (8) montre bien que linguistiquement et du point de vue de la coordination, ce n'est pas nécessairement un prédicat entier qui est en mis en relation. Du point de vue de la "proposition" dont le noyau correspond au prédicat, c'est autour de *avait convié*, ... *acheté* ..., *fait venir* ..., *et préparé* ... que la phrase (8) est constituée. Mais du point de vue de l'organisation paradigmatico-syntagmatique, c'est bien autour de *avait* que les trois participes passés *convié*, *acheté* et *fait* sont coordonnés. Les exemples comme (8) ne sont pas rares comme on le verra ci-dessous.

(9) Alors il se souvint qu'Henri-Juste *espérait et négociait* depuis des semaines une visite royale. (p.54)

(10) [...] personne jusque-là n'avait *contenu* dans sa poitrine tant de rancœur à l'égard de l'état de prêtrise, *ni poussé* si loin la révolte ou l'hypocrisie. (p.52)

(11) [...] les théories récemment exposées étaient ardemment *accueillies ou violemment contredites* à l'Ecole [...]. (p.52)

(12) [...] il *se leva* pour sa coutumière observation des astres, *et sortit* sur l'aire calcinée qui dans la nuit semblait blanche. (p.51)

(13) Ces trois-là, aussi seuls que des anachorètes, *avaient* à peu près *oublié* tout ce qui est du siècle *ou n'en avaient* jamais rien su. (p.51)

(14) Mai le plus souvent Zénon *partait* seul, à l'aube, ses tablettes à la main, *et s'éloignait* dans la campagne, à la recherche d'on ne sait quel savoir qui vient directement des choses. (p.48)

(15) [...] nuitamment l'héritier des Ligres *se glissa* dans l'écurie d'un maquignon de Dranoutre, *et peignit* de rose deux juments [...]. (p.48)

(16) [...] il était à la fois *méprisé* pour son indigence de bâtard *et vaguement respecté* pour futur état de prêtre. (pp.45-46)

(17) [...] les artisans solidement établis dans leurs privilèges *tordaient* le cou aux ouvriers libres *et tenaient* tête aux princes. (p.45)

(18) Thierry Loon *parlait* d'Henri-Juste avec une révérence obséquieuse, *mais jetait* à Zénon des regards de côté en déplorant les vivres insuffisants [...]. (p.44)

(19) [...] un pâle et morose apprenti [...] *lavait* les écuelles *et surveillait* le feu. (p.44)

(20) [...] l'enjôleuse *se glissa* chez lui par une nuit de lune, *monta* sans bruit l'escalier grinçant *et se coula* dans son lit. (p.40)

(21) [...] que l'âge mûr *ignore et dédaigne* [...]. (p.39)

(22) [...] un écriteau, suspendu dans l'escalier, *ordonnait* aux pensionnaires de se réunir pour l'office de Complies, *et défendait* sous peine d'amende d'introduire des prostituées [...]. (p.39)

(23) [...] le feu de ses prunelles sombres *fascinait et déplaisait* tout ensemble. (p.38)

(24) [...] L'apprenti Thomas de Dixmude, [...] *sautait* comme un chat, par jeu, sur les branlants châssis, *et marchait* dans la nuit noire des combles, balançant d'une main une lanterne ou une chope. (p.37)

(25) [...] les bandes de mendiants qui par ces termes de cherté *effrayaient* les bourgeois *et battaient* les routes. (p.36)

(26) [...] les livres *divaguent et mentent* comme les hommes [...]. (p.35)

(27) Il *apprit* à son élève le latin, [...], *et amusa* la curiosité de son écolier pour les sciences à l'aide de l'Histoire naturelle de Pline. (p.34)

(28) Six mois plus tard, à la date accoutumée, il *revint et la demanda* à son frère. (p.32)

(29) [...] si en secret elle *se réjouissait ou pleurait*. (p.32)

(30) [...] Simon Adriansen *s'approcha* d'elle *et dit* solennellement. (p.29)

- (31) Elle *traînait* sans plaisir les habits splendides [...], *mais* par rancune envers soi-même plutôt que par remords *se privait* de vins, de mets recherchés, de bon feu et souvent de linge blanc. (p.28)
- (32) L'enfant *se couvrit* le visage, *mais livra* sans lutte aux yeux, aux lèvres, aux mains de l'amant son corps propre et blanc comme une amande mondée. (p.24)
- (33) Quelque chose d'indécis *passa* dans son regard, *et s'y perdit*, comme l'humidité d'une vapeur dans un brasier. (p.20)
- (34) Sa tante l'*a souffletée et mise* au pain [...]. (p.20)
- (35) Une laide grimace *déforma* le visage du jeune clerc, *et le vieillit*: [...]. (p.19)
- (36) [...] il *se promène* dans les rues, un chapelet au poignet, [...], et vous *traite* de suppôt du Diable, de Judas [...]. (p.19)
- (37) [...] la vie *emmure* les fous *et ouvre* un pertuis aux sages. (p.18)
- (38) Il *échangeait* des plaisanteries avec les passants, *et s'informait* des nouvelles. (p.14)
- (39) [...] il *mangeait* avec rouliers le lard rance [...], *et*, le soir, *couchait* sur la paille [...]. (p.13)
- (40) [...] il [...] le soir, *couchait* sur la paille, *mais perdait* de bon cœur en tournées et en cartes les sommes économisées [...]. (p.13)
- (41) La mère du héros en herbe *remplit* ses poches de victuailles *et lui glissa* en cachette l'argent du voyage. (p.12)
- (42) Un sergent boiteux, [...], lui *avait* un soir *mimé* ses hauts faits *et décrit* les files et les sacs d'or [...]. (p.12)
- (43) [...] un de ces anabaptistes qui maintenant *pullulaient*, *et mélangeaient* la haine des riches et des puissants à une forme particulière de l'amour de Dieu. (p.53)
- (44) [...] cette industrieuse et agitée race des hommes qui *domestique* le feu, *transforme* la substance des choses, *et scrute* les chemins des astres. (p.52)
- (45) [...] l'humide bois qui *siffle et tressaille* en charbon [...]. (p.51)
- (46) [...] le signe de l'air, qui *baigne et nourrit* ces belles entités sylvestres, [...]. (p.50)
- (47) [...] les bêtes qui *courent, volent et rampent* dans les profondeurs des bois [...]. (p.49)
- (48) [...] des feux ou des eaux qui *ont jadis précipité* leur matière *ou coagulé* leur forme. (p.48)
- (49) [...] un garçon qui *parle latin et lit* dans les astres. (p.47)
- (50) [...] on se gaussait de cette sibylle qui *croyait* commander à l'eau, *mais n'avait pas su* se garer des braises. (p.46)
- (51) [...] ces ouvriers de bois ou de métal qui *ne buvaient ni ne braillaient, faisaient* à dix l'ouvrage de quarante, *et ne profitaient pas* de la cherté des vivres pour demander une augmentation de paie. (p.43)

Dans cet exemple, il y a d'abord une coordination entre deux prédicats: *ne buvaient ni ne braillaient*, ensuite une autre: *faisaient [...], et ne profitaient pas*. Mais on doit reconnaître l'existence d'un rapport entre les deux premiers prédicats et les autres qui les suivent. Pour voir mieux l'organisation, symbolisons par A, B, C, D les prédicats en question. Alors ce sera : ... *qui ne A ni ne B, C, et ne D pas*. A et B sont en coordination. Et le groupe A et B, ensuite C, ensuite D sont en coordination. Et chaque prédicat (ou des prédicats coordonnés) organise sa ou ses expansions. L'ensemble de rapports de subordination et de coordinations est donc assez complexe.

(52) [...] mais il *tremblait et suait* comme s'il avait peur. (p.63)

(53) L'apprenti Perrotin *s'arma* d'un hanap laissé sur une table *et fonça* sur Zénon. (p.64)

(54) L'homme d'affaires était la seule puissance que ces artisans *connussent et craignissent* [...]. (p.65)

(55) [...] la main-d'œuvre *renchérissait* à l'excès *ou venait* à manquer. (p.65)

(56) [...] que Madame Marguerite [...] *s'était informée* des connaissances [...], *et avait manifesté* le désir de l'admettre parmi les domestiques de sa suite. (p.67)

(57) [...] un gros homme qui *l'asseyait* sur ses genoux couvert de cuir *et chantonait* d'une voix essoufflée des plaintes allemandes. (p.69)

(58) [...] comme ma tante [...] *verrouille* la porte dès le couvre-feu *et cache* la clef sous son matelas, je laisserai [...]. (p.72)

(59) [...] un homme qui au moment du départ *donne, jette ou consacre* quelque chose [...]. (p.73)

(60) [...] il *ôta* son mince anneau d'argent, gagné au jeu [...], *et le déposa* comme un sou dans cette main tendue. (p.73)

(61) [...] il *aurait été appelé* en consultation à Gênes par Joseph Ha-Cohen, [...], *mais aurait* ensuite insolentement *refusé* de succéder au poste de ce Juif frappé d'une sentence d'exil. (p.76)

Dans cet exemple-ci, un prédicat passif et un autre actif sont en coordination. Bien entendu, toutes les expansions ne sont pas organisées par et autour de ces deux prédicats coordonnés. L'expansion dite "agent", *par Joseph Ha-Cohen*, par exemple, ne peut pas être subordonnée au prédicat actif. Dans le cas où plusieurs prédicats sont coordonnés, tous les éléments constitutifs de l'énoncé ne se rattachent pas nécessairement à tous ces prédicats coordonnés. (Cf. voir ci-dessus la définition de la phrase donnée par A. MARTINET.) Remarquons que dans (61), il s'agit bien de deux prédicats (deux ensembles prédicatifs) et non de deux phrases indépendantes qui sont en coordination, car la fonction sujet *il* est bien commune aux prédicats.

Les exemples comme (61) sont fréquents. En tenant compte de diverses organisations de coordination, il n'y a pas de raison pour mettre en relief les cas seuls où toutes les expansions sont subordonnées à un prédicat ou à plusieurs prédicats coordonnés. La définition de la phrase serait meilleure si on la modifiait comme suit: **l'énoncé où tous les éléments se rattachent à un prédicat et où tous les éléments y compris le prédicat et même une partie d'un élément peuvent être mis en divers rapport de coordination.**

(62) [...] selon les goûts de ceux qui *répandaient ou inventaient* ses aventures. (p.76)

(63) La chanoine, qui se connaissent peu en ces matières, *lut et relut* le court traité [...]. (p.77)

(64) [...] elle *gardait* encore l'étroit anneau [...], *mais* n'*ignorait* pas que sa tante avait pour elle de sérieux projets. (p.78)

(65) Tandis que les femmes *pliaient* la nappe *et rangeaient* la vaisselle [...]. (p.78)

(66) [...] Bartholommé Campanus *tournaient et retournait* avec le vieux curé ces minces bribes d'information [...]. (p.78)

(67) [...] qui n'*entend* plus que confusément le bruit de la tempête, *mais continue* à juger avec la même habileté le pouvoir [...]. (p.80)

(68) [...] les trésors d'outre-mer étaient *recueillis et rangés*. (p.80)

(69) [...] Simon Adriansen ne *choisissait* pas, *ou* plutôt, par dégoût des lois humaines, *choisissait* ceux qui passent pour les pires. (p.81)

(70) [...] Hilzonde pour recevoir ses hôtes *se parait* de robes magnifiques [...] *et puisait* dans les plats à l'aide d'une louche d'argent. (p.81)

(71) Chaque fois, Simon *inclinaient* la tête *et disait*: [...]. (p.81)

(72) Enfin, une fille *naquit et vécut*. (pp.81-82)

(73) [...] qui *se penchaient* avec lui sur des portulans *et dressaient* des cartes à son usage [...]. (p.82)

(74) Il l'*appela* à voix basse, *s'assura* qu'elle ne dormait pas, *s'assit* lourdement [...], *et*, comme un marchand [...], lui *fit* part des conciliabules [...]. (p.84)

(75) [...] les aides [...] furent *forcés* d'apprêter les mets, *puis tués* par la foule [...]. (p.88)

(76) Hans Bockhold *consentait* par humilité à se laisser appeler [...] *mais prenait* aussi devant ses fidèles un autre nom [...]. (p.89)

(77) [...] qui *emporte* aussi la mort *et coule* comme du sang d'ange. [...]. (p.91)

(78) [...] les affamés *happaient* le cou ou les pattes de poules que le Roi daignait leur jeter, *et l'imploraient* de les bénir. (p.91)

(79) Tout à coup, le Roi *levait* les mains *et priait*, [...]. (p.91)

(80) Une nuit, il *fit* entrer Hilzonde dans l'arrière-salle, *et souleva* ses robes pour exhiber aux jeunes Prophètes la blanche nudité de l'Eglise. (p.91)

(81) Vers le soir, les travailleurs *s'arrêtaient et restaient* [...]. (p.93)

(82) Hilzonde *allait et venait* sans cesse[...]. (p.93)

(83) [...] elle *ouvrait* la bouche *et suçait* cette fraîcheur. (p.93)

(84) Des gens *se vantaient* d'avoir goûté [...], *ou* pis encore, tout comme des bourgeois [...] *se targuaient* tout à coup de fornications [...]. (p.94)

(85) [...] qui *vendent* leur vie pour une paie bien déterminée, *boivent et mangent* à heure fixe, *rapinent et violent* à l'occasion, *mais ont* quelque part une vieille mère, une femme économe, une petite métairie où [...], *vont* à la messe [...], *et croient* modérément en Dieu. (p.97)

Dans (85), pour voir mieux les regroupements de prédicats, remplaçons les prédicats par A, B, C, D, E, F, G et H. Alors les relations de regroupement par coordination de (85) seront comme suit: A, B *et* C, D *et* E, *mais* F, G, *et* H. Le coordonnant *mais* coordonne A, B, C, D, E, d'une part et de l'autre F, G, H. Dans la première moitié, B et C sont fortement regroupés comme le sont D et E, mais A, (B *et* C), (D *et* E) ne sont qu'en rapport d'asyndète, rapport nettement plus relâché. La seconde moitié F, G et H sont fortement coordonnés par *et*. Mais il faut bien voir que la première moitié et la seconde sont bien coordonnées par *mais*. Plusieurs prédicats peuvent être coordonnés pour constituer un centre de phrase, mais cela ne signifie pas du tout que les relations entre ces prédicats et toutes leurs expansions soient simples et cohérentes.

(86) Elle *saisit* par la main la petite Martha qui se mit à crier *et lui dit*: [...]. (p.98)

(87) Un des hommes lui *arracha* l'innocente *et la jeta* à Johanna qui [...]. (p.98)

(88) Elle *se laissa* tomber sur ce tas encore chaud, *et tendit* la gorge. (p.98)

(89) Il *s'en voulait* de l'avoir laissée seule traverser cette mauvaise passe, *puis se disait* que chacun a son lot, [...]. (p.101)

(90) Simon Adriansen *écarta* les gardes, *et réussit* à passer le bras entre les barreaux. (p.104)

(91) [...] elle *commanda* son coche [...], y *empila* des vivres et des couvertures, et *roula* vers Münster à travers une région [...]. (p.105)

(92) [...] aux coutumes du monde qu'il *quittait* et *n'essayait plus de réformer*. (p.106)

(92) soulève un problème intéressant. Pour voir plus facilement la coordination en question, modifions (92) et supposons l'énoncé *Il quitte mais essaye de réformer les coutumes*. Ce sont *quitte* et *essaye de réformer* qui sont en coordination. Mais sémantiquement c'est *réformer* qui est mis en coordination avec *quitte*. *Essaye de* ajoute quelque chose comme une modalité à *réformer*. Mais c'est *essaye* qui est un prédicat et *de réformer* est son expansion. Dans l'énoncé en question donc, il est difficile de dire

que la phrase soit organisée autour de plusieurs prédicats coordonnés, malgré plusieurs prédicats qui existent et qui se trouvent, en quelque sorte, en coordination.

(93) [...], s'étaient *surveillés*, *conseillés* de loin, *soutenus ou nui* depuis plus de trente ans. (p.109)

Ce sont des parties de prédicats qui sont en coordination. Il faut bien voir que l'unité minimale qui peut être mise en coordination n'est pas nécessairement un monème, unité minimale significative. Elle peut être plus petite qu'un monème. Et n'oublions pas qu'en (93), *s(e)* n'assume pas la même fonction syntaxique par rapport aux 4 prédicats (ou plus exactement, parties des 4 prédicats) coordonnés.

(94) [...] que l'Electeur Palatin ou le duc de Bavière *gageaient* leurs bijoux [...] *et* lui *mendiaient* un prêt à un taux [...]. (p.110)

(95) [...] qui *se voient*, *se touchent et se confisquent*, mais dont [...]. (p.110)

(96) Ce Zébédée, [...], *mettait* ses infractions sur le compte de ses amis libertins, maintenant justement punis, *et* ne *cachait* pas l'envie de rentrer [...]. (p.113)

(97) [...] elle *refusait* d'abord, *puis* *trouvait une joie d'enfant* à danser. (p.114)

A première vue, dans (97), ce sont les parties prédicatives *refusait* et *trouvait une joie d'enfant à danser* qui sont coordonnées par le coordonnant adverbial *puis*. Mais en fait on voit qu'il faudrait comprendre *refusait de danser*, bien que *de* ne soit pas là.

(98) [...], qui *prend* l'eau bénite à l'église *et* *baise* l'Agnus-Dei. (p.114)

(99) [...] qui *rôdaient* de ville en ville, [...], *et finissaient* sur la paille, [...]. (p.117)

(100) Pour tourner le feuillet, Martha *attendait* Bénédicte à la fin de la page *et*, si par hasard la petite s'assoupissait dans cette sainte lecture, lui *tirait* doucement les cheveux. (p.118)

(101) Bénédicte *aimait* sa mère, ou plutôt ne *savait* pas qu'elle pût ne pas l'aimer. (p.122)

(102) Martha *portait* les plateaux et les piles de linge, *mais* *s'arrangeait* pour ne jamais entrer dans la chambre. (p.123)

(103) Elle *pria* qu'on lui tînt sa chemise fine [...], *et fit* de vains efforts pour se lisser les cheveux. (p.124)

(104) Il *consentit* à s'aventurer sur le plaisir *et* *montra* une sollicitude décente. (p.124)

(105) Il *demanda* si c'était la maison Fugger *et* *entra* sans cérémonie. (p.125)

(106) Debout dans la ruelle, il *rejeta* le drap, *et découvrit* le mince corps [...]. (p.126)

(107) La petite *jasait ou chantonnait* faiblement entre deux toux rauques: [...]. (p.126)



(108) L'homme vêtu de rouge *laisa* retomber le drap *et prit* comme par acuit le pouls [...]. (p.126)

(109) Il *mesura* ensuite quelques gouttes d'un élixir *et introduisit* dextrement une cuiller [...]. (p.126)

(110) Il ne lui *accorda* qu'un coup d'œil, *et s'absorba* dans l'observation des effets du remède. (p.127)

(111) Il *mit* la pièce sans la regarder dans la poche de sa houppelande *et sortit*. (p.128)

(112) [...]; il *allouait* une maigre rente à sa femme, *et s'arrangeait* pour tenir à distance cette ménagère aux yeux bordés de rouge. (p.131)

(113) Mais il *est bizarre et ne veut* soigner personne. (p.136)

(114) [...]; le fait est qu'il *guigne* Sienne, ne *se console* pas d'être exilé de Florence *et espère* y regagner un jour le terrain perdu. (p.138)

(115) Monseigneur *fabrique* de petits vers badins *et choie* exagérément ses pages. (p.138)

(116) Le jeune valet roux *apporta* du vin *et ressortit* en sifflant. (p.139)

(117) [...]; elles *protègent* celui qui les porte, *et n'empêchent* pas dessous d'être tranquillement nu. (p.139)

(118) Ces plats raisonneurs *portent* aux nues leurs semblables *et crient* haro sur leurs contraires; [...]. (p.141)

(119) [...], mais peu me chaut que le sang *descende ou remonte* la veine cave; [...]. (p.142)

(120) [...], je ne *m'en soucie* guère en ce moment où je marche, *et m'en soucierai* moins encore [...]. (p.142)

(121) A ce moment, un moine mendiant *frappa* à la porte *et s'en alla* muni de quelques sous [...]. (p.143)

(122) [...] *et dont* le temps a *altéré* la couleur *et retouché* la forme. (p.146)

Dans (122), formellement la phrase est construite comme si c'était l'auxiliaire *a* qui était au centre de la phrase. Le centre est fonctionnellement bien sûr la partie prédicative *a altéré ... et retouché* où les deux participes passés, constituants de prédicats, sont coordonnés.

(123) [...]: cet honnête forban *se cassa* la jambe à deux pas de ma porte, *et m'offrit* en échange de mes soins passage sur sa tartane. (p.146)

(124) [...]: les princes *veulent* des engins pour augmenter [...], *et défrayent* pour un temps le coût de nos fourneaux; [...]. (p.146)

(125) [...] ; il ne s'ensuit pas qu'ils *nous déterminent ou puissent nous incliner*. (p.149)

Dans (125), ce sont *nous déterminent et puissent nous incliner* qui sont en coordination. Formellement ce sont les noyaux des deux parties en question qui sont en coordination: *déterminent et puissent*. Mais sémantiquement ce sont *déterminent et incliner* qui sont plutôt en rapport de coordination, avec *puissent* comme une modalité de *incliner*. (125) est à comparer avec (92), ci-dessus.

(126) Fi de ces joues qui *cessent* vite d'être lisses, *et s'offrent* à l'amant bien moins qu'au barbier! (p.152)

(127) [...]; tandis qu'ils *supplient et se débattent* encore, ils lisent dans nos yeux un verdict qu'ils n'y veulent pas voir. (p.154)

(128) Henri-Maximilien, se levant, *s'approcha* de la fenêtre *et fit* remarquer:[...]. (p.155)

(129) [...]; il *ordonna* qu'on les étalât sur un lit, *et voulut* qu'on le couchât pour rendre l'âme sur cette toison [...]. (p.156)

(130) [...] elles *nettoient* le cœur de tout désir profane *et donnent* envie de pleurer. (p.158)

(131) [...] que cette chair soutenue [...], ce tronc joint [...], *contiennent et peut-être produisent* un esprit qui tire parti de mes yeux. (p.159)

(132) [...]; j'ai *observé* les astres *et examiné* l'intérieur des corps. (p.159)

(133) [...] des conduits qui *propageraient* le feu comme d'autres astres propagent l'eau *et tourneraient* au profit des distillations et des fontes le dispositif [...]. (p.161)

(134) [...]: je *me suis surpris* à le faire, *et me suis* chaque fois *réprimandé* comme on réprimande un valet malhonnête, [...]. (p.160)

(135) L'alchimiste *ferma* la porte *et suspendit* l'énorme clef sous une poutre où son valet saurait le trouver. (p.163)

(136) --- Nostradamus à Paris *prédit* l'avenir *et exerce* en paix. (p.164)

(137) Brusquement Henri-Maximilien *s'arrêta*, *tira* de sa poche un calepin *et commença* à lire à la lueur d'une chandelle [...]. (p.165)

(138) Vous *pourriez* être heureux *et menez* pourtant une vie misérable, soumis chaque jour à une gêne pire que la veille. (p.166)

(139) Henri-Maximilien *s'attarda* un instant, *repartit*, *revint* sur ses pas, *puis s'éloigna* pour tout de bon en sifflant sa vieille ritournelle:[...]. (p.166)

(140) Pendant la nuit, la pluie *recommença*, *puis tourna* à la neige. (p.167)

(141) Monsieur de Montluc ne *se montrait* à l'habitant qu'après avoir frotté [...], *et dissimulait* derrière sa main bien gantée les bâillements de la faim. (p.172)

(142) Elle *se redressa*, les paupières soudain tremblantes, *et*, rapidement, d'un geste presque furtif, *se pencha* vers le donateur *et lui baisa* la main. (p.175)

(143) [...]; il avait ressenti dans son propre corps le feu qui *dévore* le héros *et l'emporte* au ciel. (p.176)

(144) En vain, Zénon lui rappelait que les astres *inclinent* nos destinées, *mais* n'en *décident* pas, et qu'aussi fort, [...]. (p.179)

(145) [...] un bateau de pêche [...] par le moyen duquel il *gagna* Stockholm, *et* de là *prit* passage pour Kalmar, *puis vogua* vers l'Allemagne. (p.181)

(146) Sitôt après la visite au petit Roi malade, les deux hommes *sortirent* ensemble du Louvre *et prirent* par les quais. (p.184)

(147) Depuis qu'Etienne Dolet, son premier libraire, avait été *étranglé et jeté* au feu pour opinions subversives, Zénon n'avait plus publié en France. (p.185)

(148) Au petit matin, il *se leva* de son siège, *s'étira*, *bâilla et jeta* au feu ses feuilles et la plume dont il s'était servi. (p.186)

(149) Ce professeur qui [...] ne *dédaignent* pas [...], *pria* à dîner le savant étranger *et le garda* la nuit sous son toit. (p.182)

(150) Il vous *nourrira* d'oignons crus, *et vous fera* écumer sa soupe de cuivre épicée au soufre. (p.17)

### 3. Phrases coordonnées

Ci-dessus on a vu que la coordination entre prédicats ou parties prédicatives peut être assez complexe. La coordination est en quelque sorte un rapport de regroupement, et le regroupement, surtout quand il y a plusieurs prédicats, peut être diversement organisé.

Ci-dessous nous verrons des cas où des phrases, qui peuvent bien sûr être indépendantes, sont coordonnées ou regroupées par le rapport de coordination. Le statut du coordonnant lui-même peut être en question.

(151) Le soir, après l'étude, Zénon *rejoignait* à la dérobée son compère, jetant une poignée de graviers contre la vitre de la taverne [...]. *Ou bien*, presque en cachette, il *se faufilait* dans le coin d'entrepôt désert où Colas logeait avec ses machines. (p.36)

(152) *Ces ouvriers* drapiers [...] *étaient une partie* des divertissements projetés pour la fête. *Mais une bagarre* survenue l'avant-veille dans un atelier *avait transformé* le progrès des artisans en une sorte de chahut d'émeute. (p.59)

(153) *Elle se demandait* à part soi si le Grand Argentier consentirait [...], *car on sait* ce que valent les traités de paix. (p.57)

(154) [...]; *ses détracteurs* l'*accusaient* tout bas d'aimer les femmes, tout en convenant que [...], *car il est plus beau*, déclaraient-ils, pour la femme d'assumer la condition [...]. (p.56)

(155) [...], *la flatterie et l'intrigue* lui *parurent* des arts [...], *et la place* de [...] *préférable* à celle de [...]. *Puis, l'arrogance* de la vingtième année *l'emporta*, *et l'assurance* que la fortune d'un homme *dépend* de sa nature [...]. (p.55)

Quand il s'agit d'une coordination entre deux énoncés qui peuvent être indépendants, le statut du coordonnant peut être en question. Dans (152), par exemple, il y a deux phrases indépendantes *Ces ouvriers drapiers étaient une partie...* et *une baigne survenue l'avant-veille avait transformé le progrès...* Et il y a, au début de la seconde phrase, le coordonnant *mais*. *Mais Mais une baigne survenue l'avant veille avait transformé le progrès...* est aussi une phrase indépendante.

A parler plus exactement, si l'on reconnaît le statut de coordonnant à *Mais* dans (152), il n'y a là qu'une seule phrase malgré la majuscule de *Mais* ou malgré, peut-être, la coupure intonative entre les deux énoncés. Mais inversement si l'on reconnaît là deux phrases indépendantes, le *Mais* en question ne peut plus avoir le statut de coordonnant. Si donc on considère comme une phrase indépendante la seconde moitié de (152), *Mais* ne peut plus être un coordonnant mais un simple élément adverbial. Cette interprétation peut paraître étrange, mais la distinction entre les coordonnants du genre *et*, *mais*, d'une part, et de l'autre, les adverbiaux comme *Puis* dans (155) n'est pas nécessairement nette. A. MARTINET aussi donne une interprétation semblable.

"----- *Un point que je voudrais soulever est celui de mais. Si j'ai bien compris, vous distinguez deux mais.*

Non, c'est le même *mais*; le sens est le même, c'est-à-dire «adversatif». Dans un cas, lorsqu'on ne coupe pas la phrase avant *mais*, il est un élément de liaison entre deux éléments de cette phrase; à l'initiale, il n'est plus syntaxiquement un élément de liaison, mais une détermination de prédicat. Il y a transfert de la classe des fonctionnels à celle des adverbes. «Transfert» implique maintien de l'identité du monème.

[...] Il faut bien comprendre que la définition que je donne de la phrase est en fait une stipulation; j'appelle «phrase» l'ensemble des éléments qui se rattachent à un même prédicat sans qu'il y ait de liaison syntaxique entre aucun des éléments de ce tout et un autre énoncé. Hors de la phrase, il n'y a pas de syntaxe. On entre dans la sémantique. C'est donc un énoncé dont nous stipulons l'indépendance. De ce fait, nous devons donner aux monèmes impliqués un statut qui est fonction de cette indépendance. Comme l'adversativité ne peut se faire qu'en rapport avec des éléments hors de la phrase, son statut devient adverbial puisque le seul rapport syntaxique qu'établisse *mais* est avec le prédicat. (A. MARTINET, *Mémoire d'un linguiste*, *Vivre les langues*, Entretiens avec Georges Kassai et avec la collaboration de Jeanne Martinet, Paris, Quai Voltaire, 1993, pp. 341-342)

Cette interprétation soulève d'autres problèmes, car si deux énoncés reliés par un coordonnant constituent une seule phrase indépendante, et si deux énoncés reliés par le

même coordonnant, fonctionnant pourtant comme un adverbial, donnent deux phrases indépendantes, alors, un discours ou un texte qui sont normalement considéré comme composé de plusieurs phrases indépendantes, peuvent eux-mêmes être considérés comme constituant une seule phrase indépendante composée de plusieurs énoncés qui sont en rapport de coordination ou d'asyndète. En effet, cette question a été négligée jusqu'ici. Mais elle ne paraît pas avoir une importance capitale, car on peut bien reconnaître cette interprétation mais sans avoir grand profit évident. Que peut-on gagner dans l'analyse syntaxique, voire dans celle du discours en disant qu'un texte entier est une seule phrase indépendante composée de plusieurs énoncés qui sont en rapport de coordination ou d'asyndète ? Il s'agit de savoir s'il y a ou non un contexte large où le discours en question fonctionne comme une seule unité, ou autrement dit, où le discours ainsi regroupé ait une "fonction" commune par rapport au reste.

(156) *La Régente des Pays-Bas*, en route vers Malines, *s'arrêtait* pour une nuit dans la maison [...], *et Henri-Juste avait convié* les nables du lieu, *acheté* un peu partout des provisions [...], *fait* venir de Tournai les musiciens de l'évêque, *et préparé* un divertissement [...]. (p.54)

(157) *On l'appelait* la Paix des Dames, *car deux princesses* que [...] *avaient* tant bien que mal *assumé* [...]. (p.54)

(158) Un peu plus loin, *il lui arriva* de rencontrer un tisserand congédié, [...], *et il enviait* ce gueux d'être moins contraint que lui. (p.53)

(159) *Zénon commiserait* dédaigneusement ces visionnaires [...], *mais le dégoût* de l'épaisse opulence [...] *le mettait* malgré lui du côté des pauvres. (p.53)

(160) *Le clerc pensa* à Pythagore, à Nicolas de Cusa, [...], *et un mouvement* d'orgueil *le prit* à l'idée d'appartenir [...]. (p.52)

(161) *Le clerc se sentait* libre [...]. *Mais le mot* mort n'était encore qu'un mot pour cet homme de vingt ans. (p.50)

(162) [...]; *il retrouvait* dans chacune [...] l'hieroglyphe [...]. *Mais ces montées* s'équilibraient d'une descente: [...]. (p.50)

(163) Assis sur un tertre, regardant [...], *il songeait* aux temps révolus durant lesquels la mer avait occupé ces grands espaces où poussait maintenant du blé, leur laissant dans son retrait la conformité et la signature des vagues. *Car tout change*, et la forme du monde, et les productions de cette nature [...]. *Ou* encore, son attention devenue tout à coup fixe et furtive comme celle d'un braconnier, *il se tournait* vers les bêtes qui courent, volent et rampent [...]. (p.49)

Ci-dessus, trois énoncés sont en coordination: *il songeait aux temps... Car tout change... Ou il se tournait...* Pour voir mieux les rapports, symbolisons (163) par: A. *Car* B. *Ou* C. Dans l'ordre de séquence, il y a deux coordinations: A. *Car* B. et B *Ou* C. Mais du

point de vue des liens sémantiques *Ou* coordonne plutôt *A* et *C* (et non *B* et *C*). Alors quel serait le lien entre *B* et *C* ? Il semble difficile d'y reconnaître un lien quelconque positivement exprimé. C'est que *Car B* est sémantiquement proche d'un énoncé subordonné à *A*.

(164) *Henri-Maximilien enjambait le balcon, [...]. Mais l'espoir d'une coureuse à culbuter au bord d'une route [...] le ranimait vite.* (p.47)

(165) [...]; [...]; *un hameau aux toits bas se cachait sous le moutonnement des meules. Mais le temps n'était plus où Zénon aurait pu s'étendre près des feux de la Saint-Jean au côté des ouvriers de ferme, [...].* (p.47)

(165) ressemble à (163) en ce que le coordonnant *Mais* ne coordonne pas simplement les deux énoncés qui vient avant et après lui. Dans (163) et (165) il y a quelque chose qui indique clairement l'agencement complexe de coordination d'énoncés: la présence de *car* et la ponctuation par ";". Mais l'agencement peut être complexe sans aucune indication externe de ce genre. C'est justement le début de l'organisation complexe du discours. Comme le disait Z.HARRIS, en dehors de la limite d'une phrase, l'organisation des éléments devient assez lâche, c'est-à-dire, très complexe.

(166) *Zénon suggéra des ajustements, mais le nouveau contre-maître n'en parut point faire cas.* (p.45)

(167) [...]; *il appréciait l'ingéniosité [...], mais cette cadence trop rapide épuisait les hommes, et ces commandes compliquées demandaient plus de soin et d'attention que n'en possèdent des doigts et des caboches d'artisans.* (p.45)

(168) *Un petit homme [...], montra à Zénon les machines [...]. Mais d'autres problèmes préoccupaient désormais le clerc; [...].* (p.44)

(169) [...]; *dix lieux à peine séparaient Oudenove des splendeurs pompeuses de Dranoutre, mais la distance aurait aussi bien pu être celle du ciel à l'enfer.* (p.44)

(170) [...]; *le seigneur de Croy, [...], avait récemment consenti à tenir sur les fronts un fils [...], et on avait pris date avec cette Excellence pour faire [...].* (p.43)

(171) *Cet été-là, un peu avant l'août, Zénon alla comme chaque année se mettre au vert dans la maison de champs du banquier. Mais ce n'était plus, comme autrefois, dans la terre qu'Henri-Juste avait possédée de tout temps [...].* (p.42)

(172) *On le blâma d'abandonner si promptement cette fille [...]; et son dédain relatif des femmes le fit soupçonner d'un commerce avec les esprits succubes.* (p.41)

(173) [...], *une rixe s'ensuivit qui tourna en bataille rangée, et la belle Jeannette elle-même, [...], accorda à son insulteur blessé un baiser de sa bouche [...].* (p.40)

(174) [...]; *un écriteau*, [...], *ordonnait* [...], *et défendait* [...]. *Mais ni les odeurs, ni la suie* [...], *ni l'aigre voix* [...], *ni les murs* [...], *ni les mouches* [...] *ne dérangeraient* de ses calculs cet esprit [...]. (p.39)

(175) *On s'accordait* à le trouver beau, *mais sa voix coupante faisait peur*; [...]. (p.38)

(176) *La vie des bacheliers était large et joyeuse*; *on le convia* à des festins où il ne but de l'eau claire; et les filles au bordel lui plurent autant [...]. (p.38)

(177) Des héros de Plutarque, [...], *le garçon ne retenait* plus qu'une seule chose, *et c'est que l'audace de l'esprit et de la chair les avait menés aussi loin* [...]. (p.38)

(178) [...], *il écoutait* les divagations de Zénon [...], *et un petit sifflement* d'admiration lui *sortait* des lèvres. (p.36)

(179) *L'ingéniosité* de Zénon *dépassait* de beaucoup celle [...], *mais les mains épaisses* de l'artisan *étaient d'une dextérité* dont [...]. (p.36)

(180) Chaque année, *des ateliers fermaient* en ville; *et Henri-Juste* qui se vantait de garder [...] *profitait* du chômage pour ronger périodiquement les salaires.(p.35)

(181) *Simon Adriansen se chargeait* de Zénon. *Mais l'enfant*, poussé par Hilzonde [...], *cria, se débattit, s'arracha* farouchement à la main maternelle et [...]. (p.33)

(182) [...], *Simon consentit* à ce que les noces fussent célébrées [...]. *Mais le soir*, [...], *il réadministra* à sa manière le sacrement en rompant le pain [...]. (p.33)

(183) *Jacqueline*, sa chère femme,[...], *se plaignait* bruyamment de ne passer dans la faille qu'après une putain [...] *et le beau-père*, [...], *s'autorisait* de ces cris pour retarder le paiement de la dot. *Et, en effet*, [...], *le moindre hochet* accordé à l'enfant [...] *mettait* la guerre entre les deux femmes. (p.33)

(184) *Ses mains restaient* étendues sur la trame, *et ces longs doigts* [...] *faisaient* penser aux entrelacs de l'avenir. (p.32)

(185) *Simon n'écouta* qu'avec dédain ces vagues bruits sortis de la sentine romaine. *Mais, une semaine plus tard, un rapport* reçu par Henri-Juste *confirma* ces dires. (p.31)

(186) [...]; *elle l'attendait*, et, la main dans la main, *ils parlaient* de l'église en esprit qui remplacera l'Eglise. (p.31)

(187) [...], *Simon disait* en lui parlant [...]:

--- Votre époux.

*Et il rappelait* gravement que toute union est indissoluble devant Dieu. (p.31)

(188) Parfois, *un sourire* crédule [...] *passait* sur ce grand visage ferme, *et dans cette calme voix l'intonation* par trop [...]. *Mais Hilzonde n'était sensible* chez cet étrange qu'à sa tranquille bonté. (p.31)

(189) Hilzonde alors se mit à trembler. [...]. [...], *il avoua* hésiter encore à faire [...]. A l'en croire, *les Justes* [...] *formaient* [...]; *le péché n'était* que *dans l'erreur*; pour les cœurs chastes, la chair était pure.

*Puis, il lui parla* de son fils. (p.30)

On peut symboliser (189) par : "A. [...]. B; C; D. Puis, E." Il y a des phrases indépendantes qui se suivent. Du point de vue de la suite des idées, *Puis* ne coordonne pas E avec D, ni avec B, ni avec [...]. Il y a en fait un rapport de coordination entre A et E établi par *Puis*. "[...]. B; C; D". n'est qu'une insertion qui est mise entre A et B coordonnés. Sémantiquement, "[...]. B; C; D" n'est qu'une explication insérée entre les deux éléments coordonnés. Mais dans quelle mesure peut-on justifier syntaxiquement cette caractéristique sémantiquement subordinatoire de "[...]. B; C; D" qui n'est formellement aucunement indiquée ?

(190) [...], *il avoua* hésiter encore à faire [...], *mais il avait répudié* en secret les pompes périmées, [...]. (p.30)

(191) *Hilzonde* alors *se mit* à trembler. *Mais cet homme* sévèrement doux *commença* de lui dire le souffle de [...]. (p.30)

(192) [...]; *il respectait* Simon au point de se retenir de trop boire en sa présence. *Mais la tentation des vins était grande*. (p.29)

(193) [...], *elle arrêtait* pour mieux entendre son travail de dentelle, cassant parfois machinalement un fil [...]. *Puis, les hommes déploraient* l'ensablement du port, [...]; *on se moquait* de l'ingénieur [...]. *Ou bien, de grasses plaisanteries circulaient*; [...]. (p.28)

(194) [...] *eût pu* facilement négocier pour sa sœur [...], *mais le souvenir* de l'homme [...] *suffisait* à détourner Hilzonde du pesant bourgeois [...]. (p.28)

(195) *Il lui eût déplu* d'être accusée de mensonge, [...]. *Mais* quelques mois plus tard, ayant mis au monde un enfant mâle, *elle ne se crut* pas le droit de laisser ignorer [...]. (p.27)

(196) Peut-être *n'avait-il pas d'âme*. Peut-être *ses soudaines ardeurs* n'étaient que le débordement [...]; peut-être, acteur magnifique, *essayait-il* sans cesse une façon [...]; *ou plutôt n'était-ce qu'une succession* [...]. (p.26)

(197) Le soir, assis devant le feu, *l'amant et l'amante regardaient* ensemble une grande améthyste [...], *et le Florentin enseignait* à Hilzonde les mots de son pays [...]. (p.25)

(198) A l'aube, *une Hilzonde* enfin conquise *s'abandonna* tout entière, *et*, le matin, grattant du bout des ongles la vitre blanche de gel, *elle y grava* à l'aide d'une bague de diamant ses initiales [...]. (p.24)

(199) *Des paupières* nacrées, presque roses, *sertissaient* ses pâles yeux gris; *sa bouche* un tuméfiée *semblaient* toujours pâles [...]. *Et* peut-être ne *désirait-on* la dévêtir que parce qu'il était difficile de l'imaginer nue. (p.24)

(200) *La Maison Ligre*, [...], *était tenue* avec une opulence princière; *on y mangeait* bien; *on y buvait* mieux encore; *et* quoique Henri-Juste ne lût que les registres de sa draperie, *il tenait* à honneur d'y avoir des livres. (p.23)

(201) *Ce fut lui*, [...], qui emporta l'adhésion [...]. *Puis*, comme une lettre de sa mère [...], *il décida* de récupérer sur-le-champ ces sommes [...]. (p.22)



(202) [...]; *on lui promet* presque l'évêché de Nerpi, *mais la mort* inopinée du Saint-Père *retarda* cette promotion. (p.22)

(202) *Sa mère se nommait* Hilzonde, *et son père*, Alberico de' Numi, *était un jeune prélat* [...]. (p.21)

(203) --- Tant pis, *dit-il*. Quoi de commun entre moi et cette petite fille souffletée ? Un autre m'attend ailleurs. Je vais à lui.

*Et il se remit* en marche. (p.20)

(203) est un exemple intéressant. L'insertion *dit-il* est en quelque sorte un élément qui est subordonné au reste. Mais le coordonnant *Et* relie ce *dit-il* et *il se remit...* de l'énoncé suivant.

(204) *Sa tante l'a souffletée et mise* au pain et à l'eau *mais elle tient* bon. (p.20)

(205) Ne me *parlez* ni de machines ni de cous rompus, *et je ne vous parlerai* ni des juments fourbues [...], ni de filles [...]. (p.19)

(206) --- Le monde est grand, *dit Henri-Maximilien*.

--- Le monde est grand, *dit gravement Zénon*.

Plaise à Celui qui Est peut-être de dilater le cœur humain à la mesure de toute la vie.

*Et de nouveau, ils se turent*. Au bout d'un moment, [...]. (p.19)

(207) *La route est longue, mais je suis jeune*. (p.180)

(208) --- *Les lansquenets* [...] me *charment* autant que [...], répliqua Henri-Maximilien. *Et puis d'ailleurs, il n'y a qu'en France* qu'on sert bien les dames. (pp.15-16)

(209) [...]; *le Recteur Magnifique* à Louvain *s'arrache* la barbe de votre absence, *et vous reparaissez* au tournant [...]. (p.15)

(210) *Son beau visage*, toujours aussi blême, *paraissait rongé*, *et il y avait* dans sa démarche une sorte de précipitation farouche. (pp.14-15)

(211) *Il tourna* la tête sous son capuchon d'étoffe brune, *et Henri-Maximilien reconnut Zénon*. (p.14)

(212) A midi, [...], *il riait* aux éclats d'une joyeuseté [...], *ou encore*, plus rêveur, [...], *il songeait* à quelque dame discrète et sage [...]. (pp.13-14)

(213) *Un démon m'a montré* des propositions [...], *et j'ai construit* les yeux fermés un gibet d'où pend une corde. (p.60)

(214) --- Dieu m'a tenté, *pleura l'homme* aux mains bandées, moi qui jouais [...].

*Et il recula* d'un pas, appuyé sur l'épaule du maigre apprenti Perrotin. (p.60)

(215) *Les fermiers m'ont lâché* leurs chiens, *et les bourgeois* des villes nous *chassent* à coups de pierres. (p.63)

(216) --- *Ces métiers* [...] *auraient fait* de mon oncle un roi et [...]. *Mais je ne vois* ici qu'une brute riche et de sots pauvres. (p.63)

(217) --- Quand Thomas a vu le métier ouvrir jour et nuit et faire à lui seul la tâche de quatre hommes, *il n'a rien dit*, reprit Colas Theel, *mais il tremblait et suait* comme s'il avait peur. *Et on l'a congédié* l'un des premiers quand on m'a retranché ma bande d'apprentis. *Et les moulins grinçaient* toujours, *et les perches de fer continuaient* toutes seules à tisser la toile. *Et Thomas restait* assis au fond du dortoir avec la femme qu'il a épousée au printemps, *et je les entendais* grelotter comme ceux qui ont froid. *Et j'ai compris* que nos mécaniques étaient un fléau comme la guerre, la cherté des vivres, les draps étrangers... *Et mes mains ont mérité* les coups qu'elles reçurent... *Et je dis* que l'homme doit travailler tout bonnement, comme avant lui ses pères l'ont fait, et se contenter de ses deux bras et ses dix doigts.

--- *Et qu'es-tu* toi-même, cria Zénon pris de furie, sinon une machine mal graissée qu'on use, qu'on jette au rebut, et qui par malheur en engendre d'autres ? (pp.63-64)

L'accumulation de coordonnants donne nécessairement l'impression que cette suite d'énoncés constituent un ensemble fortement regroupé par rapport au reste du discours qui n'est pas indiqué. Remarquons que le groupement en question est constitué par une suite d'énoncés donnée par une personne et un seul énoncé donné par une autre personne.

(218) *Je te croyais* un homme, Colas, *et je ne vois* qu'une taupe aveugle! (p.64)

(219) *Retournez* dans vos dortoirs pourrir [...], *et crevez* sur vos galons et vos velours [...]. (p.64)

(220) *Zénon* [...], *irait promener* [...]; *et Henri-Juste pourrait* tout à l'heure se vanter en haut lieu de savoir par ces temps agités [...]. (p.65)

(221) --- *Il entonne* sa bière pendant que [...]. *Et j'aimais* cet homme... Race de Simon-Pierre. (p.66)

(222) --- *Laisse là* Colas [...], *et pense* à nous dorénavant. (p.66)

(223) *Va boire* avec les autres, ivrogne! *dit Zénon*. *Et, quittant* la salle, *il s'enfonça* dans l'escalier désert. (p.66)

(224) *Le lendemain*, *le chanoine Campanus chercha* son élève pour lui apprendre que [...]. *Mais la chambre* de Zénon *était vide*. (p.67)

(225) *Son nez pointu*, *sa pâleur*, *sa gaucherie n'inspiraient* à personne ces vifs propos [...], *mais sa tante Godeliève comparait* tendrement ses cheveux blonds à l'or [...], *et toute sa contenance était religieuse et ménagère*. (p.68)

(226) *Ses ancêtres* couchés en cuivre poli [...] *se félicitaient* sans doute de la voir si sage.

*Car elle était* de bonne famille. (p.69)

(227) Plus tard, durant les rares visites [...], *le curé lui ferma sa porte, sentant [...]. Mais Wiwine avait appris ce matin-là [...], et elle attendait tranquillement qu'il vînt la voir à l'église.* (pp.69-70)

(228) *Faites une liasse des cahiers que j'ai cachés dans votre armoire; et je viendrai les chercher à la nuit close.* (p.70)

(229) *Il avait dû patauger sous l'averse dans la boue du pays, car ses chaussures et le bas de ses vêtements étaient encroûtés de terre.* (p.70)

(230) *Il semblait aussi qu'on l'eût lapidé, ou [...], car son visage n'était plus qu'une meurtrissure, et le rebord d'une de ses manches était strié de sang.* (p.70)

(231) --- Ce n'est rien, *dit-il.* Une rixe. Je n'y pense déjà plus.

*Mais il la laissa épouger de son mieux [...].* (p.70)

(232) *Wiwine troublée le trouvait beau comme le sombre Christ de bois peint [...] et elle s'empressait autour de lui telle une petite Madeleine innocente.* (p.70)

(233) --- *Je le lui répéterai sans l'entendre, [...]. Et comme ma tante Godeliève verrouille la porte [...], je laisserai vos cahiers sous l'auvent avec des victuailles pour la route.* (p.72)

(234) --- Mon cher seigneur, *dit Wiwine, des gens de ma famille sont couchés sous ces dalles, et leur divise est sur leur oreiller.* (p.73)

(235) [...]; *cette enfant un peu simple était sans doute le plus léger des liens qui [...]. Mais une faible pitié le gagna, mêlée à l'orgueil d'être regretté.* (p.73)

(236) *On savait vaguement qu'il s'intéressait à des spéculations [...], et l'histoire de l'enfant [...], devenait sur les lèvres des plus doctes celle d'une opération [...].* (p.76)

(237) [...], *on lui attribua des plaisirs [...], et on colporta divers contes, [...]. Mais, de toutes ces hardiesses, la plus choquante peut-être était celle qui, [...].* (p.76)

(238) [...]: *une série de guérisons inespérées lui firent ces années-là une réputation de thaumaturge. Puis de nouveau, ce bruit s'éteignit.* (p.77)

(239) *La chanoine était parfois tenté d'aborder cet homme de peu, mais les convenances semblaient s'opposer à ce que [...], et le bonhomme avait la réputation d'être matois et moqueur.* (p.78)

(240) *Ils en discouraient ensemble, le soir, dans le parloir de la cure, [...], mais ni l'un ni l'autre ne prenait la peine [...].* (p.78)

(241) [...], *les trésors d'outre-mer étaient recueillis et rangés. Mais Simon et sa femme, [...], vivaient au dernier étage [...], et tout ce luxe ne servait qu'à la consolation des pauvres.* (p.80)

(242) [...], *Simon inclinait la tête et disait: [...].*

*Et cet homme vraiment pieux enseignait à Hilzonde la douceur de se résigner. Mais un fond de tristesse leur restait.* (p.81)

(243) *Ses vaisseaux cinglaient de toutes les rives [...], mais Simon pensait au grand voyage [...].* (p.82)

(244) [...], *les Bons tenaient* dans la maison de Simon [...]. *Mais l'espoir pointait* au loin comme une voile: [...]. (p.83)

(245) *Hilzonde se redressa* sur le coude, et fixant sur lui ses yeux soudain grands ouverts:

--- Les quinze jours sont passés, mon mari, *dit-elle* avec une sorte de dédain [...]. (p.84)

On voit bien que la coordination n'est pas nécessairement établie entre les éléments qui se suivent, surtout quand il s'agit d'une coordination entre énoncés.

(246) [...]; *les femmes voilées glissaient* [...], et on entendait sur la place les sanglots des confessions publiques. (p.87)

(247) *Elle cédait* avec dégoût aux baisers [...], *mais ce dégoût tournait* à l'extase; [...]. (p.90)

(248) Tout à coup, *le Roi levait* les mains et priait, et une *pâleur* de théâtre *embellissait* son visage [...]. *Ou bien, il soufflait* au nez d'un convive pour [...]. (p.91)

(249) Vers le soir, *les travailleurs s'arrêtaient* et *restaient* [...]. *Mais la couleur rouge* à l'occident *pâlissait*; [...]. (p.93)

(250) [...]; *un crépuscule* de plus *tournait* au gris, puis au noir, et *les démolisseurs fatigués redescendaient* à l'intérieur de leurs taudis, [...]. (p.93)

(251) [...]; *on avait* par fatigue *cessé* d'enterrer les morts, *mais le gel* faisait des cadavres empilés dans les cours [...]. (p.94)

(252) [...]; *n'étaient-ce pas là* les armées [...] ? *Mais bientôt ces régimes fraternisèrent* avec les troupes épiscopales [...]. (p.95)

(253) *Personne* ensuite *n'essaya* plus rien. *Mais l'assaut* attendu *n'eut* lieu ni cette nuit-là, ni les nuits suivantes. (p.95)

(254) [...]; *il semblait* qu'elle ne se souvînt [...]. *Mais tout restait licite*: [...]. (p.96)

(255) *Il mangeait* sur la table de bois blanc [...]. *Mais Simon n'écoutait* que d'une oreille les racontars [...]. (p.99)

(256) *Il dort* peu cette nuit-là, *mais* contrairement à ce que [...], *le sentiment* qui le poignait *n'était* ni l'indignation ni la honte, mais ce mal plus tendre [...]. (p.101)

(257) [...]: *ces Saints* livrés à eux-mêmes *avaient goûté* jusqu'à l'abus le bonheur [...], *mais ces corps* libérés des attaches du monde, [...], *avaient connu* sans doute [...]. (p.102)

(258) *Une odeur* fétide *sortait* de sa casaque [...]. *Mais le petit homme* avait *gardé* ses yeux vifs [...]. (p.103)

(259) *Les gens* de Münster *s'étaient* lassés de ce spectacle, *mais des enfants*, [...], *persistaient* à jeter à l'intérieur des épingles, du crottin, [...]. (p.103)

(260) *L'évêque avait réinstallé à deux pas du palais épiscopal sa maîtresse, la belle Julia Alt, mais cette discrète personne ne faisait pas scandale.* (p.104)

(261) *Simon prenait tout cela avec l'indifférence [...]. Mais sa grande bonté d'autrefois s'était tarie comme une source.* (p.104)

(262) *Le froid regard du mourant avait reconnu sa sœur, mais Simon profitait de son état de malade pour [...].* (p.105)

(263) *Le vieillard semblait avoir oublié ses promesses [...]. Ou peut-être, renonçant ainsi [...], goûtait-il jusqu'au bout l'amer plaisir [...].* (p.106)

(264) *Simon s'efforça de penser [...]; mais les tourments de Hans ne signifiaient plus aujourd'hui ce qu'ils avaient signifié hier; [...].* (p.106)

(265) *Il priaît, mais quelque chose lui disait que [...].* (p.106)

(266) *Il fit un effort pour revoir Hilzonde, mais le visage de la morte ne se distinguait plus.* (p.106)

(267) [...]; *elle aimait ces entrelacs de sons comme elle aimait ses broderies. Mais manger restait la grande affaire; [...].* (p.109)

(268) [...], *eux-mêmes ne se doutaient pas du pouvoir perturbateur [...]. Et pourtant, assis à leur comptoir, regardant se dessiner [...], il leur arrivait de sourire.* (p.110)

(269) [...] *Madame Impéria ne desserrerait pas les jambes dans le lit du prince, et Monseigneur ne pourrait payer les pierreries [...].* (p.111)

(270) *Philibert semblait absorbé par ses registres [...]. Mais une pointe d'ironie perçait sous ses paupières; [...].* (p.112)

(271) *Une discussion s'engageait pour décider [...], mais personne au fond ne s'étonnait qu'un bourgeois s'accomodât des dogmes [...].* (p.113)

(272) *Les madrigaux tirés du Livre [...] parlaient d'agneaux, [...], mais ces airs à la mode servaient à accompagner les paroles [...].* (p.114)

(273) [...]; *les deux filles se rasseyaient côte à côte, et l'on n'entendait plus d'autre ritournelle que [...].* (p.114)

(274) *Salomé n'avait pas eu le cœur d'enlever [...], et la vieille Hussite avait communiqué à l'enfant de Simon [...].* (p.114)

(275) [...]; *la crainte avait fait d'elle à l'extérieur une vieille femme [...]. Mais tout au fond d'elle-même subsistait la haine [...].* (p.114)

(276) *La vieille n'osait s'en prendre ouvertement [...], mais on l'entendait maugréer au sujet de l'huile [...].* (p.115)

(277) *Les ventes [...] avaient, il est vrai, indûment enflé les sacs [...], mais l'opération qui consiste [...] était aussi logique que [...].* (p.116)

(278) *Elle trouvait des prétextes pour [...], et son manque de courage lui pesait comme le pire péché.* (p.118)

(279) *Une délicatesse de cœur retenait Bénédicte de peiner [...], mais Martha se refusa un soir de Toussaint à prier pour [...].* (p.119)

(280) *Salomé comptait sur ses doigts les pièces [...]. Ou bien, [...], elle cherchait dans sa mémoire la recette [...].* (p.119)

(281) *Philibert tournait à l'héritière [...]. Mais les cousines portaient les mêmes bonnets [...].* (p.119)

(282) [...]; *il s'y trompait, et Bénédicte semblait se plaire à provoquer [...].* (p.119)

(283) *Chastement couchées dans les bras [...], elles se consolait en mêlant leurs larmes. Puis la jeunesse reprenant le dessus, elles se moquèrent des petits yeux [...].* (p.120)

(284) [...]; *la charité chrétienne et la peur des émeutes inspiraient au bourgeois ces sortes d'aumônes. Mais ces maux n'étaient que les fourriers d'une calamité plus terrible.* (p.121)

(285) [...]; *par ces jours néfastes, la méfiance se changeait en haine, et l'on parlait sur son passage de semeuses de peste [...].* (p.122)

(286) *Bénédicte aimait sa mère, ou plutôt ne savait pas qu'elle pût ne pas l'aimer. Mais elle avait souffert de sa piété niaise [...].* (p.122)

(287) *Les médecins du lieu étaient, ou sur les dents, ou frappés eux-mêmes, ou encore fermement décidés à ne point contaminer [...], mais on avait entendu parler d'un homme de l'art [...].* (p.125)

(288) *Les vases lymphatiques sont à peine gonflés, et elle passera sans doute avant qu'ils s'engorgent.* (p.127)

(289) *Votre tempérament paraît robuste, et la peste ne fait plus guère de nouvelles victimes.* (p.128)

(290) *Vos craintes sont naturelles et raisonnables, mais la honte et le regret sont aussi des maux.* (p.128)

(291) [...], *Bénédicte paraissait somnoler, mais les grains de buis bougeaient de temps en temps sous ses doigts.* (p.129)

(292) *Les cas de peste se faisaient rares, mais en marchant le long des rues [...], elle continuait à serrer [...].* (p.129)

(293) *Il serait désormais seul à décider de l'heure [...], et personne ne l'interrompait plus s'il lui arrivait de raconter [...].* (p.130)

(294) *Il se procura une dispense [...], et le nom de Martha remplaça sur le contrat celui de Bénédicte.* (p.130)

(295) [...]; *il allouait une maigre rente à sa femme, et s'arrangeait pour [...]. Mais le crime de bigamie n'était pas de ceux qu'on commet d'un cœur léger.* (p.131)

(296) [...]; *elle n'ignorait point qu'une dot comme [...], et l'union de deux fortunes est un devoir auquel [...].* (p.132)

(297) *Son pesant promis se contenta de répondre en hochant le tête:*

--- Vous m'excuserez, j'ai fort à faire. Les questions théologiques sont très ardues.

*Et jamais plus il ne reparla de cet aveu.* (p.133)

(298) [...]; *les chasses* sur les pentes [...] *tentaient* peu un homme habitué à courre le cerf [...]; *et le capitaine*, [...], *se donnait* le plaisir, [...]. (p.134)

(299) *Le glorieux César Charales* semblait au Flamand une sorte de [...], *et la pompe espagnole* lui *faisait* l'effet d'une de ces armures [...]. (p.134)

(300) [...], *Henri-Maximilien* n'avait pas *compté* sur l'ennui [...], *et il attendait* en grommelant [...]. (p.135)

(301) [...]; *elles lui étaient* d'ailleurs aussi nécessaires, [...]. *Mais* cette fois *le duel* [...] *tourna* court. (p.135)

(302) [...]; *tout finit* dans un bruit de pleurs [...], *et le capitaine dégoûté* *se rassit* pour essayer [...].

*Mais sa fureur* rimante *était* *passée*. (p.135)

(303) *Une estafilade* à la joue *faisait* mal, bien qu'il n'en voulût pas convenir; *et le mouchoir* vite rougi [...] lui *donnait* l'air ridicule [...]. (p.135)

(304) --- *J'en connais* un d'habile, dit l'aubergiste. *Mais il est bizarre* et ne veut soigner personne. (p.136)

(305) --- Pardonnez-moi, frère Henri, dit-il. *J'aime* à revoir votre bonne figure. *Mais je suis obligé* de me garder des importuns. (p.137)

(306) *Je suis supposé* essayer de divers bains [...], *et je fais* ici ma cour au Nonce [...]. (p.138)

(307) --- *Que fais-je* ici, sinon m'entremettre ? dit le capitaine. *Et c'est ce* qu'ils font tous; [...]. (p.138)

(308) *Le plus honnête* est encore celui qui vend [...]. *Mais je ne prends* pas assez au sérieux les objets de mon petit négoce, [...]. (p.138)

(309) [...]; *votre opuscule* sur la nature du sang, [...], *a dû* lui paraître plus digne [...]; *et votre Traité* du monde physique l'*aura fait* pleurer. (p.139)

(310) *On n'est bien* que libre, *et cacher* ses opinions est encore plus gênant que de couvrir sa peau. (p.140)

(311) *Ces plats* raisonneurs *portent* aux nues leurs semblables et crient haro sur leurs contraires; *mais* que nos pensées soient [...], *elles* leur *échappent*; [...]. (p.141)

(312) *Des cardinaux* [...] *s'en tirent* de la sorte, *et c'est ce* qu'ont fait des docteurs [...]. (p.141)

(313) *Je trace* comme un autre les quatre lettres du Nom auguste, *mais* qu'y *mettrais-je* ?

(314) --- ce qui n'est pas comme eux leur paraît contre eux, dit amèrement *Zénon*.

*Et*, remplissant un gobelet, *il but* à son tour avidement l'aigre vin d'Allemagne. (p.142)

(315) --- *Elle tourne*, dit *Zénon*.

--- *Et si* la terre tourne, *je ne m'en soucie* guère en ce moment [...]. (p.142)

(316) *Vos doutes* et *votre foi* sont des bulles d'air [...], *mais la vérité* qui se dépose [...] est en *deçà* de l'explication [...]. (p.143)

(317) [...]; *ils n'existent* point, *et vous n'êtes* pas de ces badauds [...]. (p.144)

(318) *On me supposait déjà en Tartarie que [...]. Mais remontons plus haut: [...].* (p.144)

(319) [...]: peu après mon arrivée [...], *mon prieur fut chassé* de son abbaye par ses moines, [...]. *Et il est vrai* que [...]. (p.144)

(320) *Que de froment a poussé, que de bêtes ont vécu et sont mortes [...]. Mais revenons aux voyages ...* (p.146)

(321) *Pont-Saint-Esprit [...]* n'était pas toujours *un lit* de roses, *et l'Eminence* sur laquelle je comptais *quitta* Avignon pour Rome ... (p.146)

(322) *J'ai tué* certains de mes malades [...]. *Mais leur rechute ou leur mieux m'importaient* surtout en tant que [...]. (p.147)

(323) *Le pire ou le plus sot* de nos patients nous *instruisent* encore, *et leurs sanies* ne sont pas plus *infestes* que celles [...]. (p.148)

(324) *Il n'eut* pas l'occasion d'essayer [...]. *Mais son serviteur me resta ...* (p.151)

(325) Vous autres poètes avez fait de l'amour une immense imposture: *ce* qui nous échoit *semble toujours moins beau* [...]. *Et pourtant, quel autre nom donner* à cette flamme ressuscitant comme le Phénix de sa propre brûlure [...] ? *Car certains corps, frère Henri, sont rafraîchissants* comme l'eau, *et il serait bon* de se demander pourquoi les plus ardents sont ceux qui [...]. *Donc, Aleï venait* d'Orient, comme [...]... (p.151)

(326) Après tant de ribauds [...], *j'avais* enfin ce follet [...] ...

"Or, un laid soir, à Bâle, l'année de la peste noire, *je trouvai* dans ma chambre mon serviteur [...]. (p.152)

(327) [...]; *on n'y percevait* qu'à peine le son d'une longue viole [...]. *Mais Aleï ne m'attendait* pas ce soir-là, [...]. (p.153)

(328) [...]; *vous avez pris* à partie le Temps [...]. *Et pourtant, je puis* m'imaginer que [...] ... (p.153)

(329) *Ce n'était certes pas la première fois* que [...], *mais chaque mort n'avait guère été jusque-là qu'un pion* dans ma partie de médecin. (p.153)

(330) *J'appelai, mais l'aubergiste ses garda* de venir [...]. (p.154)

(331) *Le monde* du dedans *et le monde* du dehors, *le macrocosme et le microcosme étaient encore les mêmes* qu'au temps [...], *mais ces grandes roues* s'emboîtant [...] *tournaient* en plein vide; [...]. (p.154)

(332) *J'ai honte* d'avouer que [...], *mais on se fatigue, frère Henri, et je ne suis plus jeune:* [...]. (p.154)

(333) --- *L'hôte* [...] *m'a mis* au fait de [...]. *Mais vous traitez* la goutte du Nonce, *et voici sur ma joue* votre charpie *et votre emplâtre.* (p.155)

(334) *Je ne me plains* point; *mais tout diffère* de ce que j'avais cru. (p.156)

(335) *Je sais* que [...], *mais j'ai vu* de près ceux [...]. (p.156)

(336) [...]; *il y fait plus beau* qu'en Flandre, *mais on y mange* plus mal. (p.156)



(337) [...]; *je ne traverserai pas les siècles [...]. Mais quand je vois [...], je prends plus gaiement mon parti d'être peu lu.* (p.156)

(338) *Des dames m'ont aimé; mais c'était rarement celles pour l'amour [...].*... (*Mais je me regarde: quelle arrogance de croire que [...].*) (p.157)

(339) *La Vanina [...], est une fort bonne fille, mais son odeur n'est pas celle de l'ambre, et ses torsades de cheveux roux ne sont pas toutes à elle.* (p.157)

(340) *Mon frère m'a bien reçu, mais j'ai compris au bout de huit jours [...].* (p.157)

(341) *Il m'arrive de regarder [...], mais je ne voudrais pas de mes neveux pour fils.* (p.157)

(342) [...]; *je me dis parfois que [...]. Et pourtant, il m'advient rarement de quitter [...], et je crois bien que [...].* (p.157)

(343) *Frère, il y a dans presque toutes les choses [...] je ne sais quelle lie ou quel déboire [...], et les rares objets [...] sont mortellement tristes.* (p.158)

(344) *La philosophie n'est pas mon fait, mais je me dis parfois que [...].* (p.158)

(345) *Le rougeoiement de [...] teignait ses mains [...], et l'on voyait qu'il considérait [...].* (p.158)

(346) *J'en sais les limites, et que le temps lui manquera [...]. Mais il est, et, en ce moment, il est Celui qui Est.* (p.159)

(347) *Je sais qu'il se trompe, [...], mais je sais aussi qu'il a en lui de quoi connaître [...].* (p.159)

(348) [...]; *j'envie ceux qui [...], mais je sais qu'ils auront tout comme moi [...].* (p.159)

(349) --- *Voilà qui va bien, dit en bâillant l'homme de guerre. Mais le bruit public vous prête une réussite plus solide.* (p.160)

(350) *Qu'est-ce qu'une broche [...] ou qu'une bobine qui [...], et pourtant cette chaîne de minces trouvailles pourrait nous mener plus loin [...].* (p.161)

(351) [...]; *on s'est à peine soucié de diversifier les emplois [...]. Et cependant, il suffirait de s'appliquer [...].* (p.161)

(352) *Dieu merci ! On tue davantage (et encore j'en doute) et mes soudards manient l'arquebuse au lieu de l'arbalète. Mais le vieux courage, la vieille couardise, la vieille ruse, la vieille discipline et la vieille insubordination sont ce qu'ils étaient, [...].* (p.161)

(353) *Je n'ignore pas que [...]. Et cependant, frère Henri, je connais çà et là dans divers coins de la terre cinq ou six gueux plus fous, [...].* (p.162)

(354) [...], *il aurait pu non seulement soulever le monde, mais le faire retomber [...].* ... *Et franchement, en Alger, en présence des bestiales [...], je me suis dit parfois qu'ordonner, [...] n'était peut-être qu'un pis-aller [...].* (p.162)

(355) *Rien n'est encore décidé contre moi, mais les jours qui [...] promettent des alertes.* (p.163)

(356) *Sortons ensemble, mais si vous craignez le coup [...], vous feriez sagement en vous séparant de moi sur le seuil.* (p.163)

(357) *La nuit tombait, mais les faibles lueurs du couchant se reflétaient encore sur la neige [...].* (p.163)

(358) --- *Laissez-moi rendre ceci [...], dit le capitaine, car je pense que [...].* (p.166)

(359) *Henri-Maximilien pensa que [...], ou peut-être l'avait-on desservi auprès du maréchal [...].* (p.167)

(360) *Vers l'heure de midi, un officier [...] avait requis le tavernier [...]. Mais un démon sans doute avait prévenu à temps l'alchimiste.* (p.167)

(361) *Sa vie s'était passée à servir [...], mais la gaieté française s'accordait mieux à son humeur.* (p.168)

(362) *Madame Renée de France, [...], lui aurait volontiers offert une sinécure [...], mais elle y accueillait les premiers dépenaillés venus, [...].* (p.169)

(363) *Il vivait de plus en plus [...]. Mais sa rude vie n'était pas dépourvue de délices.* (p.169)

(364) *Les brèves et cérémonieuses lettres [...] se terminaient toujours, il est vrai, par des offres [...], mais Henri-Maximilien savait fort bien qu'on n'ignorait pas [...].* (p.170)

(365) [...]; *l'Empereur ferait chanter un Te Deum [...]; et de nouveaux emprunts, [...] assujettiraient davantage Sa Majesté [...].* (p.173)

(366) *Vingt-cinq ans de guerre [...] avaient appris au capitaine [...].*

*Mais ce Flamand mal nourri s'enchantait des jeux, des ris, [...].* (p.173)

(367) *Il savait pourtant que la belle se gaussait de lui [...]. Mais il n'avait jamais été beau; [...].* (p.174)

(368) [...], *il lui venait parfois à l'esprit que [...]. Mais, la nuit, couché [...], il se rappelait brusquement un petit geste [...], et, rallumant sa chandelle, il écrivait avec une jalousie poignante des vers compliqués.* (p.174)

(369) *Enchanté d'Innsbruck, Zénon avait vécu quelque temps [...]. Mais l'inaction et l'immobilité lui pesaient, et Bonifacius n'était assurément pas homme à courir [...].* (p.178)

(370) *En vain, Zénon lui rappelait que [...]. Mais Erik était de ceux qui [...].* (p.179)

(371) [...], *le philosophe essayait [...], mais les pensées d'autrui s'enlisaient comme dans un marécage [...].* (p.179)

(372) [...], *l'élève et le philosophe se rapprochaient de l'énorme feu [...], et Zénon s'émerveillait chaque fois que [...].* (p.180)

(373) *D'autres soirs, le prince ne venait pas, [...], et le philosophe, [...], les rectifiait alors [...].* (p.180)

(374) *Zénon comptait sur l'appui [...], mais quand il rencontra [...], le jeune prince passa sans le voir, [...].* (p.181)

(375) [...], *les maîtres et les étudiants avaient plus d'une fois changé, mais ce qu'il entendit [...] ne lui parut pas fort différent [...]*. (p.181)

(376) *Il ne prit pas la peine d'aller voir [...]. Mais il écouta avec curiosité [...]*. (p.182)

(377) --- *Que n'ai-je mieux entendu vos Prognostications, [...] ! Et nous aurions peut-être évité au feu Roi le fer de lance [...]... Car je pense, ajouta-t-elle [...], que [...]*. (p.183)

(378) *Votre Majesté sait comme moi que [...]. Et il n'est point impossible d'en entendre [...]. Mais l'événement seul décide laquelle de ces larves est viable [...]*. (p.183)

(379) *Riggieri vous établira près du Roi, et nous comptons sur vous [...]*. (p.184)

(380) --- *On exagère, bouffonna Ruggieri. Mais pourquoi Sa Majesté n'aurait-elle pas son arsenal de poisons comme [...]*. (p.185)

Ci-dessus, nous avons pu constater que les coordinations entre énoncés indépendants sont diversement organisées et que ce qui compte, ce sont plutôt les liens sémantiques des idées qui se suivent que les éléments formels comme la contiguïté, par exemple.

### 3. Pour ne pas conclure

Quand il s'agit de la coordination entre prédicats, on peut reconnaître, malgré la complexité, qu'il y a une nette indépendance phrastique, c'est-à-dire, un regroupement assez fort. Car le groupe ainsi constitué n'a aucun rapport positivement marqué avec d'autres groupes. Mais quand il y a, au début d'une phrase, un élément qui fonctionne bien comme un coordonnant ailleurs, il n'est pas facile de décider s'il y a un lien de coordination entre la phrase en question et d'autres phrases précédentes. Dans *Paul part. Mais Marie reste.*, par exemple, on peut dire que *Mais* qui est à l'initiale d'une phrase ne fonctionne plus comme un coordonnant mais comme un adverbe. L'organisation syntaxique étant limitée à l'intérieur d'une phrase indépendante, le lien entre *Paul part* et *Marie reste* ne concerne pas, on peut le dire, l'organisation syntaxique. Mais le problème est là plutôt de savoir ce qui permet d'identifier l'initiale d'une phrase, ce qui permet de dire que *Mais Marie reste* est une phrase indépendante, ci-dessus. Peut-on dire que dans le chapitre 2. ci-dessus, quand deux ou plus de deux énoncés qui peuvent être syntaxiquement indépendants sont reliés par les éléments comme *et, ou, mais*, etc., il s'agisse toujours des adverbiaux mis à l'initiale, même dans les cas comme *Paul part mais Marie reste* ? Le problème semble assez clair. Il est évident que la coordination entre deux énoncés qui peuvent être syntaxiquement indépendants ne semble pas poser de problèmes intéressants du point de vue de l'organisation syntaxique. Il s'agit des liens sémantiques et de l'organisation du discours. Le lien syntaxique, s'il y en a, n'est que celui de coordination. En reconnaître là un ou non ne semble pas fondamental, justement du point de vue syntaxique. Ce n'est peut-être même pas une question syntaxique.

## Bibliographie

- MARTINET, André : *Eléments de linguistique générale*, 4e édition, Paris, A.Colin, 1991.  
----- : *Mémoire d'un linguiste, Vivre les langues*, Paris, Quai Voltaire, 1993.
- TSURUGA, Yoichiro: « Coordination et fonctions syntaxiques », dans *Problèmes de linguistique française II*, Tokyo, Sanshûsha, 1998, pp. 204-215.

## 【研究ノート】

### 複文構造の使役文についてのおぼえがき — 従属節と主節との関係 —

早津恵美子

#### 1 はじめに

本稿は、日本語の使役文のうち、主節の述語が使役動詞、従属節の述語が動詞（および形容詞）のいわゆる中止形（「～し」「～して」）である次のような複文構造の使役文について、従属節で表されている事態と主節で表されている使役事態との意味的な関係を考えるための予備的なノートである（注1）。

- (1) (春琴は佐助に) 三日目毎に爪を剪らせ 鑑をかけさせた。(春琴)
- (2) お雪は笑って (女の児に) 乳房を吠えさせる。(家)
- (3) お礼をいって、私たちはその男の人と別れ、車を湖の方に向かって走らせた。  
(庭の山木)
- (4) 家政婦を呼んで千賀子はその鏡台を建増した中二階へ運ばせた。(妖)
- (5) (真っ暗の階段を) 娘の手を引いて登らせた。(黙)
- (6) 交番のところへ来るとわざと駆けだして 巡査をまごつかせる。(むらぎも)
- (7) 栗原は、B女を殺した事実を告白し、A女を安心させようとした。(死刑四の記録)
- (8) あるときA君がB君に乱暴して 足にけがをさせてしまった。(中学校は、いま)
- (9) かづは女中たちに命じて 提灯を用意させた。(寝のあと)
- (10) 鮎太は青年詰所に行って、そこにいた二、三人の子供を使って、部落の三年以上の子供たちを集めさせた。(あぢな物語)
- (11) (須賀の) 動作は烈しくて 由美をぎょっとさせた。(妖)

「使役」という事態は、使役主体が使役対象（被使役者。CAUSEE。以下「CAUSEE」とよぶ）に何らかの働きかけをしたり影響を及ぼしたりすることによって、CAUSEEにある動作を行わせたり状態の変化を引き起こしたりすることであると、おおまかには考えることができると思われるが、使役文においては、その働きかけ・影響の実際のあり方が、文中に表現される場合もあればされない場合もある。

- 母親が子供を歩かせた。
- 部長が田中氏に事件の真相を調べさせた。

上の文では、使役主体から使役対象に対してどのような働きかけ・影響があったのかは文中には表現されていない。一方、たとえば次のように、働きかけ・影響の様子を「～し」「～して」によって具体的に表現することもできる。

- 母親は子供の手をひき廊下を歩かせた。  
母親が子供においでおいでをして廊下を歩かせた。  
母親が子供に命じて山道を歩かせた。  
母親が子供を叱りつけて山道を歩かせた。
- 部長が田中氏に頼んで、事件の真相を調べさせた。  
部長が田中氏に命じて、事件の真相を調べさせた。  
部長が田中氏を雇って、事件の真相を調べさせた。  
部長が田中氏を使って、事件の真相を調べさせた。

このように、使役文は複文構造の使役文にすることによって、使役主体からCAUSEEへの働きかけ・影響を従属節で表現することができるわけである。

しかしながら、複文構造の使役文における「～し」「～して」による従属節が必ずしもCAUSEEへの働きかけや影響のありさまを表すわけではない。従属節と主節とは、ある場合には二つの動作を対比的に表現していたり、あるいは、時間的に[先行-後続]の関係にある二つの事態を表現していたりする。

- 母親は下の子を自転車にのせ、上の子を歩かせた。  
母親は子供の健康を思って、いつも子供をはだしで歩かせた。
- 部長は新聞社の対応に追われ、事件の真相は田中氏に調べさせた。  
部長は事件についてできる限りの資料を集め、それを田中氏に調べさせた。

本稿は、複文構造の使役文における従属節の主節とのこういったさまざまな関わり方を具体的に検討してみようとするものである。

あらかじめ以下の分析の概略を示しておくならば、本稿では複文構造の使役文を、従属節で表されている事態（以下、「従属節事態」とよぶ）が主節で表されている事態（以下、「主節事態」とよぶ）に対してどのような意味的な関係にあるかによって、次のような類にわけてみた。冒頭の(1)～(10)の例文は、それぞれ各別の構造に対応するものである。それぞれ簡単な構造にして示した。

《A》並列的・対比的な関係	〈爪を剪らせ鋏をかけさせる〉
《B》付帯的な状況	〈笑って乳房を吠えさせる〉
《C》時間的先行	
・主節事態にかかわりのない単なる先行	〈人と別れ車を走らせる〉
・主節事態の準備のための先行	〈家政婦を呼んで鏡台を運ばせる〉
・付帯状況ともなる先行	〈娘の手を引いて登らせる〉
《D》直接的・間接的な要因	
・原因としての外的状況	〈わざと駆けだして巡査をまごつかせる〉
・間接的な要因	〈事実を告白しA女を安心させる〉
・直接的な要因	〈友達に乱暴してけがをさせる〉
《E》主節事態の含みこみ	
・言語的・態度的な働きかけ	〈女中に命じて提灯を用意させる〉
・総括的な働きかけ	〈子供を使って他の子供を集めさせる〉

このうち、《E》は、種々の複文のうち、とりわけ複文構造の使役文に特徴的なもののように思われるものである。

以下で必要に応じて触れるが、関係のあり方の分析にあたっては主として次のような点から検討した。①従属節事態と主節事態との独立性、②従属節事態と主節事態との時間的・意味的な関連、③従属節動詞の語彙的な意味や構文的な特徴、④従属節動詞が「～し」「～して」いずれの中止形であるか（注2）（以下、それぞれを「シ中止形」「シテ中止形」とよぶ）、⑤主節の使役動詞が意志動詞派生のものか無意志動詞派生のものか（すなわち、主節事態が意志動作のひきおこしであるか、無意志動作のひきおこしであるか）、⑥ CAUSEE が主節・従属節中に明示されるか否か、などである。その他にも考慮すべき観点があるだろうと思われるが、それは今後考えていきたい。

## 2 考察の範囲

本稿の考察の範囲は“複文構造の使役文”とするわけだが、この稿の冒頭にあげた諸例のような「人<sub>1</sub>-が V<sub>1</sub>-して、人<sub>2</sub>-に／を V<sub>2</sub>-させる。」といういわゆる「文」の形をとっているものだけでなく、次のように「人<sub>1</sub>-が V<sub>1</sub>-して、人<sub>2</sub>-に／を V<sub>2</sub>-させる」が更に大きな構造のなかに含まれたいわば「句」「節」であるものも、考察の対象にする。

○夫を疎外し、アルコール依存や愛人に走らせるような・・・（貧困の精神病理）

- 「・・・母と、妹はしばらく諫早にとどめ、弟を私共の家に住まはせようと  
思っています」(庭の山木)
- 若いときには相当道楽もして細君をはらはらさせた人が、(新文鞆)
- ある高級アパートで仕事をすませて車をスタートさせたときに(豊奴)
- 学校の廊下に蠟を塗って女の先生をすべらしてよろこんだこと(瀧)
- 末造はふいとあれを買って持って往って、お玉に飼わせて置いたら、さぞふさわ  
わしかろうと感じた。(雁)

ところが、実際の用例をみていると、はたしてそれが、「人<sub>1</sub>-が V<sub>1</sub>-して、人<sub>2</sub>-  
に/を V<sub>2</sub>-させる」という文なり句・節なりと見做してよいかどうかわかりにくい  
ものもある。たとえば次の例の下線部分「～して」と「～させる」は、それぞれ a  
よりも bの構造だろう。

- 爆撃が終ってから屋上に上がり、足許に何羽かの伝書鳩が羽を焦がして、惨め  
な屍体をそこそこに投げ出しているのを見て、やはり家族を疎開させようと言  
う気になった。(あたる雛)
- a [私が・・・を見て] [家族を疎開させる]
- b [私が・・・を見て] [家族を疎開させようという気になる]
- (弟が)馬を乗り入れて来たと聞くと父はにっこりした。・・・そして馬は棕  
櫚の木に繋がれ、二人はげんに茶をいれさせて縁側にいた。(ほとと)
- a [馬が木に繋がれ] [二人はげんに茶をいれさる]
- b [馬が木に繋がれ] [二人はげんに茶をいれさせて縁側にいる]
- 尋常に暮して、妻子にも不自由させず、仕事も一応やるところまでやった男の、  
(時雨の記)
- a [男が尋常に暮して] [妻子に不自由させない]
- b [男が尋常に暮して] [妻子に不自由させず仕事もやるところまでやる]

次も aより bだろうか。

- その幾分猫背な後姿を見ていると、この老人のそのまた祖父あたりが、陰鬱な  
中世風の城の中で、巨大な椅子に腰を下し、音楽を演奏させながら気品の高い  
薔薇の花に凝っと見入っている不気味な様子が空想された。(広場の観音)
- a [男が椅子に腰を下し] [音楽を演奏させる]
- b [男が椅子に腰を下し] [音楽を演奏させながら薔薇の花に見入っている]

また、「V<sub>1</sub>-して」を従属節動詞とみなすよりも、「～をV<sub>1</sub>-して」「～にV<sub>1</sub>-し  
て」「～とV<sub>1</sub>-して」をひとまとまりにして後置詞的な要素とみなしたほうがよさそ



うなものもある。

- 読みさしの場所を知るのがしおりの主目的だとすれば、手間をかけて、一冊一冊、固定させなくても、ありあわせの紙ぎれ、布片などをさいこんでおけばよいではないか、(斎藤鞆)
- 私たちがそれに附込んでトラックを操縦させたり、着物を預けたりするのはどんなものだろう。(黒雨)
- 国家権力に訴えて、その使用を禁止させようと企てた・・・(ことばと隊)
- 十年一日のような男同士の交際とは違って、何故かこう友情を急がせるようなところもあった。(家)

こういったものは、それほど多くあるわけではないが、以下の分類では考慮にいていない。どのようなものを“複文”とみなすべきなのかについては更に詳細に考察しなければならないと思う。

また、CAUSEEが物であるものは考察の対象にしなかった。それらにも次のように複文構造の使役文はみられるのだが、今のところ分析ができていない。今後の課題としたい。ただし、組織・団体など、人の集合とみられるものは対象に含めた。

- 若木であったその梅が風雅な枝をはり、花を咲かせて、(梅樹)
- 突風が思い出したように吹きつけて来て、・・・芒を一斉になびかせた。(武蔵夫人)
- トゲが・・・娘たちの指先を刺して血をふかせる。(最上川)
- ときどき海風が入って来て、私の僧衣の袂をふくらませた。(金剛寺)
- 細い指で畳のうえに橋をかけてお手玉をすいすいとくぐらせる。(銀の匙)

この考察にあたって資料としたのは、小説・随筆・評論など 78 作品から全例採集した使役動詞（手作業で集めたため若干の漏れはあるかもしれない）とその他任意に集めた使役動詞、計約 8200 例による使役文である（注 3）。ただし、CAUSEEが物であるものを検討していないだけでなく、人であるものについても、今のところすべての用例を丁寧分析きれていないといえない。更なる検討が必要であり、したがって本稿での分析はあくまで暫定的・予備的なおぼえがきである。

なお、「歩かせる」と「歩かす」、「食べさせる」と「食べさす」など、下一段型のものも四段型のものともに使役動詞として認めることなど、使役動詞の認定についての立場は、早津(1997)に従う。

### 3 「～して、～させる」という使役文の分類

以下、「～して、～させる」という使役文を、先に挙げたタイプに一応分け、それぞれについて今のところ気づかれる特徴を、雑駁な記述の仕方になるが、述べていく。

#### 《A》 並列的な関係

《A》類は、従属節事態が主節事態に対して並列的な関係にあるものである。ふたつの事態が互いに全く独立した事態であって、[原因-結果]という関係にあるわけではなく、また、時間的にも、[先行-後続]の関係はなく、同時的、あるいはきわめてゆるやかな関係の複文である。従属節動詞の形は、もっぱらシ中止形であり、シテ中止形のもの、手元の用例にはない。また、従属節動詞、主節動詞いずれにも、語彙的な制限・制約はないと思われる。

主に手元の用例をもとにいくつかのタイプに分けて示すが、網羅的なものではなく、おそらく他のタイプもあると思われる。

〔1〕一人の人の、異なる他者に対するそれぞれ異なる働きかけを表すもので、ふたつの独立の事態がいわば対比的に述べられている。

○「・・・母と、妹はしばらく諫早にとどめ、弟を私共の家に住まはせようと思ってるます」(鹿嶋林)

〈母と妹を 諫早にとどめ 弟を 私共の家に住まはせる〉

○その自己顕示によって彼は政敵を心理的に圧倒し、世間をも承服させて、自分の社会的地位を高めることに役立てて行くのであった。(日文化と異議)

〈政敵を 心理的に圧倒し、世間を 承服させる〉

○何十万人の青年を戦場にひき出し、何百万の国民を熱狂させるあの戦争という事業は、(羊歌)

○学校は、就学年齢に達した私たちを第一学年に入れ、第二学年から第六学年までの生徒を・・・渋谷区内の他の小学校から転学させて、出発した。(羊歌)

○気候の変化は肉体を刺激し、肉体の刺激は精神を興奮させる。(風)

この例のように、手元の用例はいずれも、「人<sub>1</sub>-を V<sub>1</sub>-し、人<sub>2</sub>-を V<sub>2</sub>-させる」であるが、「人<sub>1</sub>-に V<sub>1</sub>-し、人<sub>2</sub>-に V<sub>2</sub>-させる」という文もあるだろう。

○長女には自転車を買い与え、次女には三輪車を持たせる。

〔2〕一人の人の、同じ他者に対する二つ(以上)の働きかけを表すもの。

「人<sub>1</sub>-が 人<sub>2</sub>-を V<sub>1</sub>-し、(人<sub>1</sub>-が 人<sub>2</sub>-を) V<sub>2</sub>-させる」「人<sub>1</sub>-が 人<sub>2</sub>-を

V<sub>1</sub>-し、(人<sub>1</sub>-が 人<sub>2</sub>-を) V<sub>2</sub>-させる」という構造の文がある。

○私は連中を学校へやり、食わせてやっています。(貧困の精神病理)

〈連中を 学校へやり、食わせる〉

○受験という制度は子どもに業績主義的な価値観を植えつけ、業績主義的なルールを覚えさせ、こうして業績社会に適応させるための最初で最大の関門なのである。(駄って子育て)

〈子どもに 業績主義的な価値観を植えつけ、業績主義的なルールを覚えさせる〉

○(春琴は佐助に) 三日目毎に爪を剪らせ 鑑をかけさせた(髻髻)

○伯母さんは私にも人なみに襷をかけ、鉢巻をさせて表へつれだした。(観の魁)

○拘置所、それは国家が在監者を拘禁し、戒護し、厳格な紀律にしたがわせる場所である。(死刑囚の記録)

○この盛場では、組合の規則で女が窓に坐る午後四時から蓄音機やラディオを禁じ、また三味線をも弾かせないという事で。(ば(髻髻))

○自分の無力をほとんど覚った老師は、最後に無言で私の心を引き裂き、私に憐憫の感情を起させ、ついには私の膝を屈させる、そういう世にも皮肉な訓誡の方法を発見したのだ!(金鬚)

〔3〕一人の人の、自分自身の行為と、他者への使役の働きかけとを、それぞれ従属節と主節とで表すもの。

「人<sub>1</sub>-が V<sub>1</sub>-し、(人<sub>1</sub>-が) 人<sub>2</sub>-に V<sub>2</sub>-させる」という構造である。

○(かづは) 化粧水をいちめに肌に塗り、襟足は女中に塗らせ、その上から白粉を叩き、(真のあと)

〈かづが 化粧水を(自分で)肌に塗り、襟足は女中に塗らせる〉

○あたしは・・・ちゃんとコーヒー代を払い、むろん友だちにも払わせていました。(豊奴)

〈あたしが コーヒー代を(自分で)払い、友だちにも払わせる〉

〔4〕手元の用例にはなかったが、従属節と主節とがそれぞれ、一人の人の自分自身の行為と、別の人他者への使役を表す場合もあるだろう。

○父親が息子を抱き、母親が娘を歩かせる。

〔5〕一人の人の、二つの状態を表すものもある。

○「富士の裾野の遊園地に車から降り立った時の私は、夢と希望にあふれ、サー

カスで売っているウサギさんのように胸の内をふくらませていた。(サ-カス放浪記)  
○髪を乱し, 身を躍らせて, (それから)

以上、いくつかに分けて、従属節と主節とが並列的・対比的な場合をみてきたが、この《A》類は、二つの事態が全く無関係な独立した事態であり、使役という事態は主節でのみ完結的に表させられているわけだから、使役そのものの性質の解明にはあまり関わりがないということになる(注4)。

### 《B》 主節事態の付帯状況

《B》類では、従属節と主節の主語が同一人である。そして、ここでもそれぞれの事態は[原因-結果]という関係にはなく、また、独立した二つの事態の時間的な[先行-後続]という関係でもない。従属節は、主節事態を実現させているときの使役主体の付帯的な状況 — たとえば、使役主体の表情や心理状態など — を表現している。従属節動詞の形はほとんどがシテ中止形であり、シ中止形であることはきわめて少ない。従属節の動詞は、人の姿勢・心理状態などを表す動詞が典型的であるが、「連れる、従う」などもこれに準ずるものと考えてよいだろう。

◆V<sub>1</sub> : 笑う, (顔を)くしゃくしゃにする, だまっている,  
信用する, (虚栄心を)働かせる,

これらは、人の表情・心理状態などを表す動詞であり、これが従属節動詞である場合、その従属節は、主節事態が実現されているときの使役主体 (=従属節の主語=主節の主語)の表情や心理状態などを表現している。

○お雪は笑って (女の児に) 乳房を吠えさせる。(家)

○出稼ぎに行った連中が嬉しくて顔をくしゃくしゃにして馬車を走らせて来るのには驚いた。(ルーマ・・)

○なるべくあなたはだまっています, 子ども自身にさせるようにして下さい。(おなごを親せよ)

○この仕事は君を信用してやらせているのだから, (階の石)

○夫人はそう言いながら, 健気な裏返しの虚栄心を働かせて, わざとかづの目の前で女店員にたった三箇のオレンジを包ませた。(寝のあと)

◆V<sub>1</sub> : 連れる, 従う

○医者のおフィスに, 家内を連れてタクシーを走らせながら, (アメリカと私)

○僕の作った機構に従って、担当役員の責任で行動させる習慣づけのよいチャンスである、(晴雨の記)

○教師の側で決めた手順にしたがってくり返しの練習をさせ、(障眼と教育)

○本人の希望にしたがい、ゆくゆくは美学の勉強をさせたいと思う、(耕文鞅)

これらの例、殊に「従う」の例に感じられるように、この類の従属節は、従属節動詞のシテ中止形が、本稿の初めに先に述べたような後置詞的な意味合いを帯びてくる。次の「合体する」の例もこの類だろうか。

○政府が加害者企業と合体して、被害者人民をひどい目に逢わせる国家の行為・  
・(田中正造の生涯)

## 《C》 時間的先行

《C》類とするのは、従属節事態と主節事態とが時間的に[先行-後続]の関係にあるものである。先に生じる従属節事態が、後に生じる主節事態にほとんど無関係であるような場合と、かなりの関わりのある場合とがある。なお、《D》《E》類の使役は CAUSEE が人である場合にほぼ限られるのに対し、《A》《B》《C》類では、CAUSEEが人である場合も物である場合もある。ただし、初めに述べたように、本稿では人の場合のみ対象としている。

### 《C-1》主節事態にかかわりのない単なる先行

二つの独立した事態が、時間的に[先行-後続]の関係で継起的に生じるのだが、両者の間に因果関係その他の関係はない、あるいは、きわめて希薄な関係しかみとめられないものである。

従属節動詞の種類には制限がなく、その形も、シ中止形、シテ中止形、いずれもみられる。また、従属節事態は CAUSEE とは全く係わりなく生じるものなので、従属節中には CAUSEE が現れない。

次にあげる例が一応この類にあたると思われるが、使役の複文構造に限らず、一般に複文構造において、従属節と主節とが全く無関係な事態ととらえられることはそれほど多くなく、何らかの関わりが感じられるものが多い。それは使役においてもやはり同様である。

[1] 一人の人が、まず自分自身がある動作を行い、そのあとで、他者への使役の働きかけを行うことが、それぞれ、従属節、主節で表されるというものが多い。

○お礼をいって、私たちはその男の人と別れ、車を湖の方に向かって走らせた。

(庭の山の木)

〈私たちが、男の人と別れ、車をはしらせる〉

○ある高級アパートで仕事をすませて車をスタートさせたときに(豊女)

〈高級アパートで仕事をすませて、車をスタートさせる〉

○「それでズカズカと入って来て、看護婦にぼくを呼び出させた・・・」(はと)

○車をがらがらと門前まで乗り付けて、此所だ此所だと棍棒を下さした声は・・・  
・(それから)

○父親はそれらの休み茶屋へ入って、子供の疲れた足をいたわり休めさせ、(あら)

次のような例もこの類といえなくはないが、従属節事態にはやはりわずかながら主節事態の原因的な要素が感じられるかもしれない。

○電話口に居た森彦は、弟の三吉と聞いて、二階へ案内させた。(家)

○アパートを出るところで、大野は初めて勉に道子の死を知らせるのを忘れたのに気づき、急いで富子に引き返させた。(武野燗)

○告訴すると言ったら主人一家が驚き、結婚させてくれて、・・・(貧困の精神病理)

○農民の方が有利になる証明を憲法を土台にして組み立て、獄中にあったインディヘナの指導者を釈放させようとしていた矢先、(メソからの手紙)

〔2〕上のような例に対し、従属節事態と主節事態とで行為の主体が異なるものは珍しい。

○ロサンゼルスで家内が病気になり、入院させたときでも、(ア刈カ私)

〈家内が病気になり、(私が 家内を)入院させる〉

## 《C-2》主節事態の準備のための先行

ふたつの事態は継起的に起こるのだが、単なる[先行-後続]ではなく、従属節事態によって作りだされる人・物の存在や状況は、主節事態実現のために欠くことのできな要素としての意味を帯びている。つまり、従属節事態は、主節事態実現に向けてなされる準備的な事態なのである。

従属節事態はさまざまな意味の動詞によって表されうるが、多くは他動詞によって表現される事態であり、そこで働きかけをうけて“準備”された人や物が、後続する主節事態の実現において不可欠な要素となる。また、従属節動詞の形はシテ中止形が圧倒的に多い。CAUSEEは、〔1〕では従属節中に現れるが、〔2〕〔3〕では従属節には現れないことが多い。

## 〔1〕人(CAUSEE)の準備

従属節事態は、主節事態を実現する主体(=CAUSEE)を、それとして準備するような働きかけを表現する。使役主体は、CAUSEEに主節事態を実現させようとし、そのために、CAUSEEを事態の実現にふさわしい状況におく、あるいは、適切な場所に存在させるような働きかけを行う。従属節事態は、主節事態の実現のために必要なひとつのステップなのである。ただし、従属節事態が実現した時点では、CAUSEEにはまだ、行うべき動作・行為のことは何も知らされていないこともありうる。

従属節事態は CAUSEE となるべき人に対してなされるわけだから、CAUSEE は従属節内ではほとんどの場合現れるが、主節にはもはや現れないことが多い。現れるとしても「その人に」「この人を」などとなる。

この類は、従属節の表現する CAUSEE への働きかけが、「人<sub>1</sub>-を V<sub>1</sub>-して」で表されるものであるか、「人<sub>1</sub>-に V<sub>1</sub>-して」で表されるものであるか、によって分けてそれぞれの類を考えることにする。

### 〔1-1〕「人<sub>1</sub>-を V<sub>1</sub>-して、(人<sub>1</sub>-を/に) V<sub>2</sub>-させる」

V<sub>1</sub> の語彙的な意味のタイプによってさらにいくつかに分けられる。

- ◆V<sub>1</sub> : ((くはく) よぶ, よんでくる, よびだす, よびつける, 招く, つかまえる, 連れてくる, 動員する, 連れて行く, 借りてくる, 引きずりだす, など

これらの動詞が従属節動詞である場合、それは主節事態実現をもくろんでいる使役主体が、CAUSEEを自らのもとによびよせる行為を表している。主節は、使役主体がみずからのもとの CAUSEE にある行為をさせるという事態を表現する。

最後の例は別だが、ほとんどの例で、CAUSEEへのかなり強制的な働きかけを表す。また、使役主体が自らのかわりにCAUSEEを使って、V<sub>2</sub> させるというニュアンスの使役もある。

- 奥さんは下女を呼んで食卓を片づけさせたあとへ、(ころ)
- (子供を順に) 呼びだして話させたことがあった。(観の観)
- 月々の収入支出等も佐助を呼びつけて珠算盤を置かせ決算を明らかにした(釋抄)
- よそ者を招いて教学を講じさせるというのは、(夜の橋)
- 手ぢかの子らをつかまえて、他教室から・・オルガンを・・運ばせた。(子どもの眠)

俗)

○梓は公演のときはいつも富美子をつれてきて身のまわりを世話させたが、(恋の巢)

○その晩は、全員を動員して宣伝ビラを市内じゅうに張らせたり、(蟹工船)

○(その写真は)ホテルから写真師を連れて行って撮らしたのである。(宴のあと)

○いいところのお嬢さんをそっくりそのまま借りて来てお座敷へすわらせた(流れる)

○こうなれば隠れている奴を引きずり出して、あやまらせてやるまではひかないぞと、(坊ちゃん)

○ごちそうをつくったときには、せひとも人をよんで来て味わわせないことには気がすまないのである。(食事の文明論)

先にも述べたが、上の例にもうかがえるように、この類では従属節動詞はシテ中止形であることが圧倒的に多く、次のようなシ中止形の例はほとんどない(手元の用例ではこれのみ)。

○神父もこの働きもののペペハウをマークしていたらしく、三年ほど前、タヒチに連れていき、ミッションで二カ月ほど働かせた。(南太平洋の曠野にて)

なお、CAUSEEが人ではなく“魚”である次の例も、この類だろう。

○「(その鱈は)・・・観音堂下の溝側で捕って来て、三石入りの水瓶で吐かせたそうですが」(黒い雨)

◆V<sub>1</sub> : 派遣する、やる、つかわす、代理にやる、(人)を送る、走らせる、(人)を出す、使いによこす、使いにする、など

これらの動詞は、人が他者を、ある場所で何らかの働きをさせるためにそこへ赴かせるような働きかけを表す。

○会社が、・・・の基礎資料を作成させようと(技師を)派遣した。(北行)

○事故状況の調査のために係員を数人現場にやる。

○曾我又座衛門云う侍を上使につかわす。(阿部一族:『学研国語大辞典』より)

これらが従属節動詞である使役は、使役主体が主節事態実現のために CAUSEE を必要な場所に赴かせるような働きかけを表す。CAUSEEは赴いた場所で、使役主体の意を受けて、あるいは使役主体のかわりに動作を行うのである。



- 田中正造は、・・・佐部彦次郎を現地に派遣して、被害の実況を詳細に調査させた。(田中正造の生涯)
- 吉野屋では、客が泊まっているひと間が、昼ごろになってもいっこうに人が出てくる気配がないので、不審に思って女中をやって様子をうかがわせた。(夜橋)
- 「素晴らしい別嬪だってこってすぜ。何せ、奥さんをわざわざ東京へやって、見立てさせたというから、うちの旦那も風変わりさね」(娘)
- 丸山の遊女を毎夜そこにつかわし、侍らしめて、紅毛人の歓心を買うことにこれつとめていた。(静籬の墓)
- (自分は)妻を代理にやって礼を云わした。(和歌)
- その年に、治憲は国神の春日大社と白子神社に内使を送って、ひそかに誓詞を納めさせた。(夜橋)
- ちょいちょい足らぬ物のあるのを思い出しては、女中を仲町へ走らせて、買って来させた。(雁)
- 家では人を出して、心あたりをくまなく尋ねさせたけれども、なんの手がかりも得られなかった。(路傍の石)
- 梅を使いにして(あの方に)何か持たせて上げようと思っても、(雁)
- 家の者が心配して、行見舞と称して書生をつかいによこしては、私の好物をとどけさせていた。(巽の者)

この類でも、従属節動詞はシテ中止形であることが圧倒的に多く、シ中止形の例は珍しい。

- (その土地は)李寿が、管理という名目で、使用人をおくり、コブラを作らせていた。(南太平洋の環礁にて)
- 今度は道長を関白頼忠のもとへ走らせ、花山帝失踪を告げさせている。(大嵐)

手元の資料の主節動詞は、他動詞派生の使役動詞ばかりであり、自動詞派生の例はない。しかし、次のような文はありそうである。

- 風邪をひいたので、弟を代理にやって、働かせた。

〔1-2〕「人<sub>1</sub>-に V<sub>1</sub>-して、(人<sub>1</sub>-に) V<sub>2</sub>-させる」

◆V<sub>1</sub> : 教える, 与える, わたす, 貸す, 電話する, など

これらの動詞は、物や知識を人に伝えることを表す動詞である。従属節動詞として用いられると、従属節は、主節事態を実現するにあたって CAUSEE にとって必要な知識や物を整えることを表現する。手元の用例では、従属節動詞はすべてシテ中止形である。

- これ（オウム）に言葉を教えて、そうしてあの坊さんに伝えさせよう（ビルの壁）
- 子供にも相当の規律をあたえてこれを守らせることが（おまごを親おは）
- 佐助に琴台と云う号を与えて門弟の稽古を全部引き継がせ、（替物）
- 舎監に訊ねると、・・・軽傷者には休暇を与えて帰郷させるのだと云った。（黒い雨）
- 大芝居を打とう。病気を理由に妻子に全部をわたして、家出を承認させる。（時雨の記）
- 外面の事情は聞いても聞かなくとも、三千代に金を貸して満足させたい方であった。（それから）
- まずここ（葬儀屋）へ電話してすぐに来させてよ。（夜の静）
- 保母さんは、・・・小さい子の口に（黒ずんだ実を）入れてやって味を覚えさせている。（「箆」の子育て）

なお、〔1-1〕〔1-2〕ともに、上であげた諸例は、従属節の行為の目的が主節事態の実現であることがかなり明確なものであるが、このタイプにも従属節の行為の意図性が必ずしも明確でない、あるいは消極的なものも少なくはない。“単なる継起”に近いが、従属節中に CAUSEE があり主節には CAUSEE が表現されないという特徴からすると、この類ではなかろうか。

- おりおりは〔私〕近所の大日様へつれて行って遊ばせた。（鯉の魁）
- 田植えだ、イモ掘りだ、となれば、ゼロ歳から五歳まで全部連れて行って、それなりの仕事をさせ、（「箆」の子育て）
- 特権階級のお坊ちゃんを遠ざけ、村のいとなみに関与させまいとする（北帰行）
- 「〔君〕慰労しておいて、もうひと働きさせる気じゃあないのかい」（時雨の記）

## 〔2〕物の準備

従属節事態は、主節事態の実現のために必要な物を準備する、整えるといった動作・行為のありさまを表現する。従属節事態は物の準備であってそれ自体は CAUSEE の存在とは無関係なので、従属節中には CAUSEE は現れない。一方、準備される物は、従属節内に現れることがほとんどである。その文脈への導入が大切だからだろう。そしてその物は、主節中においては現れないことが多い。表される場合には、それが

主節動詞にとってどのような要素となるかによって、「これを」「それを」あるいは、「これに／へ」「それに／へ」で現れる。両者のいずれであるかによって、ふたつの場合に分けられる。

〔2-1〕「人<sub>1</sub>-が 物<sub>1</sub>-を V<sub>1</sub>-して、(人<sub>2</sub>-に 物<sub>1</sub>-を) V<sub>2</sub>-させる」

第一は、準備された物が、主節動詞にとって「～を」で表されるような物である場合である。

準備された物「物<sub>1</sub>」は、主節中で明示的に「それを」「これを」などで現れることもある。

- (家族が) めいめい好きなものを買って、僕にそれを支拂わせる。(時雨の記)
- 妻は・・・赤児を差しつけて、それを自分に抱かせようとした。(和聲)

しかし実際には、「物<sub>1</sub>」は主節中に現れないことのほうが多い。

- 男の子の母親である若い嫁は、たんすの中から、白粉と脱脂綿をとり出して雪子に無理に受けとらせた。(靑い嵐)
- ローマの兵卒たちは、茨の冠を編んでイエスにかぶらせ、(死の黙索)
- 末造はふいとあれを買って持って往って、お玉に飼わせて置いたら、さぞさわしかろうと感じた。(雁)
- 少しずつ用事や規律をふやして、またそれだけのことを完全に実行させるというようにしたいと思います。(おさなごを親せよ)
- 伯母さんはいつでも撞木をかりて私にも二つ三つたたかせずにはおかない。(銀の匙)
- 悪童たちにやったことには、カケ(賭けごと)がある。何かの問題をこしらえては、相手がたにあてさせるのである。(子どもの民俗)
- 彼はその女を裸にして竹槍で突き殺させた後で、(靑銅の墓)
- わざと部屋を汚して母に掃除をさせたりするようにもなった。(貧困の精神病理)

従属節動詞は、シテ中止形が多いが、次のようにシ中止形もいくらかみられる。

- 行友は寝具までわざわざ・・・四つ揃いを取りよせ敷かせた。(奴)
- 先生は、黒板に宿題等を書かれた後、私の机の前にわざわざ来られて、それをゆっくり読み返し、点字で写させて下さいました。(指と取で読む)
- 波十郎は預かって帰り、城下で一番と言われる刀剣研師孫三郎に研がせ、終わってから・・・(夜鳴)
- 呪いの文句は、錯覚の世界に光彩を加え、しまいには、絶対のものと司祭夫人

カーリーナをして信用せしむるに至る。(ルーマニアの小さな村から)

〔2-2〕「人<sub>1</sub>-が 物<sub>1</sub>-を V<sub>1</sub>-して、(物<sub>1</sub>-に／へ) V<sub>2</sub>-させる」

第二は、準備された物が、主節動詞にとって「～に／へ」で表されるような存在である場合である。

この類でも、「物<sub>1</sub>」が「これに／へ」「それに／へ」などで表されることもある。

○結婚を生死の間に横たわる一大要件と見做して、あらゆる他の出来事を、これに従属させる考えの嫂から・・・(それから)

○ようよう籠を一つ頼むようにして売って貰って、それに紅雀を入れさせた。

(雁)

○寝椅子に毛布を敷いて、壬生をそこへかけさせ、(晴雨の記)

しかし、ここでも「物<sub>1</sub>-に／へ」にあたる要素は、主節中に現れないほうが多い。

○全日空では毎年秋になると、全社員に「人事調査票」を配り、個人の希望を記入させる。(朝日新聞) (この例のみ、シ中止形である)

○保科は・・・女に盃を突き出して酒を注がせた。(夜霧)

○わたしは、・・・その人がコートを着ているあいだに車を呼び出して、押し込むように乗り込ませた。(晴雨の記)

○ちゃぶ台の正面とその横とに座ぶとんをおいて私たちが坐らせ、(朝日新聞)

〔2-3〕「人<sub>1</sub>-が 物<sub>1</sub>-を V<sub>1</sub>-して、物<sub>1</sub>-で V<sub>2</sub>-させる」

準備された物が、主節動詞にとって「～で」で表されるような存在、つまり、主節事態の実現する場所を表すようなものであることもある。

○川岸の柳の下に大きい傘を張って、その下で十二三の娘にかっぼれを踊らせている男がある。(雁)

次の例は、「物<sub>1</sub>」の意味づけが以上の例と比べやや特殊なものであるが、一応ここに挙げておく。

○かづが・・・(野口の)着物を出して、手ずから着換えさせた。(夏のあと)

〔3〕状況の準備

人が他者に、ある意図を含んだ態度をとることによって、その他者に意志的におこなえる動作・行為を行わせることがある。次の例は、そういった事態が表現されている使役文である。

- 柏木は又意地悪く、ききとりにくいふりをして、私にもう一度その言葉をくりかえさせた。(鋼特) (cf. ほのめかし)
- 昼メシだけはまあまあ食えるのも、食べ物で気をひいてもっと働かせようって魂胆だ。(北畑行)
- 「・・・君たちこそ、勝手すぎやしないか。葉ちゃんの弱味につけこんで、気違いのお相手させるの、どうかと思うな」(花影)

### 《C-3》付帯状況ともなる先行

《C-3》類も、人が他者にまずある働きかけをし次に別の働きかけをすることが、それぞれ従属節と主節とで表される。この点では《C-2》類と似ているのだが、初めの働きかけが完全に終了してしまうのではなく、働きかけた状態をそのまま保ちながら、次の働きかけを行うという点が特徴である。主節事態が実現しているときに従属節事態が続いているといえるわけで、その点で付帯状況を表す《B》類に近い面がある。

- ◆V<sub>1</sub> : 抱く, 抱き上げる, つかまえる, つかむ, とらえる, [手]とる, [手]もつ, ひく, ひっぱる, 押す, 押さえる, など

これらの動詞は、いわば“接触”を表す動詞であり、これらが従属節動詞として使われた使役の複文は、使役主体が CAUSEE に対して接触というかたちで物理的に働きかけ、その接触状態を保ちながら CAUSEE のある行為を引き起こすという事態を表現する。つまり、CAUSEEへの接触は、主節事態が実現している間ずっと続くのである。その接触は、主節事態の実現のために使役主体によって意図的になされるものが多い。主節事態は、主として姿勢の変化であり、それめかなり無意志的な変化を表すものが多く、これは、自動詞派生の使役動詞で表されている場合に特に顕著である。

ほとんどの例で、主節にはCAUSEEが現れず、

「人<sub>1</sub>(0N)-を V<sub>1</sub>-して (=V<sub>1</sub>-しながら, V<sub>1</sub>-した状態で), V<sub>2</sub>-させる」という構文になる。手元の用例中、主節に CAUSEE が現れるのは、次の第一番目の例のみである。

#### 《自動詞使役》

- 彼の太い手が下りて来て、襟首をつかまえて、私を立たせた。(鋼特)
- 中学生をそっと抱いて蒲団に横たわらせてから、(鉄)
- 直ぐ立ち上って行こうとする女中の袖を女がとらえて、またそこに坐らせた。

(雪國)

- いざ汽車が来たという際は、一方が手を引張って避難させることにした。(黒雨)
- 叔父さまは浮かれて、私たちをお座敷に引っぱって行って坐らせた。(錨)
- 両手を持って立たせる。 ○保母が尻を押してやって、のぼらせた。

#### 《他動詞使役》

- 娘は赤ん坊を私から受け取り、その手をつかんで、オツムテンテンの仕種をさせる。(黒雨)
- 「ほれ、此処にも梅がござります」と一々老木の前に立ち止まり（佐助は春琴の）手を把って幹を撫でさせた(禿勢)
- [葉子は]眼をつぶって、床の上に寝倒れると、木村の手を持ち添えて自分の脾腹を押えさして、つらそうに齒を喰いしばってシーツに顔を埋めた。(蛸女)
- ミホを抱いて、おっぱいをふくませている姿を、(「節」の預て)
- 自分は祖母を抱き起こした。そして後ろから抱き上げて用を便じさせた。(細解)
- 細谷が・・・ひとと眼を据えたままで、相手の腕を押え、刀をおさめさせたが、(夜霧)  
(cf. 「刀をおさめる」は意志的な行為でもあり得るが、この場合には無意志動作に近くなっているだろう。)

#### ◆V<sub>1</sub> : 介助する, 世話する, 助ける, 手伝う, 手助けする

これらの動詞は、その表す働きかけが、上の「抱く、とる、・・・」などの動詞に比べて、やや抽象化された動作を表すものであるが、これらが従属節動詞となった使役文での従属節事態と主節事態との関係には似たところがある。手元の用例には「助ける、手伝う、手助けする」はなかったが、類似の例があるのではなからうか。

- [重症心身障害者は]自力で食事をとることはできない。だれかが介助して食べさせるのだが、(黒靨と教)
- 小間使いの加代はまだ十八の娘だが、・・・和也の子を妊ったのを倫が世話してこの二階で分娩させたのである。(女坂)
- 落胆している夫を助けて店を再開させる。
- 長女が次女を手伝って、着物を着替えさせている。
- 二人のボーイを手助けして、ドアを取り換えさせる。

◆V<sub>1</sub> : 雇う, (人を)抱える, (人を)置く, (人を)入れる, 任命する

これらの動詞も, 先の「抱く, とる, …」のような物理的・具体的な働きかけではないが, 人が他者を, ある行為(仕事)を行うべき資格を備えた, あるいは義務を帯びたものとするような, いわば社会的な働きかけを表す。

- バーは母に渡すから, 人を雇ってやらずがよい, (花)
- 機織女まで抱えて織らせる家がなかったのは, (瓢)
- 十三になる小女を一人置いて, 台所で子供の飯事のような真似をさせているだけなので, (雁)
- 前の年あたりから大工を入れ, 新しい工事を始めさせていた。(嵐)
- この青年をアテナイ艦隊の司令官に任命し, シケリア遠征に向かわせた。(死の罫)
- 会社は, …業務編成の外部にスタッフ的な役職を設けて兼任させることにした。(北新)
- ひとりの秘書に目をつけて後をつけ, 言葉巧みに言い寄って自分の女にし, その女に運動させて就職を果たし, 事務員となった。(貧困の精神病理)

◆V<sub>2</sub> : 預ける, 入れる, 寄宿させる, 奇寓させる,

立たせる, 乗せる, 出す, 放りこむ, 縛りつける, 寝かせる, など

これらはいずれも, 「人を 場所に Vする」という構文で用いられる動詞であり, 複文構造の使役文の従属節動詞として用いられると, 次のような構文となって主節事態の実現のためによりふさわしい状況(場所)に CAUSEE をおくという働きかけを表す。

「人<sub>1</sub>-を 場所<sub>1</sub>-に V<sub>1</sub>-して, (人<sub>1</sub>-に 場所<sub>1</sub>-で/から) V<sub>2</sub>-させる」

CAUSEE はその場所に存在しつづけて主節事態を実現させるのだから, 従属節事態は, 主節事態の付帯的な状況を表現するものとみなせるだろう。

- よそのサーカスでは子供を親戚の元などに預けて学校へ通わせている家庭が多いと聞か, (サーカス放浪記)
- 二児のうち長男は私と同年で, はじめから祖父母の家にあずけ, 東京の師範学校に通わせていたが, (羊の歌)
- (某名家では子どもを)とにもかくにもみなよい学校にいれて, 学問をさせておきました。(おさなごを産見せよ)

- ほぼ同じ教育内容でとりくめる子どもたちを、一つのグループに入れて学習させるもの。(辭観と教箱)
- 自分の実家に子どもを寄宿させて出身地の国立中学校へ通わせたいという親もいる。(駈だつて子育て)
- 時雄は(芳子を)・・・姉の家に奇寓させて、其処から麴町の某女塾に通学させることにした。(翻)
- いずこのカフェーでも女給を二、三人店口に立たせて、通行の人を呼び込ませる。(ばく東講)
- [婿さんと嫁さんを]できるだけ真中に出して踊らせなさい。(ルーマニアの小さな村から)
- いくら月給で買われた身体だって、あいた時間まで学校へ縛りつけて机と睨めっくらをさせるなんて法があるものか。(坊ちゃん)

多くは従属節動詞がシテ中止形であるが、シ中止形のものもある。

- 娘をナイロビの飛行機クラブに入れ、パイロットの免許を自費で取らせたというのが、(花のある遠景)
- 老人は新三の嫁を自分たちの漁船にのせ、ダイボ網を見物させると主張したのであった。(鮎肌のおい)

次の例では、[放りこむことで(ことよって)、泳ぎを自得させる]などという、手段的なはたらきかけでもある。

- 泳げない子供を水のなかに放りこんで、泳ぎを自得させる教育法(羊の歌)
- (捕虜を)焚火のそばにねかせて汗をながさせ、(エルマの壁)

#### ◆V<sub>1</sub> : その他

次の例の従属節も、付帯状況といえるだろうか。

- 小学校でわざわざ子供を二組にわけて、紅白合戦をさせるほど(羊の歌)
- 異なる部族の出身者どうしを組みあわせて働かせるようにした。(ことばと歌)

### 《D》 直接的・間接的な要因

主節事態が非意志的な動作のひきおこし(主として、心理的变化・生理的变化のひきおこし)であり、従属節事態が、何らかの意味で主節事態の原因・要因となるような関係のものを《D》類とする。その原因あるいは要因は、人が積極的に作りだした事態であったり、人とは無関係に出現した事態であったり、ある事柄の存在だった



りする。

主節には CAUSEE がほとんど現れるが、これは、心理的変化・生理的変化のひきおこしを表す使役文においては、単文においても CAUSEE が省略されず文中に明示されることが多いことと関係しているだろう。また、従属節動詞は、《D》類全体で、ほとんど常に、シテ中止形である。

### 《D-1》主節事態の原因としての外的状況

従属節事態と主節事態とが相互に独立して実現する事態であるにもかかわらず、従属節事態が主節事態（CAUSEEの変化）をひきおこす原因としてはたらくことがある。つまり、従属節事態は、本来 CAUSEE の存在とは全く無関係に実現する外的状況であるにもかかわらず、主節事態の原因となるのである。（ただし、なかには主節事態実現の準備として従属節事態が行われるという感じになるものもある。）

従属節動詞には意味・構文的な制約はないが、形はシテ中止形がほとんどである。また、従属節事態は主節事態にとって外的な状況であるからか、従属節のなかには CAUSEE は現れない。

#### 〔1〕意図的つくりだし

人が他者の心理的・生理的な変化をひきおこすことを目的として、何らかの具体的な言動、それも直接にはその他者に働きかけるわけではない言動を行い、それが功を奏して変化が生じるということがある。働きかけが従属節で、生じた変化が主節で表される。

〔心理的変化のひきおこし〕

- 交番のところへ来るとわざと駆けだして巡査をまごつかせる。（むらま）
- 奴は何処の何者が存じませぬがお師匠様のお顔を変えて私を困らしてやると云うなら・・・（春鞆）
- その会社にいる某という泉の知合いが、太っばらな工作をして労資双方のがわを満足させた。（むらま）
- 規定に従って相当の資金を支出して村民を安んぜしむるは極めて必要なる処置なりと信じております。（中正産の蛙）
- まん中に鬼がいて、そのまわりを歌いながらまわる。鬼は、はじめは煮えているごちそうだが、最後はおばけに変身して、みんなを驚かせる。（「術」の子猪）

〔生理的変化のひきおこし〕

- 学校の廊下に蠟を塗って女の先生をすべらしてよろこんだこと（潮騒）

- 「夜、房の前で鍵をガチャガチャさせて、わざと[機を]眠らせないようにしている」(死刑囚の記録)

## 〔2〕非意図的につくりだし

上の〔1〕とは異なり、それ自体としては他者の変化を引き起こすことをもくろんでなされたわけではない言動が、他者の心理的变化を引き起こすこともある。

〔心理的变化のひきおこし〕

- 若いころは(柴の束を)八つも背負い出して、村の連中を驚かせたものだ、(彼の橋)
- (弟は)入学以来たちまちいろんな問題を起して両親をくたびれさせている上に、(おとうと)
- 音楽の時間になると、妙に荒れだして、先生を困らせる。(中学校は、いま)
- S君は、・・・とつぜんクラスの中で大声を発して、みんなをびっくりさせる。  
・・・授業時間中に姿をくらまして、先生を困らせる。(中学校は、いま)
- そこでわたしの想像の中に現われたサワンもかんだかく鳴き叫んで、実際にわたしを困らせてしまったのであります。(屋敷の上のサツ)
- 若いときには相当道楽もして細君をはらはらさせた人が、(新紋鞆)
- (彼が)長く連れ添ってきた妻を絞め殺して小さな町を騒然とさせたのは、(北新)

次の例の従属節のように、人の行為を表してはいるものの、個人の個々の行為としてではなく、総体として生じる事態が主節事態の要因となっているものもある。これらは、次の〔3〕に近いだろう。

- その時の葬儀には三百人もの人が参列し、遺族の人達を大変おどろかせました。  
(指と目で読む)
- その時は若い婦人を主に百人もの人が教室にあふれて、講師をつとめた私たちが驚かせたものです。(指と取読む)
- (二人が)大声で口論するのが聞えて人びとを驚かせた。(大篇の人びと)

## 〔3〕人とは無関係に出現した事態

人の行為ではない何らかの事態が、人の心理的・生理的变化を引き起こすような場合もある。

〔心理的变化のひきおこし〕

- これは大そう巧く行き、帰ってきた柏木をおどろかせた。(金時)
- すべての事件は、全く偶発的に、ある日突然おこり、一瞬間私たちが驚かしただけで、(羊の歌)
- そこへイギリスの皇太子の日本訪問がかさなって、というより、それをさわぎたてる新聞記事の調子がかさなって、坊ちゃん坊ちゃんした豊彦にいきなりそんなまねをさせたということは、(むらさき)
- 僅かな日ざしの動きや違いに、その音響は微妙に変化して、酔い痴れる気持ちにさせるのです。(月山)
- 底から光って、見る側を落ちつかなくさせるきらびやかな蛍光塗料(ルーマニアの小さな村から)
- 山麓にはまだ一度も雪は訪れずにいた。それが気圧を重くるしくし、療養所の患者達の気をめいらせていた。(鱧子)

#### [生理的变化のひきおこし]

- 体への害物が皮膚から浸透して体内の各器官が不調となり、消化不良を誘発させている。(黒い雨)

#### [4] 静的状態の存在

人や物の動作ではなく、人や物の存在あるいはその状態が他者に影響を与えて、心理的な変化をひきおこすような場合もある。例に窺えるように、従属節動詞は「シテイル」のシテ中止形であることも多い。

#### [心理的变化のひきおこし]

- 福原さんも、意外な人と親しくしていて、しばしば私を驚かしたが、(新文筆集)
- その種の用件でかれをおとずれる人間は、たいてい間のわるそうな薄笑いをうかべていたり、・・・きわめて批判的な眼をしていたりしてかれを反撥させたが、(鳥)
- ユーカリの木の形や色は、アフリカというよりは、ヨーロッパ的な柔らかさを持っていて、わたしの心をなごませてくれるようだった。(花のある風景)
- 明るくあかぬけして・・・貴族の城館を思わせたが、(死刑囚の記録)
- 環夫人は・・・逃げ去った。そのうしろ姿の白い靴の踵の尖りが、かづの目に残って、ますます愉快な気持ちにさせた。逃げてゆく白狐のようだと思った。(裏のあと)

次の例の従属節動詞は「ある」である（注5）。

○この簡潔な叱責には冷たい貴族的な調子があって、かづの心を凍らせた。（夏あ  
と）

○柳の本意であろうが、（『南無阿弥陀仏』の）序段にも柳の面目をあらわす発  
言が随所にあって、・・・現在の私をさえ興奮させる。（新紋鞆）

次のように、従属節述語が形容詞のものもある。

○肉づきがよくて、ルノアールの少女を思わせる（豊奴）

○（須賀の）動作は烈しくて由美をぎょっとさせた。（姫）

#### 《D-2》間接的要因

人が他者に対して何かを言ったりある態度で接したりしたことが、その他者（CAUSEE）の心理的な変化をひきおこすことがある。従属節事態は実際には CAUSEE に向けられたものであるにもかかわらず、従属節内に CAUSEE が現れることは珍しい。主節に現れている例が多いのは、先に述べた《D》類一般の特徴である。

従属節動詞にはいくらか特徴があり、次のように分けてみることができるだろう。

#### 〔1〕発話内容・発話事態そのもの

ある人が行った発話の内容や、その発話事態そのものが、他の人の心理・生理的な変化をひきおこす要因となることがある。従属節動詞が次のようなもの場合に多い。（ただし、「すぐに帰れと言って、帰らせた」「荷物を持ってくれないかと言って、半分持たせた」などは、次にみる《E》類である。）

◆V<sub>1</sub>：言う、言いだす、話す、告白する、打ち明ける、質問をかける

○私はよくこんな冗談を言って、子供らを困らせることがある。（嵐）

○わけのわからぬことを言い出して妻を困らせたり（姫）

○外に出てあれが欲しいこれが欲しいといって、一緒に行ったものを困らせたことはなかったのです。（おなごを親せよ）

○この商売をはじめた自分の行立を話して、衆を面白がらせながら、（あらくれ）

○「とにかく貧乏はよくないですな、貧乏からは何も生まれんです」と繰り返して、主賓の共産党員を苦笑させた。（武断夫）

○栗原は、B女を殺した事実を告白し、A女を安心させようとした。（死刑囚の記録）

○医者 of 来るたびにうるさい質問をかけて相手を困らす質でもなかった。（ころ）

## [2] 心理的な態度

CAUSEEに対するある種の感情的なニュアンスを含んだ態度が、CAUSEEの心理的変化をひきおこすことがある。次のような動詞で表される事態である。

◆V<sub>1</sub> : 逆らう, だだをこねる,

[心理的変化のひきおこし]

○お島はそれまでに、幾度となく父親や母親に逆らって, 彼等を怒らせたり悲しませたり, 絶望させたりした。(あらくれ)

○彼の弟は漁師になりたいと駄々をこねてお父さんを困らせた・・(庭の山の木)

◆V<sub>1</sub> : こばむ, 申し出る, ~したがる

これらは、ヲ格の動作性名詞をとる動詞(相当)であり、その動作性名詞が表す動作の実行を相手に要求することを表すものである。これらも他者に対する心理的な態度を表すものと考えてよいだろう。

○家具一式の引取りを、まるでその責任はそちらにあると言わんばかりに拒んで, 家主をまた困惑させた。(女の利)

○閉鎖の折に四散した雪後庵の雇い人たちは、[かた] つぎつぎと帰参を申し出て, かづにうれし涙を流させた。(女の利)

(cf. ヲ格が動作性の名詞であり、単なる言語活動ではない。)

○私たちは、互いに争うようにして仔馬の世話をしたがり、しまいには気の短い源さんを怒らせてしまうことさえあった。(北新)

◆V<sub>1</sub> : (たて)暴け出す, (たて)送りこむ, (たて)作用する

これらは、他者への態度的な関わりを表すとでもいえそうな動詞である。ただ、最初の例以外は使役主体が人でなく事柄であるため、働きかけ性はやや弱いと感じられるかもしれない。

○野育ちだから、生来具有の百の欠点を臆面もなく暴け出して, 所謂教育ある人達を撃墜せしめたけれど、(平凡)

○戦争が私に作用して, 暗黒の思想を抱かせたなどと思うまい。(金時)

○死の使は・・・皆の上に乗って暗な影を落として息を詰めさせてしまう。(おとと)

○本能的な怯えが、寝ている時間にも襲ってきて、彼を鋭く泣かせたりした。(花  
霞)

### 《D-3》直接的要因

人が他者に対して何らかの直接的・物理的な働きかけを行ったことが、他者 (CAUSEE) に影響を及ぼし、その変化をひきおこすこともある。次のような構文で表され、

「人<sub>1</sub>-が 人<sub>2</sub>-を/に V<sub>1</sub>-して、(人<sub>2</sub>-に) V<sub>2</sub>-させる」

意味的には、たとえば次のようにでも表せる関係をなす。

「人<sub>1</sub>-が 人<sub>2</sub>-に V<sub>1</sub>-した。ソノコトガ 人<sub>2</sub>-に)を/に V<sub>2</sub>-させた」

「人<sub>2</sub>-が V<sub>2</sub>-した原因は、人<sub>1</sub>-が 人<sub>2</sub>-に V<sub>1</sub>-したことだ」

「人<sub>2</sub>-が V<sub>2</sub>-したのは、人<sub>1</sub>-が 人<sub>2</sub>-に V<sub>1</sub>-したからだ」

主節中にはCAUSEEが現れないことが圧倒的で、さらに、「V<sub>1</sub>-してV<sub>2</sub>-させる」というように、従属節動詞と主節の使役動詞とが連続している例もしばしばみられる。

従属節動詞は、直接的・物理的な働きかけを表す動詞であり、形はほとんど常にシテ中止形である。

これも CAUSEE への働きかけ (それを表す動詞) の種類によって分けて示してみる。

#### 〔1〕物理的なはたらきかけ

◆V<sub>1</sub> : なぐる, なぐりつける, 打つ, 投げる, (首をタオルで) 巻く, 連れだす, 揺り動かす, 扱う, 張り倒す, 刺す

#### 〔生理的変化のひきおこし〕

○弟の宏は・・・組合長の息子の頭を刀で擲って泣かせたのであった。(麗)

○二時間ほどにわたり、四人で殴ったりけったりしたほか、木刀で全身を殴りつけて死なせた疑い。(朝日新聞:1987.9.28 夕刊)

○女がこぼんだので、鉄パイプで女の頭を打って失神させ、杉林の中で性交したのち現金千八百円とショルダー・バッグを強取した。(死刑囚の記録)

○天秤棒を振あげて、向って来る甘酒屋を、群衆の前に取って投げて、へたばらしという話なども、(あらくれ)

○家に忍び入ったところ、主婦のE女が目をさまして騒ぎたてたので、とびかかり、タオルで口をふさぎ、もがくのを首をタオルで二重にまいて窒息させた。(死刑囚の記録)

○昼のうちにいろいろなところに連れ出してうんと疲れさせ、(駈って育て)

以上は自動詞使役の例，以下は他動詞使役の例である。

- そのときに揺り動かして目を覚まさせると，(色)
- 庄吉さんがびっこになったのは，舷に足首を打ちつけて骨折させたためである。  
(黒い雨)
- (眠っている女子学生に)水をぶっかけて目をさまさせてから，(豊奴)
- 激流のように流れて止まらぬ力は倫を否応なしに押し流して深い吐息とともに  
はるかな水上を眺めさせるばかりである。(奴)

[心理的変化のひきおこし]

- 馭者は更に手荒に扱ってジルゴを怒らせた。(北帰行)
- (新しい家に)いきなり連れて行って驚かせたい，(時雨の記)
- 九円五十銭払えばこんな家へ這入れるなら，おれも一つ奮発して，東京から清  
を呼び寄せて喜ばしてやろう・・・(坊ちゃん)

[意志的な動作・行為のひきおこし(ただし，かなり無意志的)]

- 呆気にとられて見ている連中を三，四人まとめて張倒して退散させた。(夜の翻)

◆V<sub>1</sub> : 乱暴する，乱暴をはたらく，突進する，さわる，ブレーキをかける，いたずらをする

[生理的変化のひきおこし]

- あるときA君がB君に乱暴して足にけがをさせてしまった。(中学校，いま)
- 青年はおどりがあって乱暴をはたらき，娘とその親たちとに怪我をさせて，逃げて帰るなり，(むらさぎ)
- クロは彼らの方に突進して仔豚を驚かせ，親豚を怒らせた。(メキシコからの手紙)

[心理的変化のひきおこし]

- 庄吾のふところには，国もとからきた電報がはいていた。それがゴソゴソ腹にさわって，やたらに彼の気もちを，むしゃくしゃさせていた。(路傍の石)

[2] 態度的な働きかけ

◆V<sub>1</sub> : すかしなだめる，いじめる，おこる，導く，追い詰める，疎外する

〔生理的变化のひきおこし〕

- こういう場合に、[子どもを] ただすかしなだめて泣きやませるというようなことをすると、(おなごを親せよ)
- 兄どもがなかよく一心にあそんでいるところへ妹が出かけて行って、おもちゃをませかえしなどするものですから、二人は、おこって妹を泣かせます。(おなごを親せよ)

〔心理的变化のひきおこし〕

- お母さまを、私と直治と二人でいじめて、困らせ弱らせ、(鍋)
- 神は失明という苦難を通じて、私をここに導き、今この地点に立たせておられるのです。(指と耳で読む)
- (その町は)ひどく大雑把なところがあったので、窮地に立つ者を更に追い詰めて犯罪に走らせるような残酷さとも無縁だった。(北新)
- 夫を疎外し、アルコール依存や愛人に走らせるような・・・(貧困の精神病理)

《物・事柄主語との関係》

《D》類のうち、《D-1》《D-2》《D-3》類の使役文によって表現されている事態はまた、従属節で表される事態を、「～コトが」などのかたちで主語として表すこともできる。これらの類は、意味的に、物・事柄主語の使役文に近いといえるのだろう。

〔D-1〕

- a 交番のところへ来るとわざと駆けだして巡査をまごつかせる。(わらき)
- b ……わざと駆けだしたことが巡査をまごつかせる。
- a 若いころは(柴の束を)八つも背負い出して、村の連中を驚かせたものだ、(夜の橋)
- b 柴の束を八つも背負い出したことが、村の連中を驚かせる。
- a これは大そう巧く行き、帰ってきた柏木をおどろかせた。(金時)
- b これが大そう巧くいったことが、柏木をおどろかせる。
- a 福原さんも、意外な人と親しくして、しばしば私を驚かしたが、(新編 韃靼集)
- b 福原さんが意外な人と親しくしていたことが、私を驚かす。
- a この簡潔な叱責には冷たい貴族的な調子があって、かづの心を凍らせた。(宴のあと)
- b 冷たい貴族的な調子がかづの心を凍らせる。



〔D-2〕

- a 私はよくこんな冗談を言って、子供らを困らせることがある。(嵐)
- b 私がこんな冗談を言うことが、子供らを困らせる。
- a お島はそれまでに、幾度となく父親や母親に逆らって、彼等を怒らせたり悲しませたり、絶望させたりした。(あらくれ)
- b お島が父親や母親に逆らったことが、彼等を怒らせたり悲しませたりする。

〔D-3〕

- a 弟の宏は・・・組合長の息子の頭を刀で擲って泣かせたのであった。(瀧)
- b 宏が組合長の息子の頭を刀で擲ったことが、(彼を) 泣かせる。
- a こういう場合に、[子どもを] ただすかしなだめて泣きやませるというよ  
うなことをすると、(おなごを親せよ)
- b 子どもをすかしなだめたことが、(その子を) 泣きやませる。

#### 《D-4》要因となる内的状態の出現

ところで、次の使役文、CAUSEEに心理的変化がひきおこされることを表すものだが、これらの従属節を、CAUSEEへの心理的な働きかけ、あるいは、CAUSEE自体の内部でのある心理的状態の出現とみなし、それが主節事態の要因となっているとみなすことができるだろうか。

◆V<sub>1</sub>：悩ます、(気持ち)を刺す、(気持ち)を刺激する、関心をそそる

- この思いはいたく私を悩まし、その場にいたたまれぬ気持にさせた。(金時)
- この言葉ははげしく私を刺し、いたたまれぬ気持にさせた。(金時)
- 彼女の言葉「すっかりもとのようになりました。今出来のものと違い、手造りですから」が、妙に私の関心をそそり、今まで何とも思っていなかった平凡な柱時計への認識をあらためさせ、(新敏彥)
- 遠回しの忠告は彼の気持を刺激し、その悪循環を早めさせることになった。(北  
駈)

◆V<sub>1</sub>：(興味)がもつれ合う、(野性)を発達させる

- そしてその興味が、それでもなお一方に起きる恐怖ともつれ合って彼をおのの  
かせていた。(青銅の墓)
- (子供は)いつとなくその野性を発達させて、何でも人を困らせたり・・・(お  
なごを親せよ)

前者の例は、いずれも、使役主体が人ではなく「思い」「言葉」「忠告」であること、および従属節動詞の形がシ中止形であることにおいて、《D》としてはやや特殊である。後者の例も、初めの例は「興味」が主語である。いずれも、どのように位置づけたらよいのかよくわからない。

### 《E》 主節事態の含みこみ

使役主体が、他者 (CAUSEE) に積極的・意図的に働きかけて意志的な動作・行為を行わせるという、いわば典型的な使役において、使役主体からCAUSEEへの働きかけは、その行すべき動作・行為を含みこんだかたちでなされる言語的・態度的なものであることがある (佐藤1986など)。その働きかけは、初めにも述べたように、具体的には文中に表現されないことも多いのだが、複文の従属節として示されることもある。ここで《E》類として検討しようとするのは、そういった類の使役構造である。

この《E》類は、先にみた《C-2》類の〔1〕人 (CAUSEE) の準備と似てはいるが、やはり別のタイプと考えられる。いま次のような例で二者の違いを考えてみる。

(ア)は《C-2》類の〔1〕、(イ)は《E》類である。

- (ア)-a 負傷者に休暇を与えて 故郷に帰らせる。
- b 部下を現地に派遣して 実態を調べさせる。
- (イ)-a 秘書に命じて 書類を書かせる。
- b 学生を煽動して デモに参加させる。

(ア)では、従属節事態(「負傷者に休暇を与える」「部下を現地に派遣する」と主節事態(「故郷に帰らせる」「実態を調べさせる」とがそれぞれ、相互に独立に成り立つ事態であるのだが、(イ)では、両者が全くの独立事態であるとはいいいにくい。したがって、次の(イ)-a', -b'はやや不自然な文となる。

- (ア)-a' 負傷者に休暇を与える。そして、故郷に帰らせる。
- b' 部下を現地に派遣する。そして、実態を調べさせる。
- (イ)-a' ? 秘書に命じる。そして、書類を書かせる。
- b' ? 学生を煽動する。そして、デモに参加する。

おおまかにいえば、(ア)では、相互に独立な従属節事態と主節事態とが時間的に[先行-後続]の関係にあること、そして、従属節事態は主節事態にとって何らかの関わりをもつという程度であるのに対して、(イ)では、従属節で表される働きかけ(「秘書に命じる」「学生を煽動する」という言語的・態度的な働きかけ)のなかに主節の内容(「秘書が書類を書く」「学生がデモに行く」)がいわば含みこまれてい

るような関係になっているのである。

(ア)-a” ? 負傷者に 故郷に帰るよう 休暇を与える。

-b” ? 部下を 実態を調べるよう 現地に派遣する。

(イ)-a” 秘書に 書類を書くよう 命じた。

-b” 学生を デモに参加するよう 煽動する。

両者の違いを別の観点からいえば、(ア)のような構造の文では、従属節動詞の相手や対象が CAUSEE でもあるということは文脈からよみとれるだけであるのに対して、(イ)では、従属節事態にすでにその相手や対象が CAUSEE でもあることが含意されている、という違いでもある。

佐藤(1986:93)は、使役構造の文について、「現実の世界では、ふたりの関与者がそれぞれべつの動作をしていて、相対的に独立したできごととして存在しているのである。そして、ふつう、このふたつのできごとのあいだには時間的な継起性があり、先行するできごとの存在が後続するできごとの出現を条件づけている。」と述べているが、この《E》類の使役は、佐藤のこの論にうまく合致しないものである。

《E》類はまた、主節内に CAUSEE が明示されるか否かという点で《C》《D》類と異なる。すなわち、《C》《D》では、CAUSEE が主節中に明示されることもされないこともあるのに対し、この《E》類の使役文では、CAUSEE が主節中に明示的に現されることがほとんどない。つまり、

「人<sub>1</sub>-を／に V<sub>1</sub>-して、人<sub>1</sub>-を／に V<sub>2</sub>-させる」

とならず、

「人<sub>1</sub>-を／に V<sub>1</sub>-して、V<sub>2</sub>-させる」

となるのである。

《E》類の従属節動詞は、意味・構文的に一定の特徴をもったいくつかの類の動詞に限られ、その形は、ほとんど常にシテ中止形である。また、主節動詞は大部分が意志的な働きかけを表す他動詞であり、自動詞の例はきわめて少ないのも特徴である。

なお、この種の使役は、CAUSEEが人である使役事態には存在するが、CAUSEEが物である使役には存在しないが、それはこの類の上述の特徴からして当然であろう。

以下、このタイプの複文を従属節動詞の種類によって分けて考えることにする。

### 《E-1》言語的・態度的な働きかけ

この類は、従属節動詞によって、使役主体からCAUSEEへの言語的・態度的な働きかけのありさまが、具体的に述べられるものである。

〔1〕「人<sub>1</sub>-に V<sub>1</sub>-して、(人<sub>1</sub>-に／を) V<sub>2</sub>-させる」

◆V<sub>1</sub> : 命じる, 命令する, 指図する, 指令を下す, いいつける, 催促する, 請求する, 要請する, 強要する, 無理強いする, よびかける, 訴える, 主張する, せまる, 頼む, 願う, お願いする, せがむ, 掛け合う, 談判する, 厳談する, 勧める, 教える

これらは、相手に対する命令・依頼・助言・勧めなどを表す動詞であり(注6), 命令などの相手を表す二格の人名詞と命令などの内容を表すヲ格の動作性名詞をとる構文, あるいは, 命令などの相手を表す二格の人名詞と「～しようと／～しろと／～するよう／・・・」などの引用句を成分とする構文との二種類の構文をとりうるものである。

○「人<sub>1</sub>-に ナニ(動性名詞)を 命じる／よびかける／勧める／・・・」

○「人<sub>1</sub>-に ～しようと／～しろと／～するよう／・・・

命じる／よびかける／勧める／・・・」(注7)

これらが《E-1》の複文の従属節動詞として用いられたときの特徴として、その従属節内には、命令などの内容を表す引用句は現れうるのだがヲ格の動作性名詞はほとんど現れないという点がある。

(ア)「人<sub>1</sub>-に ・・・と 命じて／よびかけて／勧めて／・・・, V<sub>2</sub>-させる」

(イ)「人<sub>1</sub>-に 命じて／よびかけて／勧めて／・・・, V<sub>2</sub>-させる」

そして実際には、下の諸例にみるように、命令などの内容は、引用句としてすら表現されない(イ)のタイプが圧倒的である。また、表現される使役事態は、命令・依頼の意が強いものや、助言・勧めの意が強いもの、使役主体の意見の主張という意が強いものなどさまざまであること、他動詞使役は多いが自動詞使役はきわめて少ないことも気づかれる。

《他動詞使役》

○ピエールは子供に命じて椰子の実をとらせた。(南太平洋の環境にて)

〈[椰子の実をとる]よう [子供に命じる]〉

○須賀に指図して膳や碗の箱を降ろさせた後, (娘)

〈[箱を降ろす]ように [指図する]〉

○かれらは山崎に指令を下し, かづが逸脱しない限りでは好きなだけさせる方針でいた。(裏のあと)

○女主人は女中に言い付けて, 鏡台の抽斗から元結を出して来させた。(雁)

- 彼は下婢に言付けて、階下から残った洋酒を運ばせた。(家)
- 翌朝、支配人に厳談して、部屋を代えさせた。(時雨の記)
- 市役所が市民に呼びかけて、空襲のときの避難用に設備させていた竹筏の一つである。(黒い雨)
- 私が主張して彼を私と同じように取り扱かわせる(こゝろ)
- 弟子の検校が誰かに頼んで師の伝記を編ませ、(春鞆)
- 今田は懇意にしていた町医者に頼んで二人を治療させ、(北帰行)
- (内田百聞を)義兄に勧めて読ませた。(庭の山木)

これらの諸例が、比較的純粋に言語的な働きかけといえるのに対して、次のような例は、言語的な働きかけに加えて、使役主体の CAUSEE に対する何らかの態度的な働きかけをも表現しているように思われる。

- 県にせまって堤防を修復させる(中津の雄)
- 誰かに訴えて、弟の生前の思いをとげさせてやる(鍋)
- 若い男に無理強いして、船長の体を押さえさせた。(花のある庭)
- 『少年倶楽部』が・・・普通に届けられるのが待ちきれず、本屋さんが駅から店までもっていく途中、家の前を通るので無理矢理せがんで、そこで荷を開かせ、置いて行ってもらったものです。(指と取鉢)
- 宮津の漁師に掛合って船を仕立てさしてくれただそうだ。(黒い雨)
- 彼は私に教えて・・・～コツなどを、念入りに習得させた。(金剛寺)

#### 《自動詞使役》

この類の自動詞使役の例はきわめて少ない。言語的はたらきかけによって引き起こせる自動詞動作が少ないということだろうか。(なお、二番目の例は、主節中に CAUSEE が現れている(「碧朗を」)。この類としては稀な例である)

- 船長が安夫に命じて、彼を扶けて、船室へ赴かせた。(潮)
- 父親は不機嫌でなく、「とにかくきょうは緊張して疲れたろうから、早く横になって休むことにしたらどうだ」とすすめて、碧朗をさがらせた。(おとう)

「彼に命じて行かせた」「客にすすめてすわらせた」など自動詞使役の例がありそうではあるが、手元の用例には、他に次のような例しかない。初めの例は主節動詞が「させてもらう」の形である。第二、第三の例の「強いて」はかなり副詞的である。

- 空きトラックが来たので、頼んで便乗させてもらった。(黒い雨)
- 木村を、強いて又旧のように自分の側近くに坐らせた。(或女)

○（倉地を）葉子は強いて起き返らした。（或女）

◆V<sub>1</sub>：言う，説く，言い聞かせる，意見する，合図する，連絡する，助言する

これらの動詞は，上の「命じる，よびかける，勧める」などと違って，他者への働きかけを表す引用句はとれるが（注8），ヲ格の動作性名詞はとりにくいものである。

○「人<sub>1</sub>-に ～しようと／～しろと／～するよう・・・ 言う／意見する／・・・」

○？「人<sub>1</sub>-に ナニ(動性名詞)を 言う／意見する／・・・」

そして，従属節動詞として用いられるときには，次のようになる。

(ア)「人<sub>1</sub>-に ・・・と 言って／意見して／・・・，V<sub>2</sub>-させる」

(イ)「人<sub>1</sub>-に 言って／意見して／・・・，V<sub>2</sub>-させる」

実際には，次の第一の例のように引用句を伴うものは稀で，第二例以下のように，引用句をもヲ格の動作性名詞をもとらないものが多い。

○「はい，もう一度やってみようね」といって，くり返しさせる。（辭説と類）

○（倫は美夜の言いぶんを聞いて）自分たちで道雅に意見して二度とそういう無法は通させないから，ともかく縁あって嫁入って来たこの家を出るようなことはしないでくれと・・・（或）

○みんなに言い聞かせて・・・納得させました。（時雨の記）

○十吉は・・・新治に合図をして，調革をエンジンにつけさせ，（潮騒）

○僕は工務部に連絡して，板を幅三寸，長さ六尺ほどに削らせ（黒雨）

○アルキビアデスは，スパルタ側に助言して，アテナイの急所ともいうべきデケレイアに要塞を築かせ，（死の黙）

また，次のように，発話の内容が具体的に述べられ，その中に CAUSEE のなすべき行為が暗示的に示されている例もある（注9）。

○非行生徒の指導で疲れ果てた先生たちから，転任したい，という申し出がよくあったが，せっかく素朴な人間の触れ合いをはじめたところだから，と説いて転任を思い止ませたということだった。（中學校，い）

◆V<sub>1</sub>：声をかける，手をまわす，手紙をやる

これらは「～をV<sub>1</sub>」の全体で，言語的・態度的な働きかけを表しているといえるだろう。

- 私は声をかけて仕事をいそがせる。(花のある風景)
  - 「ああやって喧嘩をさせて置いて、すぐあとから新聞屋へ手を廻してあんな記事をかかせたんだ。・・・」(坊っちゃん)
  - 手を廻して西鳥越の方を尋ねさせて見ると, (雁)
  - 木村に手紙をやって破約を断行させ, (或女)
- (cf. 「新聞社に金をやって連載させなくした(編)」もこの類だろうか。)

〔2〕「人<sub>1</sub>-を V<sub>1</sub>-して, (人<sub>1</sub>-に/を) V<sub>2</sub>-させる」

- ◆V<sub>1</sub> : 説得する, 説勧める, うながす, あおる, 煽動する, 鼓舞する, 駆り立てる, 駆る, おどす, おどしつける, 脅かす, 叱る, 威嚇する, 籠絡する, 指揮する, 教えいませめる, 諫める, そそのかす, けしかける, せきたてる, 尻をたたく, おだてる, くどく

これらは、ヲ格の人名詞をとり、さらに「～するよう、～しろと」などをも伴いうる他動詞である。

「(～するよう/～しろと) 人を 説得する/指揮する/説勧める/・・・」他動詞には、“思考したり判断したりする主体としての人”を、そしてそのみをヲ格補語にとるものは比較的少ないのだが、これらの動詞はそういった稀な類の動詞である。(上の諸例のほかには、「ほめる/尊敬する」といった類にほとんど限られる)

これらの動詞は、使役文の従属節動詞として次のような構文で用いられる。

「人<sub>1</sub>-を V<sub>1</sub>-して, (人<sub>1</sub>-に/を) V<sub>2</sub>-させる」

ここでも、先に「学生を煽動して デモに参加させる。」の例について述べたように、「人<sub>1</sub>-を V<sub>1</sub>-した。そして V<sub>2</sub>-させる」という意味関係ではなく、「人<sub>1</sub>-を V<sub>1</sub>-して」という行為のなかに「V<sub>2</sub>」が含まれている。

また、〔1〕の類と同様、主節動詞には自動詞派生の使役動詞は少ない。

《他動詞使役》

- 時雄は監督上見るに見かねて、芳子を説勧めて, この一伍一汁を故郷の父母に報せしめた。(瀧)
- く [父母に報ずる] ように [説勧める] >
- 神父はこの話(二I編)に反対で、当の女性を説得して (結婚を) 思いとどまらせようとした。(死刑囚の記録)
- く [思いとどまる] ように [説得する] >

- 婆さんが・・・いろいろに説き勧めて，とうとう合点させて，(雁)
- (結婚しないと)父を告発すると脅かし，産院で結婚式を挙げさせた(貧困の精神病理)
- 親は子どもをしかりつけてでもながぐつを履かせるべきだ。(駈って子育て)
- よくよく教えいまして，十分に気をつけさせる(おなごを養世)

〔1〕の場合と同じく，使役主体から CAUSEE への働きかけが，比較的純粹に言語的な働きかけといえるものと，言語的な働きかけに加えて，使役主体の CAUSEE に対する何らかの態度をも含んだ働きかけに思われるものがある。上にあげた諸例は前者であり，次の諸例は後者と思われる。

- 陳氏はクリスマスまでにタヒチに帰りたいため，島民をうながして運搬を急がした。(南太平洋の冒険にて)
- 学者たちは・・・政府を促して至当の救治策を立てしめんともせず(田中正造の生涯)
- 新聞雑誌は初めは予を強要して語らしめたが，(断片録:25)
- (日本が)米国西海岸のインディアンを煽動して反乱をおこさせようとしている等々，(アメリカと私)
- 岡倉先生が・・・漁師たちをどういうふうに煽動して新式の網を作らせたか。(和辻哲郎随筆)
- 船長は四人を指揮して，・・・もう一端を細綱に，結ばせていた。(潮騒)
- 山口を求める欲求は，葉子を駆り立てて，絶えず生活を変えさせるのだ。(花影)
- 昂揚した気分は私を駆って，・・・その方法を選ばせる(金時)
- 相互の言葉が，無意識のうちに彼らを駆って，準縄の罅を踏み越えさせるのは，(それから)
- 彼は村会を籠絡して，十萬円の村債募集をさせた。(田中正造の生涯)

#### 《自動詞使役》

- 翌日は逢ってたって諫めてどうしても京都に還らせるようにすると言って，芳子はその恋人の許を訪うた。(翻)
- また，アンティパトロスがラケダイモンの人たちを威嚇して要求に従わせようとしたとき，(死の驟)
- 田中正造はまったく何の期待も持てない民党内閣の尻をたたいて，鉅毒問題に立ち向わせるという難題を自己に課したのである。(田中正造の生涯)

◆V<sub>1</sub> : 説く，買収する



「あざむく、買収する」は態度的な要素のほうが強いだろう。

○実際は毎月二百円もあれば充分であった留学費を、五、六百円はどうしてもかかるのだと母親をあざむき、母親からその金を送らせては、(総本)

○ソクラテスの友人たちは、獄卒を買収して、脱走を見て見ぬふりをさせ、(死の黙)

## 《E-2》総括的な働きかけ

従属節動詞として、他者への個別具体的な働きかけを表すのではなく使役の全過程をいわば抽象的・総括的に表現するような動詞が用いられる使役文がある(注10)。

◆V<sub>1</sub> : 使う、使役する、役する、わずらわせる、通す、介する、(まかせる)

○・・・、恐らくこの場合は、道長が噂を流させたのであろう。本人の口からは責任ある言葉をはかず、周囲の者を使って噂を流させ、それが世論となって熟するのを待つ、(熾人のびと)

○鮎太は青年詰所に行って、そこにいた二、三人の子供を使って、部落の三年以上の子供たちを集めさせた。(あたる物騒)

○銅山会社は、・・・政府を使役し、国及県々の費用を自在に支払わせて町村を潰し、(中正意の生涯)

○昔は道士があって、呪を称え鬼を役して灑掃せしめたそうだ。(闘鶴集)

○いちいちセクレタリーをわずらわせて葉書を出させる必要があった。(アメリカと私)

○甥が病んでいることを、せめて向島の女にも知らせて遣りたいと思った。言伝でもあらばと思っ、人を通して、電話で伝えさせた。(家)

これらも、「人<sub>1</sub>-を V<sub>1</sub>した。そして V<sub>2</sub>-させる」ではなく、「人<sub>1</sub>-を V<sub>1</sub>-して」という行為のなかに、「V<sub>2</sub>」が含まれる。

○ ?道長が周囲の者を使った。そして、噂を流させた。

○ ?銅山会社が政府を使役した。そして、費用を支払わせた。

「まかせる」もこの類だろうか。

○確かな人に委せて監督させてある(あらね)

## 4 おわりに

以上、複文構造の使役文について、主として、従属節と主節との関係をめぐって、

気付かれる点をおぼえがきとして記してきた。複文構造の使役文にどのような種類のものがあるか、どのような特徴をなすのか、また、そのことが使役の意味的なタイプ（主として、意志動作の使役なのか無意志動作の使役なのか）や使役事態のひきおこしの種々のタイプとどのような関わりをもっているのか、それはまた、従属節動詞の種類とどのように係わっているのか、など考えるべきことは多かったが、いずれもきわめて不十分なままである。分類そのものも再考する必要があるところがある。今後これをもとにして考察をつづけたいと思う。

## 注

(注1) 主節の述語が使役動詞である複文において、その従属節述語の形は、「～から」「～ので」「～が」「～と」「～ながら」「～つつ」など多様であるが、それらについては別に考えたい。

(注2) 両者の違いについては、言語学研究会・構文論グループ 1989a, 1989b, 新川忠 1990 の考察に学ぶところが多かった。(これらでは、それぞれの形が「第一なかどめ」「第二なかどめ」とよばれている。)

(注3) 資料とした作品の作品名・作者名・発表年などの一覧を挙げることは省略するが、引用した用例についてはその作品名を用例のあとの括弧内に示した。

(注4) こういった並列的な複文を、「重文」として「複文」とは別に扱い、文の構造的なタイプとして、「単文」「複文」「重文」の三つを考える立場もある。

(注5) 「なんの権利があって」のように、かなり慣用的な表現もある。

○「・・・そしてだれが、なんの権利があって、人をこんな目にあわせるのだ！」(静の囁)

(注6) これらの動詞は、奥田(1983b:300)のいう「態度的な意味をふくんでいる」動詞に重なるものが多い。宮島(1972:350～)も参考になる。

(注7) 使役文では、使役主体からの強制力や使役主体の意図の強さには段階があるが、いずれも、従属節動詞によって表されている命令や依頼が功を奏してV<sub>2</sub>が“実現される”ことが表されるのに対して、

○「ダレに ～しようと／～しろと／～するよう／・・・  
命じる／頼む／よびかける／勧める／・・・」

という引用句を含む構文は、事態の成就を必ずしも含意していない。

○コピーを送るように頼んでいた。(死刑囚の記録)

○お酒を少しわけて下さい、とたのんでみたけれども、(絹)

- 電話を先にかけて貰ふ事などを頼んだ。(城の嶺にて)
- 我孫子に住む気はないかと勧めてみた。(和歌)
- 「帰りに仲見世で絵草紙でも買ってお上げよ」ときんは娘にいいつけて, (女坂)
- こんなふうにいって見たまえと, 敬二はなおも次平さんをけしかけた。(黒い眼と茶色の目: 奥田1983a:129より)
- もう帰ろうと女をうながすがはやいか, ……(おちん)

(注8) 引用句の形態はさまざまである。仮に, 従属節動詞が「言って」の場合で示すと次のようなものがみられる。

- もう一度やってみようねといって, くり返させる
- 「きょうは一緒に飲んでくれ」と云って己に酒をのませやがった。(雁)
- きちんと確かめるよう言って, その分け前を数えさせせた。
- 「口をあけてごらん」と云ってあけさせると, (黒い雨)
- 読本が一冊あがったときに先生は復習のためだといって「とりよみ」をさせた。(銀の匙)

(注9) 「命じて/すすめて/言って/説いて/言い聞かせて/…」などの省略されたような, 「…と V<sub>2</sub>-させる」という使役もある。

- この慰問品を持って行けと私に持たせました。(黒い雨)
- 今頃は透いているか見て来ておくれと, 小女に様子を見て来させた上で, (雁)
- これを読んでごらん, と…著書を私に読ませ, (緞)
- もういっぺん, もういっぺんと, おんなじ話をくりかえさせる。(銀の匙)
- まあお一つまあお一つと重ねさせる。(釋尊)

(注10) 「人をして 行かしめる」のように, CAUSEEを「～をして」で表すことがあるが, この「して」は, 《E-2》の従属節動詞がきわめて抽象化・形式動詞化したものといえるだろうか。

## 参考文献

- 奥田靖雄 1983 a「を格の名詞と動詞とのくみあわせ」 b「を格のかたちをとる名詞と動詞とのくみあわせ」 c「に格の名詞と動詞とのくみあわせ」 以上, 言語学研究会編1983『日本語文法・連語論(資料編)』むぎ書房
- 川端善明 1958 「接続と修飾」『国語国文』第27巻第5号

- 川端善明 1976 「用言」『岩波講座 日本語 6 文法 I』岩波書店
- 川端善明 1983 「日本文法提要3」『日本語学』第2巻第5号. 明治書院
- 言語学研究会・構文論グループ 1989a 「なかどめ — 動詞の第二なかどめのばあい —」『ことばの科学2』むぎ書房
- 言語学研究会・構文論グループ 1989b 「なかどめ — 動詞の第一なかどめのばあい —」『ことばの科学3』むぎ書房
- 佐藤里美 1986 「使役構造の文」言語学研究会編『ことばの科学1』むぎ書房
- 佐藤里美 1990 「使役構造の文(2)」言語学研究会編『ことばの科学4』むぎ書房
- 新川忠 1990 「なかどめ — 動詞の第一なかどめと第二なかどめとの共存のばあい —」『ことばの科学4』むぎ書房
- 早津恵美子 1991 「所有者主語の使役について」『日本語学科年報』第13号. 東京外国語大学日本語学科
- 早津恵美子 1997 「使役動詞の認定をめぐる(1) — 形態面の問題 —」宮岡伯人・津曲敏郎編『環北太平洋の言語』第3号. 京都大学大学院文学研究科
- 宮島達夫 1972 『動詞の意味・用法の記述的研究』秀英出版

[研究ノート]

## スペイン語の過去分詞構文

高垣敏博

0. スペイン語の過去分詞にはつぎのような用法がある。

- (1)a. La puerta fue abierta por el portero.
- b. La puerta está abierta.
- c. la puerta abierta
- d. Abierto un socavón en pleno centro, los atascos fueron  
        infernales durante toda la mañana.

(1a)はいわゆる受動文で、対応する能動文が存在する。(b)は状態の繫辞動詞 *estar*と過去分詞からなり、動作主を表す前置詞句 *por*~を伴うことはできない。一般に、(a)は動詞的受動文、(b)は形容詞的受動文と考えられる。(c)もまた形容詞として機能し、形容詞と同じく後ろから前の名詞を修飾している。さいごに、(d)はいわゆる過去分詞構文で過去分詞の絶対構文 (*construcción de participio absoluto*)とも呼ばれる。(a)(b)は単文、(c)は語彙レベルで扱われるのに対し、(d)は過去分詞を含む従属節が主節を副詞的に修飾する複文を構成している。

この研究ノートでは、(d)のように二つの文を接続する過去分詞の性質をさぐる手がかりについて考え、また(c)のように独立に用いられる形容詞的過去分詞の性質との関連性についても言及したい。

### 1. 形容詞的過去分詞

まず、(2)のような形容詞的過去分詞の特徴を見てみる。

- (2)a. la puerta abierta < abrir
- b. el hombre muerto < morir
- c. \*el hombre trabajado < trabajar

(2a)(2b)のようにそれぞれ他動詞、自動詞から派生した名詞修飾の過去分詞は成り立つが、(2c)の自動詞由来の過去分詞は認められない。すなわち他動詞派生の過去分詞は形容詞的過去分詞をつくるが、自動詞には適切な過去分詞をつくるものと、つくらないものがあることになる。

最近の研究(GB理論や関係文法による Burzio 1990, Bever & Sanz 1997, Bosque 1990, Keyser & Roeper 1984, Levin & Rappaport 1986, Torrego 1989, Sanz, Bever & Laka 1992, Perlmutter 1978, 影山 1996, など)で支持されている「非対格仮説」によると、trabajar, bailar, jugar, cantarなどの非能格自動詞(unergative verbs)は主語の意図的な動作・行為を表し、動作主や経験者などの意味役割を担っている。一方、非対格自動詞(unaccusative verbs)と呼ばれるmorir, caer, llegar, nacerなどは対象物の状態や位置の変化を表す。主語はいわば受け身的役割を担い、自分の意志で動作をするのではなく、自然に何らかの変化を被る。

この非対格仮説はスペイン語も含めて、さまざまな言語でその妥当性が検証されている。この仮説によると例えばスペイン語の上述の動詞の項構造はつぎのように表記される。

- (3)a.            他動詞: ( x < y > )    abrir    →    abierto  
           b. 非対格自動詞: (   < y > )    morir    →    muerto  
           c. 非能格自動詞: ( x <   > )    trabajar → \*trabajado

他動詞 abrirは外項(x)と内項(y)をもつ。trabajarのような非能格自動詞は外項のみをもつ一方、非対格自動詞 morirは内項(y)が唯一項である。そこで過去分詞を形成するのはこれらに共通して見られる内項(y)をもつことが必要条件となる。しかし、このように内項の存在だけが過去分詞の成立を可能にするとは限らないことは以下に見る通りである。より本質的な意味的要因をさぐってみる必要があるだろう。ここでは、影山(1996)の議論<sup>1</sup>にヒントを求め、これらの動詞に内在する語彙アスペクト(Aktionsart)に注目してみることにする。

自動詞をまず上述の非対格自動詞と非能格自動詞に二分する。非対格自動詞は継続相の「状態動詞」と「状態や位置の変化」を表す動詞(Vendler 1967による「到達動詞」achievement verbsに相当する)に分けられる。前者は本質的に未完了相(perfective, atelic)であるのに対し後者の変化動詞は事象に何らかの変化が起こり、完了した結果状態を含意するもので完了相(per-

fective, telic) という特徴をもっている。<sup>2</sup>

(4a)に見られるように、非対格の中で未完了相の「状態動詞」は予測どおり過去分詞化は認めない。一方、「状態変化・位置変化動詞」は i), ii), iii)に下位区分できるが何れも過去分詞を形成する。

(4)自動詞

a. 非対格自動詞

状態動詞 estar, quedar, existir, subsistir, permanecer, faltar, sobrar continuar <sup>3</sup> 状態変化・位置変化動詞 i) 状態変化 abrir, cerrar, caer nacer, morir, crecer ocurrir, surgir, aparecer desaparecer ii)位置変化 pasar, transcurrir, llegar, venir iii) 完了相 empezar, comenzar acabar, terminar	*los problemas quedados *los turistas permanecido *la familia subsistida con el sueldo del hijo mayor el trabajo continuado ayer i) la puerta abierta las hojas caídas mi tío muerto aquí los ríos crecidos el atraco ocurrido anoche ii) la semana pasada el tiempo transcurrido el tiempo transcurrido las personas llegadas de lejos iii) las obras empezadas [terminadas] ayer
--	---

b. 非能格自動詞

継続動詞 trabajar, jugar, cantar, bailar, correr, llorar, sonreír, bostezar	*una chica bailada *los chicos estudiados *el joven nadado
--	--





ii)位置変化 aparcar (un coche), poner...en, pegar...en encontrar, llevar...a	ii)el coche aparcado, el cartel pegado en la pared el paquete llevado a casa
---	--

b. 働きかけ他動詞( 継続動詞 )

conducir (un coche), empujar (la puerta), tocar (el techo), llevar (una corbata), pegar (a un niño)	*el coche conducido ayer *el techo tocado con la mano *un chico pegado
---	--

結局、自動詞と他動詞とを問わず、事象の展開に「完了相」が含意されれば過去分詞形成に参加でき、「未完了相」であれば参加できないことになる。事象の変化を被るのは目的語に相当する内項であるので、内項の存在に加えて「完了相」という意味的特徴の内在が過去分詞の成立をより厳密に条件づけているといえるだろう。

完了アスペクトが過去分詞形成に微妙に関わる例を見てみよう。同じ対象物の「自動車」を修飾する動詞が(6a)の「働きかけ動詞」の‘conducir’では過去分詞が成り立たないのに対し、(6b)の「状態変化動詞」の‘aparcar’では認められる。

- (6)a. \*el coche conducido ayer  
b. el coche aparcado aquí

また、同じ動詞‘tocar’も(7a)の「接触動詞」で不可だが、(d)は‘interpretar’「演奏する」の意味で完了アスペクトをもつため問題ない。(b)、(c)はその中間的段階を示すが、(c)の‘tocar’を「状態変化」の‘apretar’に代えてみると容認されるようになることがわかる。

- (7)a. \*el techo tocado con la mano  
 b. ??las joyas tocadas con mucho cuidado  
 c. ?el timbre tocado hace un rato  
     cf. el timbre apretado hace un rato  
 d. la pieza de música tocada hace un rato

## 2. 過去分詞構文

前節では語彙レベルで成立すると考えられる形容詞的過去分詞を見たが、つぎに文と文を接続する機能をもつと考えられる過去分詞構文(もしくは絶対構文)を検討してみよう。

- (8)a. Vendida la casa, abandonamos para siempre el valle.  
 b. Muerto el perro, se acabó la rabia.  
 c. \*Nadado Juan, se sintió mejor. <sup>4</sup>

(8) がこのような構文であるが、特徴として、過去分詞と主語に相当する名詞句が性・数一致し、語順は主語が後置される。分詞を含む節が副詞的に主節を修飾する。主節との意味関係には(9)に見られるように、(a) 時間的先行、(b) 譲歩、(c) 様態、(d) 原因、(e) 条件、などがある。伝統的にはこれらをまとめて主動詞に先行する時を表す関係であると記述されてきた。<sup>5</sup>

- (9)a. Acabada la proyección de la película, tuvo lugar la entrega de premios.  
 b. La obra, si bien retocadas algunas escenas, podría representarse con éxito.  
 c. Se presentó, erguida la cabeza, ante el tribunal que había de juzgarla.  
 d. Dada su poca seriedad, optamos por no renovar el contrato.  
 e. Gastada esa agua, no podremos ni beber.

文の構成からは、過去分詞構文は主節の述語の項を成さないので独立文的

であるが、その一方で、上述のように主節を副詞修飾するという意味で従属節の性格をもつ。前節の形容詞的過去分詞のように、動詞の項構造に関しては同じふるまいが観察される。すなわち、(8a)の他動詞と(8b)の非対格自動詞についてはこの構文が成り立つのに対し、(8c)のような非能格自動詞はこれを容認しない。De Miguel (1992:71) は絶対構文の成立条件としては、内項をもつことであると述べ、さらに、動詞の語彙アスペクトに関しても完了相を条件としている。そして、この完了相が主節の表す事象に先立つ前時性、原因、条件などすでに見た多様な意味を一見、時間的先行性という制約のように見せかけているのであるという。<sup>6</sup>

この点についてはさらに詳しく、内項に状態変化を起こす過程を表す非対格自動詞は他動詞と同じく過去分詞構文を容認し、非対格自動詞でも持続、反復、存在、起動など、終結の状態もしくは結果を示さないような活動動詞、状態動詞についてはこの構文を許さないと述べている。<sup>7</sup>

ここでも前節と同じように動詞のアスペクトと過去分詞の成立可能性との相関関係を具体例で検討してみよう。

まず、自動詞であるが、非対格自動詞と非能格自動詞に二分される。De Miguel (1992: 76) によると、すでに(8c)の例でもみたように、非能格は分詞構文をつくることはできない。

(8c) \*Nadado Juan, se sintió mejor.

このような自動詞には、trabajar, jugar, cantar, bailar, correr, llorar, sonreír, bostezarなどがあり、継続相(したがって未完了相)のアスペクトをもつのであった。形容詞的な過去分詞が成り立たないのと同じく分詞構文のような複文でも容認されないことがわかる。

つぎに非対格自動詞であるが、既出の(8b)のように文法的であると考えられる。これらの自動詞は分詞構文成立の条件である、内項と完了アスペクトをもっているために基本的には前節の形容詞的過去分詞と同じ結果が期待される。

しかし、実際にはその成否にはゆれが見られる。それは動詞の表す事象が内包するアスペクトに影響されるためであると考えられる(De Miguel 1992: 76) が、(10)の下位分類で確かめてみよう。

(10) 非対格自動詞

<p>i) 状態・存在 estar, existir, quedar, sobrar, vivir, habitar</p> <p>ii) 継続 durar, permanecer, seguir, continuar<sup>8</sup></p>	<p>i) *<u>Estada</u> tres años en Barcelona, aprendí a hablar catalán. *<u>Faltado</u> el café en la posguerra, hubo que recurrir a sucedáneos.</p> <p>ii) *<u>Duradas</u> las conversaciones 10 días el gobierno y la oposición no llegaron a ningún acuerdo.</p>
<p>iii) 状態変化 abrir, cerrar, descansar, dormir(se), morir, nacer, cambiar</p> <p>iv) 出現 acontecer, ocurrir, suceder, surgir, pasar, transcurrir</p>	<p>iii) <u>Crecido</u> el caudal del río, todo hacía temer nuevas inundaciones. <u>Nacido</u> Halle en Letonia, pronto emigró a Estados Unidos. 他に(1d)(8b)参照</p> <p>iv) <u>Ocurrido</u> el vergonzoso incidente en los juzgados, el ex-ministro no se atrevía a salir sin escolta. <u>Pasados</u> los años, nos encontramos en el mismo café de París.</p>
<p>v) 位置変化( 移動・方向 ) caer, bajar, llegar, venir, partir, salir, entrar</p>	<p>v) <u>Caídas</u> unas gotas, el día adquirió un aspecto otoñal. <u>Llegado</u> Juan, empezó el debate. <u>Subido</u> de nuevo el precio de la gasolina, la recuperación econó- mica se fue al traste. *<u>Ido</u> Juan de allí, todos suspira- ron aliviados.</p>
<p>vi) 完了相動詞 comenzar, empezar, acabar, terminar</p>	<p>vi) <u>Acabadas</u> todas las clases de la tarde, tuvo lugar una asamblea.</p>

このような非対格自動詞で、予測どおり i) の「状態・存在」動詞および ii) の「継続」動詞は継続アスペクトすなわち未完了相を含意するため、過去分詞構文の条件に合わない。結果としてこの構文をつくることはできない。これ以外の iii) から vi) については完了相を表すために基本的には過去分詞構文を形成するのは実例のとおりである。いずれの場合にも動詞は事象の終結もしくは結果の状態を表している(‘El verbo inacusativo ( o transitivo ) ... debe describir un evento que haga referencia a un estado final o a un resultado.’ De Miguel 1992: 79)。

位置変化動詞の中にはこの構文を許容しないものもあり、興味深い反例になる。例えば、‘ir(se)’であるが、De Miguel (1992:80) によると、事象の完了ではなく活動を表す、すなわち終結点や結果を意味しないために不成立となる。

‘ir’については前節の形容詞的過去分詞も同じ結果を示す。

- (11) a. \*mis tíos idos a Brasil, \*el señor ido de paseo  
b. ??los viajeros partidos esta mañana,  
\*el tren partido para Sevilla

形容詞的過去分詞が不成立な原因は、(11)のように起点重視の動詞では完了の結果状態に必要な焦点が当たらないためであると想像できるが、分詞構文では ‘partir’ が容認されるという不均衡を見せる。

- (12) Partido Karl del Real Madrid, se demostró que no dependían de él los males del equipo.  
(13) Salida Matilda de un colegio muy rígido, disfrutaba en París de una libertad desconocida en compañía de sus nuevos amigos.

同様に(13)の ‘salir’ は成立するが、形容詞的過去分詞ではその成立が不可能になる。

- (14)a. \*el tren salido hace una hora, \*la señora salida a pasear  
b. los ojos salidos , los dientes salidos

ただし、予測できるように、(14b)のように「出る」限界すなわち臨界点が暗示されるような文脈では過去分詞が成り立つことがわかる。<sup>9</sup>

つぎに他動詞であるが、De Miguel (1992:76)によると、少数の状態他動詞の例( *contener*, *limitar*, *encerrar*, *soster* など)を除いて、いつもこの構文を成り立たせる。

- (15)a. \*Contenido el líquido por el jarrón...  
b. \*Limitado el prado por la valla...

多数の他動詞においてこのように過去分詞構文が成立するのは、ふつう活動を表し、動作主(明示されるかどうかにかかわらず)の存在が遂行される事象の終結相解釈を優先させるためであるという(‘...suelen expresar acciones y la existencia de un agente (implícito o explícito) favorece la interpretación terminativa del evento llevado a cabo’ De Miguel 1992: 96)。

ところが同じ動詞について、形容詞的過去分詞は(16)のように問題なく成立してしまう。

- (16)a. el líquido contenido en esta botella  
b. el prado limitado por la valla  
c. el gato encerrado en esta jaula

(16)では動作が完了して結果状態に焦点が当たっているためであると思われるが、このような過去分詞構文とのくいちがいは今後検討していかねばならない課題である。

### 3. 今後の課題

(i) これまでの観察によって、形容詞的過去分詞にも分詞構文に用いられる過去分詞にもほぼ共通して完了アスペクトが成立条件として働いていることがわかった。ただし、個々の動詞については微妙なアスペクトの含意の違いが反映してどちらか一方の成立を妨げられることもあることが(15)(16)な

どの例により示された。

こうした不均衡を示す別の例として、‘saber, conocer’などの認識動詞や‘amar, odiar, admirar, respetar’などの感情・心理動詞あげられる。これらは本質的に未完了相で過去分詞成立とは相いれないと予測できるが、形容詞的過去分詞としては問題なく用いられる。

- (17)a. un hecho conocido / sabido
- b. un niño amado / odiado / querido
- c. un hombre respetado / admirado / temido / apreciado  
          / estimado

これらの句が意味する内容は、すでに知られてしまったり、愛されてしまったのではなく、今知られてる状態であったり、愛されている状態であるため、過去分詞が必要とする完了相条件を満足しないはずである。

一方、過去分詞構文になると、(18a)の認識動詞では成り立つが、(19b)の感情動詞については容認されない。

- (18)a. Sabida la noticia, todos se emocionaron.
- b. \*Amado el niño (por todo el mundo), la madre se sentía contenta.

(ii) 過去分詞形成の条件の一つは内項の存在であるが、これに反するつぎの例では被修飾名詞は外項に相当し問題を提起する。

- (19)a. un hombre (muy) leído comido, bebido, viajado, trabajado
- b. agradecido, entendido, sabido, mirado

これらの動詞は自らの行為が自らに影響をおよぼす再帰的作用が含まれると考え、外項と同一の内項の存在を認める可能性が認められる。この点については、De Miguel(1992:130)も(19a)のような形容詞的過去分詞に関して、「事象の影響は可能な被動者目的語にではなく、それを実行する動作主に見られる」(‘los efectos del evento se manifiestan en el agente que lo lleva a cabo y no en un posible objeto paciente,’ p. 130)と述べてい

る。

(20)a. Comido el niño, le acostamos.

b. Bien comidos y bebidos los invitados, la fiesta empezó a decaer durante la hora de siesta.

過去分詞構文についても、外項が動詞の表す事象によって影響を受けている、つまり動作主が事象を制限すなわち完了相化する内項として解釈されうると考える。これらの動詞は自動詞としては未完了相であるが、主語が「満腹であったり、酔っぱらっていたり、満たされている」とときには完了相が与えられるのである(‘el agente podría interpretarse como un argumento interno que delimita o perfectiviza el evento. Esto es, verbos como comer o beber en su uso intransitivo denotan una actividad imperfectiva; pero pueden perfectivizarse: la perfección de tales eventos se alcanza cuando el sujeto está <lleno>, <borracho>, <harto> o <satisfecho>. En suma, el participio denota ...el estado en que se encuentra el sujeto como consecuencia de la acción que él mismo ha ejercido.’ p. 129)。

(iii) 第1節で見た形容詞的過去分詞では動詞が語彙的にもつ完了アスペクトがその成立の要因になっているわけであったが、これは独立して扱われる動詞そのものがもつ意味的制約であった。一方、第2節で扱った過去分詞構文は、主節に従属する複文中で用いられ、かつ、過去分詞がこの副詞節を主節に結び付ける何らかの機能を担っていると考えられる。

後者について、例えば、De Miguel(1992)はGB理論の枠組みで、スペイン語の過去分詞構文は、過去分詞と名詞句からなる従属節を Tense句を最大投射とする構造の中で、時を表す Tense に [ + anterior ] という素性を与え、これにより時の副詞節が主節より先行する時間関係を表現させると分析する。さらに、Tense に支配される Aspect 接点か、この時間的先行関係を可能にする [ + perfective ] の場合にかぎり過去分詞構文が成り立つと提案している。このような語彙レベルと統語レベルの違いをこえて共有される完了アスペクト制約をどのように統一的に記述すべきなのかがさらなる課題である。



## 注

1. 影山(1966)では語彙概念構造(Lexical Conceptual Structure)の枠組みで動詞がもつ概念的意味を語彙(述語)分解し、動詞の表す事象(event)を言語化しようとしている。

### (i)自動詞

- A. 静止状態・静止位置 [ y BE AT-z ]
- B. 状態変化・位置変化 [ BECOME [ y BE AT-Z ] ]
- C. 活動 [ x ACT ]

### (ii)他動詞

- D. 状態変化・位置変化 [ X CONTROL [ BECOME [ y BE AT-Z ] ] ]
- E. 活動(働きかけ) [ x ACT ON Y ]

(A)は内項 y が z の状態・位置に存在する。(B)では y に状態変化・位置変化(BECOME)が起こり z の状態・位置の結果になる。(C)は活動動詞で継続相をもつ(ACT)。他動詞では、(D)は外項の影響で内項 y が z へと状態変化・位置変化を起こす。変化には(B)が内蔵されている。最後の(E)は活動動詞で x の働きかけが y に影響を与える。これも(C)同様継続相をもつ。動詞はこのような抽象的意味述語から成っている。スペイン語については Takagaki (1998)参照。

2. 一覧表の例句の判断は Antonio Ruiz Tinoco氏による。
3. 許容される例については、自動詞というより他動詞の可能性が強い。De Miguel (1992: 87)参照。4. この節の例文はすべて De Miguel(1992)による。
5. 例えば、'significa fundamentalmente una circunstancia de tiempo anterior al tiempo del verbo principal,' (Gili Gaya 1964: 201) などの記述が見られる。
6. 'Puede que sea este valor perfectivo o acabado de la CPA lo que le confiere un aparente valor temporal (de anterioridad, de circunstancia previa al evento denotado por el predicado de la oración principal).' p. 74.
7. 'Los verbos inacusativos que se refieren a procesos que provocan un cambio de estado en el argumento interno--es decir, los verbos de realización (accomplishments, en la terminología de Vendler 1967/ Dowty 1979)--admiten la CPA, al igual que los transitivos. Los verbos inacusativos durativos, iterativos, de existencia, ingresivos, etc., esto es, los verbos que denotan eventos cuyo estado final o resultado no se menciona--en la terminología de Vendler 1967/Dowty 1979, las actividades (activities), los estados (states) y algunos logros (achievements)--no admiten la CPA.' p. 75. これは影山(1996)の到達動詞(achievements)、達成動詞(accomplishments)の定義とややずれるところがある。
8. 継続の自動詞(ia)では continuarは過去分詞化しないが、他動詞(ib)で「動作主が過程を延長しようとする、すなわち、自らの意志で特定の時点に開始および終了する行為と考えられる場合には完了相と解釈される」(De Miguel 1992: 87)。

(i)a. \*Continuada la vida a pesar de todo, no hay que desvanecerse.  
(自動詞)

b. Continuada las conversaciones en un nuevo escenario tras el

- fracaso inicial, finalmente se alcanzó un acuerdo. (他動詞)
9. 反対の意味の entrar について De Miguel(1992:80-81)つぎのように説明する。すなわち、salirは行為や過程の結果達成された状態(<estar fuera>)を示すが、entar についてはこれがあてはまるとはかぎらない ( entrar≠estar dentro)。
- (i)a. ?? (Bien) entrado el verano, tuvo lugar la ruptura Mortimer y Pamela.
- b. ? (Recien) entrado Valentín en el Seminario, se esfumó su vocación.
- c. Entrada la madrugada, las imágenes de la CNN ayudaron.
- Bien や Recien などの副詞で終結点が強調される場合、もしくは時間が一定の単位としてとらえられる(その意味では完了的意味を表す)場合(ic)には許容される。
- 形容詞的な過去分詞でも、許容される 'una mujer entrada en años' のように終結状態を明示する場合には可能になる。

## 文献

- Bever, Th. G. & Monserrat Sanz (1997) 'Empty categories access. Their antecedents during comprehension: Unaccusatives in Spanish,' Linguistic Inquiry 28: 69-91.
- Bosque, I. (1990) Las Categorías Gramaticales. Síntesis.
- Burzio, L. (1985) Italian Syntax. Reidel.
- De Miguel, Aparicio E. (1992) El Aspecto en la Sintaxis del Español: Perfectividad e Impersonalidad. Ediciones de la Universidad Autónoma de Madrid.
- Hale, K. & S. Keyser (1987) 'A view from the Middle,' Lexicon Project Working Papers 10. MIT.
- Jackendoff, Ray (1990) Semantic Structures. MIT Press.
- Perlmutter, D. (1978) 'Impersonal passives and the unaccusative hypothesis,' BLS 4: 157-89.
- Rappaport, M. & B. Levin (1998) 'What to Do with  $\theta$ -roles,' W. Wilkins (ed.) Thematic Relations (Syntax and Semantics 21), 7-36. Academic Press.
- Sanz, M. & Bever, Th. & I. Laka (1992) 'Linguistics and psycholinguistics of unaccusativity in Spanish,' NELS 22, 399-409.
- Torrego, Esther (1989) 'Unergative-unaccusative alternations in Spanish,' MIT Working Papers in Linguistics 10: 253-272.
- Vendler, Zeno (1967) Linguistics in Philosophy. Cornell Univ. Press.
- 影山太郎 (1996) 『動詞意味論』くろしお出版。
- 高垣敏博 (1997) 「日西語の自動詞」(国立国語研究所 日西語対照研究 夏期合宿発表、1997年8月6日 於鎌倉)
- (1997) 「過去分詞の意味」(SELE 97 発表、1997年8月30日 於京都)
- (1997) 「スペイン語自動詞の二分法について」(日本イスペインヤ学会発表、1997年10月18日 於関西外国語大学)
- Takagaki, T. (1998) 'El participio adjetivo en español,' Lingüística Hispánica 21.

## ドイツ語文の生成的規則体系

— 生成性、表現機能、形成上の制限 —

在間 進

### 0. はじめに

私たちのドイツ語研究の最終目標は、「どのような動詞とどのような統語構造がどのように結合し、どのようなドイツ語文を形成するか」という問題提起のもとで、ドイツ語文の「生成」を統御する「統語的意味的規則体系」を明らかにすることである。本稿では、このような研究目標のもとで問題になる「生成性」という概念、「生成性」の事例、および分析上の問題点について述べる。

### 1. 「生成性」

伝統文法では、受動文は能動文から一定の形態的統語的規則に基づき、たとえば (1 a) は (1 b) から形成されると考える。

- (1) a. Der Schüler lobt den Lehrer.  
b. Der Lehrer wird vom Schüler gelobt.

このような、「既存の形態を基にし、一定の形態的統語的規則の適用によって新たな表現を創り出す（個別言語の）特性」を「生成性」と呼ぶ。ドイツ語の「生成性」は、受動文以外にも数多く認めることができる。たとえば、(2) のような自動詞から、(3) のような、再帰代名詞と結果を表す形容詞が付加された統語構造によって、(4) のような、「主語の、主語自身の行為による状態変化」を表す文を作ることができる。

- (2) arbeiten/laufen/singen/weinen  
(3) 主語+動詞（自動詞）+sich+形容詞  
(4) a. Er arbeitet sich müde.  
b. Er läuft sich müde.  
c. Er singt sich müde.  
d. Er weint sich müde.

また、(5) のような、「状態変化」の「惹起」を表す他動詞から、(6) のような、本来の4格目的語を主語にした再帰構造によって、(7) のような、「状態変化」を表す文を作ることができる（藤縄 1986）。

- (5) a. auflösen → Man löst die Tablette auf.  
 b. öffnen → Man öffnet die Tür.
- (6) 主語 (4格目的語) + 動詞 (他動詞) + sich
- (7) (5 a) → Die Tablette löst sich auf.  
 (5 b) → Die Tür öffnet sich.

なお、「生成的」規則の適用には当然、一定の制約がある。たとえば、(3)の統語構造による規則は、自動詞 (あるいは「絶対的用法」の可能な他動詞) に限られる。したがって、典型的な他動詞、たとえば auflösen から作られる文 (8) は、非容認の文になる (この場合、可能な意味としては「彼は (砂糖などを) 溶かすのに疲れた」などが考えられる)。

- (8) \*Er löste sich müde auf. ← Er löste ..... auf.

また、(4)の統語構造による規則は、「状態変化」の「惹起」を表す「結果中心」の他動詞に限られる。したがって、「状態変化」の「惹起」を表さない「行為中心」の動詞、たとえば aussprechen から作られる文 (9) は、非容認の文になる (注)。

- (9) \*Das Wort spricht sich aus. ← Man spricht das Wort aus.

注：「行為中心」の他動詞の場合、難易などを表す形容詞を伴うことによって「他動的行為に伴う属性 (「…するには…だ」)」を表す形式を形成することができる：

- Das Wort spricht sich *leicht* aus. ← Man spricht das Wort aus.

以上のように、(3)の場合、自動詞という統語的制約が、(4)の場合、「結果中心」という意味的制約が認められる。

なお、(1)の受動文の場合は、統語的制約などの他に、伝達機能的制約が認められる。たとえば、他動詞 besuchen は、(10 a) のように、一般的に受動文を作るとされるのにもかかわらず、(10 b) は容認されない。このことより、在間 (1983) は、「動作主による行為を前提とし、被動作者にある種の有意義な質的变化を起こす作用が及ぶ」ことが表される場合にのみ、受動文を作ることができるとする。

- (10) a. Die Hauptstadt wird von vielen Touristen besucht.  
 ← Viele Touristen besuchen die Hauptstadt.
- b. \*Die Hauptstadt wird von Hans besucht.  
 ← Hans besucht die Hauptstadt.

### 3. 「生成性」の事例

私たちは、特に(3)(6)に関連した事例(および下に挙げる事例)に基づき、統語構造は、動詞の結合価によって一方的に規定されるのではなく、動詞と結合して文意味の骨格、すなわち「文意味構造」(注)を生成する機能があると仮定する。なお、これは、統語構造が近似的な他の統語構造と対立するなかで「文意味構造」を形成する意味機能を持つと仮定するのであり、それ単独で一義的な「文意味構造」を形成すると仮定するものではない。

注:「文意味構造」とは「移動」「状態変化」などの、一定の抽象レベルで構成される文的な意味構造と定義する。

ここでは、この仮説の根拠になる他の具体例を眺めることにする。たとえば(13)は、「4格目的語」と「an前置詞句」という対立によって、「結果性」vs.「行為性」という対立を統語構造が表現する事例である(成田1981)。

- (11) a. 4格目的語 = 結果性  
Er baut eine Hundehütte.  
b. an前置詞句 = 行為性  
Er baut an einer Hundehütte.

したがって、「4格目的語」の統語構造の場合、当該の行為の「未完成」を表す文と結合することはできないが、「an前置詞句」の統語構造の場合、その結合は可能である。

- (12) a. \*Er hat eine Hundehütte gebaut, aber sie ist noch nicht fertig.  
b. Er hat an einer Hundehütte gebaut, aber sie ist noch nicht fertig.

(15)は、「方向の前置詞句」と「4格目的語」という対立によって、「方向的行為」vs.「他動的状態変化」という対立を統語構造が表現する事例である(清野1991)。

- (15) a. 方向の前置詞句 = 方向的行為  
Er schlägt ihr ins Gesicht.  
b. 4格目的語 = 他動的状態変化  
Er wäscht ihr das Gesicht.

(16)は、「4格目的語」と「4格目的語+方向の前置詞句」という対立によって、「対象的行為」vs.「他動的移動」という対立を統語構造が表現する事例である(Zaima1987)。

- (16) a. 4格目的語 = 対象的行為  
Er schüttelt den Baum.  
b. 4格目的語+方向の前置詞句 = 他動的移動

Er schüttelt Äpfel vom Baum.

(17) は、「4 格目的語＋方向の前置詞句」と「4 格目的語」という対立によって、「他動的移動」vs.「他動的状態変化」という対立を統語構造が表現する事例である（成田 1990）。

(17) a. 4 格目的語＋方向の前置詞句 = 他動的移動

Er lädt Heu auf den Wagen.

b. 4 格目的語 = 他動的状態変化

Er belädt den Wagen mit Heu.

(18) も同様の事例である（小川 1985）。

(18) a. 4 格目的語 = 他動的状態変化

Er scheuert den Fußboden.

b. 4 格目的語＋方向の前置詞句 = 他動的移動

Er scheuert den Fleck vom Fußboden.

#### 4. 問題点

ここでは、ドイツ語文の「生成性」の解明を目標にした研究を行っていく際に気づいたいくつかの問題点について触れる。

##### 4. 1. 意味特徴の付与

第 1 点は、発話文の形成の過程で、形態によって担われない、ある種の意味特徴が新たに付加されることがあるということである。一般的には、語句と語句の結合によってより大きな意味単位が形成され、さらにそれらが結合し文意味が形成されるとされるが、その過程で、形態によって明示されない意味特徴が付加されることがあるということである。たとえば、beginnen は、zu 不定詞と結合する場合、(19 a) のように、zu 不定詞の動詞が「行為性」を持つものであれば、容認されるが、(19 b) のように、「移動性」を持つものであれば、容認されない。しかし、「移動性」の動詞の場合でも、(19 c) のように、目的語の複数化によって反復の意味が生じるならば、結合が可能になる（栗山 1984/1985/1988）。これは、反復化によって、移動動詞にも「行為性」という意味特徴が付加されるからであると考えられる（(19 d) では、反復化によって付加される「行為性」を [・・] DO の表記で示す）。

(19) a. Er beginnt zu arbeiten.

b. \*Er beginnt, ein Buch auf den Tisch zu legen.

c. Er beginnt, die Bücher auf den Tisch zu legen.

d. Er beginnt, [die Bücher auf den Tisch legen] zu DO.

#### 4. 2. 文意味構造の形成の規則性

次に、発話文を形成する規則体系にはかなりの一般性のある原理が存在することを述べる。たとえば、分離前綴り（あるいは副詞）の mit- は、自動詞文の場合、(12 a) のように、当然、主語に関連するが、他動詞文の場合、(12 b) のように、主語に関連することも、(12 c) のように、目的語に関連することもある。したがって、表層的には、mit- は、主語にも目的語にも関連し、関連性に恣意的な様相を見せる。

- (12) a. Er arbeitet mit. [mit jemand anderem ; 主語に関連]  
b. Er benutzt den Garten mit. [mit jemand anderem ; 主語に関連]  
c. Er kocht ein Ei mit. [mit etwas anderem ; 目的語に関連]

しかし、mit- は、他動詞の場合、意味特徴として「行為性」を持つならば主語に、「結果性」を持つならば目的語に関連することが分かっている（永岡 1985）。したがって、この関連性は、(13) に示すように、『文意味構造の抽象レベルでは、mit- は最も下の「文意味構造」の主語に関わる』という形で統一的に定式化することができる（「行為性」はDO、「状態変化」などの「惹起性」はCAUSEによって表記する。また、[ ] は、「文意味構造」の単位を示す）。

- (13) a.→ DO [ER, ARBEIT]  
mit  
b.→ DO [ER, GARTEN BENUTZEN]  
mit  
c.→ CAUSE (ER, [EI, KOCHEN])  
mit

また、多義ペアとしてよく知られている次のような2つの事例も、「文意味構造」のレベルで考えるならば、統一的な定式化が可能である。すなわち、(14) の多義ペアは、(15) に表記したように、移動物 (=THEME) の主語化 (15 a) と空間 (=RAUM) の主語化 (15 b) の対立と捉えることができるが、(16) の多義ペアも、(17) に表記したように、CAUSE の部分を取り除いて考えると、移動物 (=THEME) の主語化 (16 a) と空間 (=RAUM) の主語化 (16 b) の対立と捉えることができるのである。

- (14) a. Das WASSER ist aus der WANNE überlaufen.  
b. Die WANNE ist überlaufen.  
(15) (14) a.→ [THEME, 方向]

- (14) b.→ [RAUM, 状態変化]
- (16) a. Der Mann hat die *KLEIDER* in den KOFFER gepackt.  
 b. Der Mann hat den KOFFER gepackt.
- (17) (16) a.→ CAUSE (Mann, [THEME, 方向])  
 (16) b.→ CAUSE (Mann, [RAUM, 状態変化])

これらの文は共に、「物の移動」か「物の移動による場所の状態変化」の対立を示し、相違性は、他動性の有無のみである。多義パターンそのものは同一なのである。自動詞に認められる多義パターンが他動詞でも認められることは、一般性を想定するうえで、きわめて当然のことと言える。

#### 4. 3. 人間の理解力と合理性

次に、言語は一定の規則性に基づいた合理的な工夫が様々になされていることを述べる。たとえば、「結果中心」の他動詞からの派生名詞の場合、(18 a)のように、4格目的語が2格付加語として実現されることはよく知られている(在間 1975)。このことは、「結果中心」の他動詞の場合、(18 b)のように、4格目的語が CAUSE による「状態変化」の「担い手」であり、派生名詞の意味核 (FREI WERDEN) と意味的に最も近いところに位置していることから見れば、きわめて当然のことである。

- (18) a. die Befreiung der Geiseln durch die Polizei  
 ← Die Polizei befreit die Geiseln.  
 b. CAUSE (POLIZEI, [GEISELN, FREI WERDEN])

意味的に最も近いものを統語的に最も近いところに置くことは、人間の理解力を考えた場合、もっとも合理的な措置と言えよう。

また、語彙の多義化も決して恣意的なものではなく、一定のパターンを形成している。現在までの研究段階では、たとえば、ある対象物から「物を除去させる」ことを表す動詞は同時に、「物の除去による状態変化」を表す意味用法をも持ちうるということが認められる。この多義パターンは、(19) (20) のように、単一動詞のみならず、(21) のように、(分離前つづりを持つ) 複合動詞においても認められる。

- (19) scheuern a. 物の除去  
 Er scheuert den Fußboden.  
 b. 物の除去による状態変化  
 Er scheuert den Fleck vom Fußboden.
- (20) klopfen a. 物の除去





#### 4. 5. 現実界の在り様

次に、発話文が容認されるか否かは、言語外の条件として、現実界の有り様と密接に関連していることを述べる。たとえば、目的語を主語にした、他動詞（たとえば *schälen*）からの再帰的派生表現の場合、— この再帰的派生表現は「自然に生起する出来事」を表すのであるが — (24) のように、人の皮膚が主語ならば、容認可能な文ができる一方、(25) のように、バナナが主語ならば、容認不可能な文ができる。

(24) a. Man schält die Haut auf dem Rücken.

b. Die Haut auf dem Rücken schält sich.

(25) a. Man schält die Bananen.

b. \*Die Bananen schälen sich.

この容認性の相違は、人の皮膚は自然にむけるのに対して、バナナの皮は自然にむけることがないという現実界の有り様に基づくと考えられる。

また、知覚動詞と不定詞との結合性に関して、(26) のように、嗅覚と味覚は、他の感覚と異なって、不定詞との結合が容認されない。

(26) a. Man sieht sein Herz schlagen.

b. Man hört sein Herz schlagen.

c. Man fühlt sein Herz schlagen.

d. \*Man riecht sein Herz schlagen.

e. \*Man schmeckt sein Herz schlagen.

最上 (1992) は、この相違を嗅覚と味覚の特異性、たとえば『(嗅覚や味覚は)何かを「かぐ」「味わう」という他動的な用法よりも、むしろ何かは「匂う」「～の味がする」という自動詞的な用法の方が頻度も高く、一般的である』ことなどに基因するのではないかと述べて、次の言葉を引用する：

《Geschmack》<味わい>は《das Geschmecken》<味がすること>であるが、同時にまた《das Geschmeckte》<味わわれたもの>でもある。《Geruch》<におい>は《das Riechen》<におうこと>であり、また《das Gerochene》<嗅がれたもの>でもある。これらの語が帰属する《schmecken》と《riechen》という動詞はこのような独特の二重の様相をもっているのである。すなわち、人は何かを味わい(*schmecken*)、嗅ぐ(*riechen*)、しかしその対象もまた味がし(*schmecken*)、におう(*riechen*)のである。《Geschmack》<味わい>や《Geruch》<におい>は主体と客体を結びつけ、共通の仲介者としてこの両者のあいだに位置している。

(スネル、B. 新井靖一訳. 1978 『言語・哲学・詩学』; 大修館書店)

これも、現実界における感覚の性質上の相違を反映している言語現象と言える。

次の、堀口（1981）の事例（27）、および事例（28）の容認性の相違は、現実界の反映というよりも、人間の文化生活の反映と言うべきものであろう。

- (27) a. Er kauft die gelben Bananen. → Er kauft die Bananen gelb.  
b. Er kauft die roten Rosen. → \*Er kauft die Rosen rot.
- (28) a. Bei Müllers ist jemand krank.  
b. \*Bei Müllers ist jemand gesund.

#### 4. 6. 「文意味構造」と「認識様式」

文の容認性は、現実界の有り様や人間の文化と密接に関わっていることを述べたが、このことは、「文意味構造」が現実界の言語的把握様式（＝「認識様式」）に対応するものであることを示している。そうであるとするならば、「文意味構造」を抽出することは、現実界の「認識様式」を抽出することにもなる。また、「認識様式」＝「文意味構造」は有限のものである一方、どのような「文意味構造」が用いられるかは言語ごとに異なりうるものと考えられる。したがって、日独両語の「文意味構造」をリストアップし、相互比較を行えば、そこに両言語の「認識様式」に関する一定の相違を抽出することができることになる。

たとえば、出現消滅の前置詞の使用に関して、日本語は「動的」（…NI）であり、ドイツ語は「静的」（DATIV）であることが認められる。

(29) ドイツ語「静的」vs. 日本語「動的」

- a. Der Regisseur auf der Bühne erschienen. /…NI 現れる  
Das Raumschiff landet auf dem Mond weich. /…NI 着陸する
- b. Er taucht in der Menschenmenge unter. /…NI 消える  
Die Sonne verschwindet hinter den Wolken. /…NI 消える
- c. Wo hast du den Schlüssel versteckt? /…NI 隠す  
Das tote Tier wurde in der Erde vergraben. /…NI 埋められた
- d. Er befestigt eine Lampe an der Decke. /…NI 固定する  
Er brachte ein Schild an der Haustür an. /…NI 取り付けた

ドイツ語が日本語に比べて結果的状态表現を原理的に好むことは定説である。次の事例のイタリック部分も、日本語の場合、「…一瞬のうちに燃え上がった」「…は立ち去った」のように、「動的」に訳さざるをえないであろう。

- (30) Der Tisch mit der Lampe flog dem Afridi vor die Füße, brennendes Öl floß über den Boden. *Im Nu stand das Zimmer in hellen Flammen, und der Gefangene war fort.* (H. Geck ; 関口存男「ドイツ語学講話」より)

## 5. あいまい性

以上、

- (イ) 「文意味構造」の形成の過程で一定の意味特徴が付加されることがある
- (ロ) ドイツ語の規則体系はかなりの一般性を持つ原理に基づく
- (ハ) ドイツ語の規則体系には様々な合理性が認められる
- (ニ) 発話文は「話題」と「陳述」からなる構成を持たなければならない
- (ホ) 発話文の容認性は現実界の有り様および人間の文化に基づく
- (ヘ) 「文意味構造」の抽出は「認識様式」の分析へと繋がるものである

ことを述べた。

このような問題点を意識しながらドイツ語分析を行うわけであるが、このような意識を持ちつつも、私たちは、言語があいまいさを含むことなく、論理的に明確に出来ていることを前提としているわけではない。たとえば、(31) (32) のような事例では、ネイティブの間に容認性の揺れが見られる（?は容認性に関して意見が割れることを示す）。

- (31) a. Er hat das Messer geschliffen, aber es ist noch nicht scharf.  
b. ?Er hat das Messer geschärft, aber es ist noch nicht scharf.  
c. \*Er hat das Messer scharf gemacht, aber es ist noch nicht scharf.
- (32) a. Er beginnt zu rudern.  
b. ?Er beginnt zu schwimmen.  
c. \*Er beginnt zu fahren/fliegen.

個々の言語現象にはたしかにあいまいな部分もかなりある。しかし、このようなあいまいさは、規則体系そのもののあいまいさではなく、規則体系に基づいて「生成」される具体的な表現認められる個別的な「揺れ」であり、言語表現の根底にある規則体系そのものは、きわめて明確かつ合理的なものと考えられる。この規則体系を抽出し、記述するのが私たちの課題になる。なお、この場合、私たちが追求する規則体系は、言語一般に通じる普遍性そのものではなく、それらに基づく、ドイツ語日本語特有の「個別性」を含んだものになろう。したがって、結果的には、表層構造より少し意味の世界に入ったところの「生成的規則体系」が分析対象になる。

[追記] 本稿は、1992年日本独文学会第20回リングイステン・ゼミ<箱根>での口頭発表 Generativität und Akzeptabilität を手直しつつ日本語に訳したものである。

## 文献

- 井口 英子 1983：非人称受動の用法  
東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会編 Der Keim Nr. 8 所収
- 小川 暁夫 1985：他動的移動を表わす動詞の前綴化  
東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会編 Der Keim Nr. 9 所収
- 栗山 郁雄 1984：beginnen と結びつく動詞  
東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会編 Der Keim Nr. 8 所収
- 1985：文レベルにおける beginnen との共起性に関する一考察  
東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会編 Der Keim Nr. 9 所収
- 1988 移動動詞における「動作性」と「移動性」  
東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会編 Der Keim Nr. 12 所収
- 在間 進 1983：「受動態 (Passiv)」について  
日本独文学会「ドイツ文学」第 7 1 号所収
- Zaima, S. 1975：Zum Problem der Nominalisierung im Deutschen und Japanischen  
日本独文学会「ドイツ文学」第 5 5 号所収
- 1987："Verbbedeutung" und syntaktische Struktur  
Deutsche Sprache, Heft 1, Erich Schmidt Verlag
- 清野智昭 1991：身体表現における 4 格目的語の機能  
熊本大学文学会編文学部論叢第 3 5 号所収
- 関口存男 1994：ドイツ語学講話  
三修社
- 永岡 敦 1985：分離前綴り mit- について  
東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会編 Der Keim Nr.9 所収
- 成田 節 1990：4 格化と文の意味  
富山大学教養部紀要（人文・社会科学編）第 2 2 卷 2 号所収
- 1993：ドイツ語の 4 格目的語の一特性について  
富山大学教養部紀要（人文・社会科学編）第 25 卷 2 号所収
- 最上 英明 1992：五感の表現について（1）  
香川大学教育学部研究報告第 1 部第 8 6 号所収
- 藤縄真由美 1986：「物・事」を主語とする再帰表現についての 意味論的一考察、  
東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会編 Der Keim Nr.10 所収
- 堀口 里志 1981：形容詞派生の他動詞の結果性について  
東京外国語大学大学院ドイツ語学文学研究会編 Der Keim Nr. 5 所収



0. はじめに

本稿の目的は、中国語における文末の「了」の様々な用法が、「二つの事態の内包」という観点から、統一的に説明可能かを検証することにある。

文末の「了」は、一般に法性Modalityを表す語気助詞として、完了相（または実現相）を表す接辞的「-了」と対比される。しかし、郭(1986)は、文末の「了」は必ずしも法性のみを表すのではなく、状態の変化、継続、完成をも表すので、完了相の「-了」、法性を表す文末の「了<sub>2</sub>」に加え、「了<sub>3</sub>」を設定するべきだ、という主張をしている。また、望月(1997a)では、文末の「了」が先行性を示す相対的時制の標識であることを、望月(1997b)では、文末の「了」が、様々な種類のパーフェクト相Perfect Aspect及び見通し相Prospective Aspectを表す相の標識であることを述べた。つまり、文末の「了」は、時制・相・法性すべてに関わることになる。

本稿においては、望月(1997a, b)において取り上げなかった、法性に関わるとされる文末の「了」の用法をも考察の対象にして、文末の「了」の一見多岐にわたる用法が、いずれも「二つの事態の内包」という共通性をもつことを明らかにしたい。

1. 文末の「了」と相対的時制

文末の「了」は、相対的時制標識として、相対的過去を示す。例を挙げよう。以下の例文の注釈に使われる記号の意味は、稿末に挙げる。

- (1) a. 昨天他来的时候, 我已经离开东京了。  
 Zuotian ta lai de shihou, wo yijing likai Dongjing le.  
 昨日 彼 来る GEN 時 私 すでに 離れる 東京  
 昨日彼が来たとき、私はすでに東京を離れていた。
- b. 他 已经 离开 东京 了。  
 Ta yijing likai Dongjing le.  
 彼 すでに 離れる 東京  
 彼はすでに東京を離れ{た/ている}。
- c. 明天他来的时候, 我大概已经离开东京了。  
 Minglian ta lai de shihou, wo dagai yijing likai Dongjing le.  
 明日 彼 来る GEN 時 私 たぶん すでに 離れる 東京  
 明日彼が来る時には、私はたぶんすでに東京を離れている。

(1) a, b, cにおいて、基準時点Reference timeは、それぞれ過去、現在、未来であるが、文

末の「了」で表された出来事時点Event timeは、いずれも基準時点に先行している。すなわち、基準時点の絶対的時制に関わりなく、文末の「了」は相対的過去を示すのである。このことは、望月(1997a)で述べたとおりである。

ところで、(1) a, b, cは、いずれもパーフェクトの例でもある。パーフェクトとは、Comrie(1976:52)によると、「ある状態をそれに先行する場面situationに関連づけて捉えること」と定義される。(1)の各例では、基準時点における各状態が、それに先行する出来事event、即ち「{彼/私}が東京を離れる」という出来事と関連づけて捉えられており対応する日本語訳では、いずれも日本語のパーフェクト形式「ている」を用いている。

さて、本稿のテーマである「二つの事態」と文末の「了」の関わりを考えると、相対的過去を表す用法の「了」にしても、パーフェクトの「了」にしても、いずれも二つの事態が関わっていることがわかる。二つの事態とは、時間軸上に位置する二つの場面、即ち基準時点における事態と出来事時点における事態である。

## 2. 文末の「了」と相

### 2. 1 パーフェクト相

郭(1986)は、語気助詞ではない文末の「了」の用法として、以下の三類を挙げている。例文番号は筆者により新たに付されたものである。

#### A. 状態の変化、新しい状況の出現:

(2) 他 是 大学生 了。

Ta shi daxuesheng le.

彼 ~である 大学生

彼は大学生になった。

(3) 春 天 了。

Chuntian le

春

春になった。

#### B. 状態の持続:

(4) 他 住 在 北京 五年 了。

Ta zhu zai Beijing wunian le.

彼 住む LOC 北京 五年

彼は北京に五年住んでいる。

(5) 他 学 了 漢語 三年 了。

Ta xue le Hanyu sannian le.

彼 学ぶ PFV 中国語 三年

彼は中国語を三年勉強している。



C. 状態の完成：

(6) 這 本 書, 我 看 了 三 遍 了。

Zhe ben shu, wo kan le san bian le.

この CL 本 私 読む PFV 三 CL

この本は、私は三度読んでいる。

(7) 你 的 話, 我 聽 了 很 多 次 了。

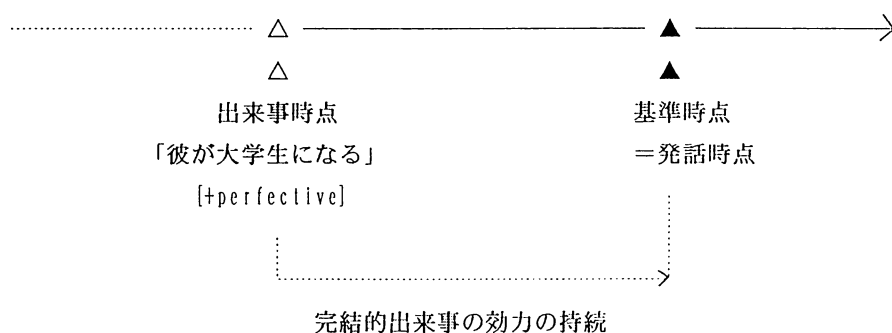
Ni de hua, wo ting le hen duo ci le.

あなた GEN 話 私 聞く PFV とても 多い CL

あなたの話は、何度も聴いている。

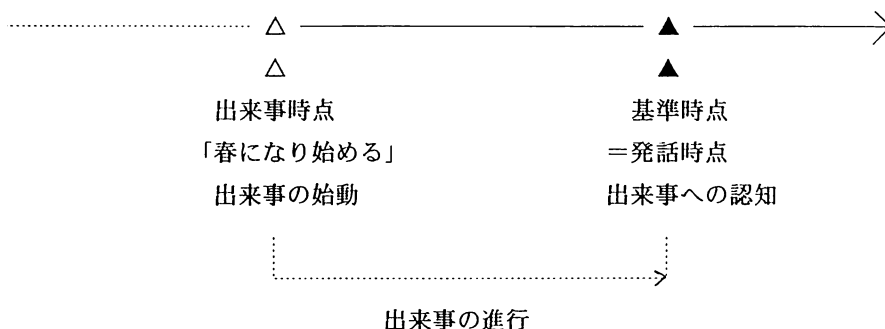
彼があげているこの三類は、いずれも、望月(1997b)の枠組みにおける、パーフェクト相とみなすことができる。

第一に状態の変化は、(2)を例にとれば、次のような時間構造を考 えることができる。



即ち、先行する出来事時点において、「彼が大学生になる」という完結的perfective出来事の効力即ち「彼が大学生であること」が基準時点となる発話時点においても持続しているという時間構造を考 えることができる。このように、基準時点がそれに先行する出来事時点に関連づけられるような現象は、パーフェクトとみなすことができる。

さて、(2)は、完結的出来事の例であるが、非完結的出来事の例(3)の場合はどのようなパーフェクトとみなせるのであろうか。「春になる」という季節の移り変りは、瞬間的に起こる変化ではなく、時間幅をもつ、連続体をなす変化である。(3)は、次のような時間構造を考 えることができる。



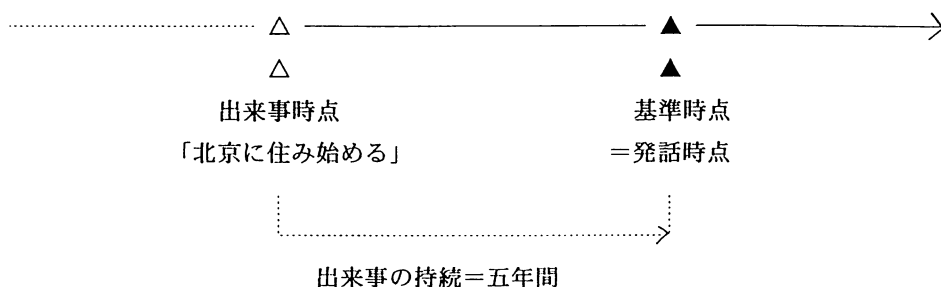
もし、(3)の文脈を、まだ進行中の出来事というように解釈するならば、出来事時点として、「春になり始める」という始動時点を、そしてその出来事を認知する発話時点（＝基準時点）を設定できる。そして、両時点間においては、「春になる」という出来事は刻々と進行しているのである。(3)は、「もうすっかり春になっている」という完結的解釈も可能であるが、同時に「春になり始めた」という非完結的解釈、即ち始動相としての解釈も可能である。その解釈の相違は、出来事を完結的に捉えるか、或いは非完結的に捉えるかによって生じる差である。しかし、出来事が完結的にせよ、非完結的にせよ、基準時点における場面が出来事時点に、広い意味での「持続」（結果の持続と出来事の進行両者を含む）という概念で関連づけられることに相違はない。すなわち、どちらもパーフェクトとみなすことができるのである。

ここで、進行中の動作、即ち非完結的出来事を示すパーフェクトの例をもう一例挙げておこう。

- (8) 他們 已經 在 上 課 了。  
 Tamen yijing zai shangke le.  
 彼ら すでに DUR 授業をする  
 彼らはすでに授業を始めている。

第二に、(4) (5)に例示されるような状態の持続用法も、パーフェクトとみなせる。(4)を例にとると、(4)が表す時間関係は、次のようになる。

(4) 他住在北京五年了。



文末の「了」の有無が持続の意の有無と関わる現象は、呂(1961)以来しばしば指摘されてきた現象である。呂(1961)が挙げた例は次のようなものであった。

(9) a. 這 本 書 我 看 了 三 天 了。

Zhe ben shu wo kan le san tian le.

このCL本私読むPFV三日

この本は、私は三日間読んでいる。

b. 這 本 書 我 看 了 三 天。

Zhe ben shu wo kan le san tian.

このCL本私読むPFV三日

この本は私は三日間読んだ。

(9) a対(9) bは、文末の「了」の有無以外は、全く同じ構成素から成り立っている。しかし、文末の「了」がある(9) aは、「まだこの本を読み終えていない」という出来事の非完結的解釈であるのに対し、(9) bは「もうこの本を読み終えた」という完結的解釈をもつ。この意味解釈の相違をパーフェクトという概念で説明すると、次のようになる。(9) aは、文末の「了」によって、「本を読み始める」という非完結的出来事が、発話時点と関連づけられることによって、持続の意味が生じる。一方、(9) bは、文末の「了」がないので、「私がこの本を三日間読む」という出来事が、完結的に捉えられた場面として提示されているにすぎない。即ち、(9) bには基準時点は存在せず、一つの完結した場面しか提示されていないのである。

第三に、(6) (7) で例示されるような状態の完成の用法も、パーフェクトの概念で説明できる。(6) (7) も、いずれも回数を表す数量詞がついているが、この数量詞によって、出来事場面は、完結的に捉えられる。即ち「この本を三回読む」「あなたの話を何度も聴く」という場面は、いずれも完結的出来事として捉えられ、その完結的出来事の効力が発話時点においても持続しているという解釈をもつ。よって、(6) (7) における「状態の完成」と

いう解釈は、文末の「了」によって生じているのではなく、提示されている場面の完結性によるものである。文末の「了」は、あくまでも完結的出来事の効力の持続を示す機能をもつのである。

このように、完結的出来事の効力が発話時点においても持続していることを示す場合、特別なニュアンスを表すことが多い。例えば、(6)の「この本は三回読んでいる」の場合、文脈によって、様々なニュアンスの可能性が考えられるだろう。例えば、次のようなニュアンスが生じる可能性がある。

- (10) a. だから、この本の細部をよく覚えている。
- b. だから、この本はもう古本屋に売ってしまってよい。
- c. だから、この本を試験の範囲にした試験準備は万端だ。

即ち、発話時点においても効力が持続している状態にあることを示すことにより、「だから～だ」という別の命題を暗示しているのである。

Li and Thompson (1981:243-244) も、次のような例を挙げて同様の趣旨を述べている。例文番号は、筆者によって新たに付されたものである。

- (11) a. 我 喝 了 三 杯 咖 啡。  
      Wo he le sanbei kafei.  
      私 飲 む PFV 三 CL コーヒー  
      私はコーヒーを三杯飲んだ。
- b. 我 喝 了 三 杯 咖 啡 了。  
      Wo he le sanbei kafei le  
      私 飲 む PFV 三 CL コーヒー  
      私はコーヒーを三杯飲んでいる。

以下はLi and Thompson (1981:243-244) の説明の概略である。

(11) aは、単にある出来事の描写をしているにすぎないが、(11) bは、ある出来事の描写のみならず、その出来事が発話時点の状況と関わりをもつことを示す。例えば、ある人がもう三杯コーヒーを飲んでいるのに、またコーヒーをすすめられた場合、(11) bのように「私はコーヒーを三杯飲んでますから」という表現を使うことができる。或いは、相手にコーヒーが嫌いだと誤解されているような場合、(11) bを用いて、「もう三杯も飲んでいるのですよ」と述べ、相手の誤解をとくということもできる。

郭 (1986) は、語気助詞ではない文末の「了」の用法として、状態の変化、状態の持続、

状態の完成という三種類の用法を挙げたが、このように互いに異なる用法を提示したのでは、文末の「了」の基本的特徴を統一的に捉えることはできない。まして、中国語学習者にとっても、このような説明では、学習負担が増えるばかりである。この三種類の用法はすべてパーフェクトという概念で説明可能である。

さて、次に「又you～了」の構文について考えたい。この構文は、反復相iterative又は多回相と考えられる。例を挙げよう。例はLi and Thompson (1981:272-273) からのものである。

- (12) a. 他 又 抽 煙 了。  
Ta you chou yan le.  
彼 また 吸う 煙草  
彼はまた煙草を吸い始めた。
- b. 今天 又 該 洗 衣服 了。  
Jintian you gai xi yifu le.  
今日 また 当番になる 洗う 服  
今日また君が洗濯する番になった。
- c. 我 又 忘 記 告 訴 他 了。  
Wo you wangji gaosu ta le.  
私 また 忘れる 言う 彼  
私はまた彼に言うのを忘れてしまった。
- d. 別 又 弄 髒 了。  
Bie you nong zang le.  
禁止 また 汚す 汚い  
また汚してはいけないよ。

このような多回相に文末の「了」が用いられるのは、発話時における事態と、発話時に先行する場面において起こった同じ事態とが内包されているからである。先行場面に起こった同じ事態は、一回でも複数回でもかまわないが、たとえ複数回としても、複数回の事態はひとまとまりの事態として、発話時の事態と対比される。こうした意味で、多回相における文末の「了」にも、二つの事態が内包されている。

さて、この多回相も、パーフェクトの分類と考えることができる。Comrie (1976) によれば、パーフェクトとは「ある状態をそれに先行する場面に関連づけて捉えること」であるからである。しかし、この多回相は、今までみてきたパーフェクトとは異なり、二つの場面間に「持続」(進行・効力の持続)が存在しない。しかし、日本語においても、多回相に基本義が持続相である「ている」が用いられる。

- (13) a. 最近、彼はしばしば休みをとっている。  
 b. 英国では、多くの人が肺ガンで死んでいる。

日本語で、「ている」が多回相にも用いられるという現象からも、多回相は、断続的な持続とみなすことができるのかもしれない。

以上、文末の「了」とパーフェクトとの関わりについて考察した。本稿の主要テーマである「二つの事態」という観点からみると、前述の通り、パーフェクトは、常に二つの場面を想定する概念であるから、パーフェクトの用法の「了」は、常に二つの事態を内包している、といえる。

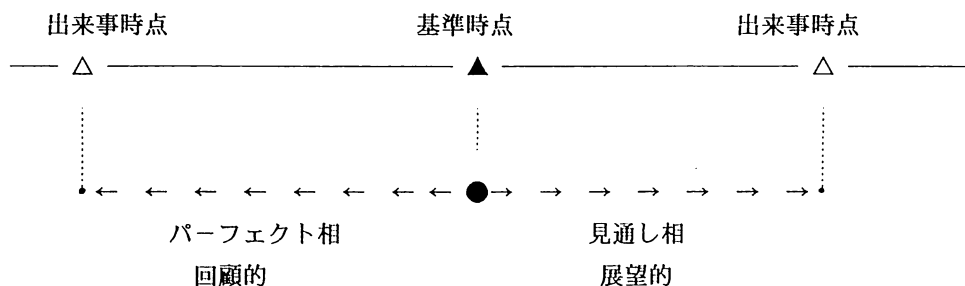
## 2. 2 見通し相

見通し相Prospective Aspectとは、Comrie (1976:64-65)によれば、「眼前の状態から当然おこるべき次の場面を叙述するものであり、後続する次の場面が眼前の場面に関連づけられている相」と定義される。

文末の「了」は、見通し相を表す標識としても用いられる。例を見よう。

- (14) 我 走 了。  
 Wo zou le.  
 私 行く  
 私、もう行きます。
- (15) 吃 飯 了。  
 Chi fan le.  
 食べる ご飯  
 ご飯ですよ。
- (16) 要 下 雨 了。  
 Yao xia yu le.  
 Prsp. Aux. 降る 雨が  
 雨が降りそうだ。
- (17) 快 下 班 了。  
 Kuai xia ban le.  
 Prsp. Adv. 退勤する  
そろそろ退勤の時間だ。
- (18) 該 回 家 了。  
 Gai hui jia le.  
 Deon. Aux. 帰る 家  
そろそろ家に帰らなければならない。

(14)～(18)の例は全て見通し相の例である。これらの例では、発話時点が基準時点となっていて、発話時点において、ある出来事が今にも起こりそうだということを示している。例えば、(14)は、発話者が出かける支度をして、玄関に向かおうとしているような状況下で発話される。また、(15)は、食卓にもう食事が並べられているような状況下で発話される。即ち、発話時点において、次におこる出来事は関連性をもつ場面として捉えられている。この点が見通し相が単純未来と異なる点である。単純未来は、単なる予言であるのに対し、見通し相は、視点が、後続場面で当然実現するはずの前段階としての眼前の状態に置かれている。望月(1997b)で述べたとおり、見通し相は、パーフェクト相と次のような共通点をもつ。即ち「出来事時点の場面が基準時点の場面に関連づけられていること」という共通性である。見通し相とパーフェクト相との相違は、基準時点と出来事時点の位置関係が、以下の図に示すように、回顧的retrospectiveか展望的prospectiveかという相違だけである。



ここで、本稿のテーマである「二つの事態」という観点から見通し相を考察すると、見通し相においても、「眼前の状態」と「眼前の状態から当然発展するはずの後続する出来事」という二つの事態を内包することがわかる。

### 3. 文末の「了」と法性

以下、主に法性と関わる文末の「了」の用法を考えたい。しかし、多くの言語においてそうであるように、時制・相・法性は密接な相関性をもつ。以下、文末の「了」の持つ法性が相とも関連性をもつことにも触れながら、考察を進めたい。

#### 3. 1 程度の強調

文末の「了」は、程度がはなはだしいことを示す副詞「太tai」としばしば呼応して、「太+形容詞+了」という文型を作る。例をみよう。

- (19) 學費 太 貴 了。  
 Xuefei tai gui le.  
 学費 あまりにも 高い  
 学費が高すぎる。

(20) 這 個 点 心 太 甜 了。

Zhe ge dianxin tai tian le.

この CL お菓子 あまりにも 甘い

このお菓子は甘すぎる。

(21) 他 太 高 了。

Ta tai gao le.

彼 あまりにも 背が高い

彼は背が高すぎる。

この文末の「了」は「程度がはなはだしいことを強調する」という用法で一般に説明されている。しかし、ここにも「二つの事態」が想定できる。即ち「話者が理想とする程度・基準」という事態と、「理想の程度・基準を超えた現状」という事態である。

### 3. 2 命令・禁止

文末の「了」は命令文や禁止文にしばしば用いられる。例を挙げよう。

(22) 吃 飯 了, 快 来!

Chi fan le, kuai lai!

食べる ご飯 早く 来る

ご飯を食べなさい、早く来なさい。

(23) 別 迷 惑 他 了。

Bie mihuo ta le.

禁止 惑わす 彼

彼を惑わすな。

命令文や禁止文は、現状とは異なる別の事態の実現を目的にして話者が発する文である。ここにも、「発話時の現状」と、「実現されるべき別の事態」という二つの事態が内包されている。

(22) は、(15) のように、見通し相としての解釈も可能であるが、命令としての解釈も可能である。しかし、どちらにも二つの事態の関与がある。

ちなみに、完結相の接辞的「-了」も、しばしば命令文・禁止文において用いられる (Li and Thompson 1981: 207-213 参照)。Li and Thompson (1981) からの例文をここにいくつかあげよう。



(24) 嚥 了 那 個 藥 丸 子 ！

Yan le na ge yao wanzi!

呑込む PFV その CL 藥 錠劑

その藥を呑み込んで！

(25) 別 選 了 那 堂 課, 你 又 跟 不 上。

Bie xuan le na tang ke, ni you genbushang.

禁止 選ぶ PFV あの CL 授業 君 また ついていけない

あの授業をとらないで、またついていけなくなるよ。

Li and Thompson (1981) の説明によれば、完結相の「-了」が命令文に用いられると、緊急性や強い命令・禁止の意味が生じるという。日本語においても、完了相としても用いられる「た」形が乱暴な命令文に用いられることがある。

(26) a. どいた、どいた。(人をおしのけながら)

b. さあ、買った、買った。(八百屋などの呼び込み)

c. さあ、早く乗った、乗った。(ぐずぐずしている子供を車に乗せる時)

未だ完了していないのに、完了相を用いて命令内容の実現を仮想することにより、命令の語気を強めるという、完了相の法性への転用が、日本語でも中国語でも起こっている。文末の「了」が命令文・禁止文に用いられるのも、同様の論理が働いているのかもしれない。つまり、未だ実現していない事態を実現したかのように仮想することによって、命令の語気を強調するという効果が生まれるのかもしれない。いずれにせよ、本稿のテーマである二つの事態が命令文・禁止文における文末の「了」に内包されていることには変わりがない。

### 3. 3 複文

文末の「了」は、「条件-結果」という構造の複文においてしばしば用いられる。次に挙げる例は、Li and Thompson (1981:256-257) によるものである。

(27) 過 了 上 下 班 的 時 候 火 車 就 空 了。

Guo le shangxiaban de shihou huoche jiu kong le.

過ぎる PFV 出勤・退勤 GEN 時 電車 CONJ 空く

出勤・退勤の時間を過ぎれば、電車は空く。

(28) 要 是 没 带 學 生 証 就 不 能 買 學 生 票 了。

Yaoshi mei dai xueshengzheng jiu bu neng mai xuesheng piao le.

もし NEG 持つ 学生証 CONJ NEG できる 買 学生 切符

学生証を持っていないければ、学割切符は買えない。

こうした例にも、二つの事態が内包されている。例えば、(27)の場合、「出勤・退勤の時間は電車が混んでいる」という別の事態を暗示したうえで、「出勤・退勤以外の時間は電車が空いている」という事態を表している。また、(28)は、「学生証があれば、学割切符が買える」という別の事態を暗示したうえで、「学生証がなければ、学割切符は買えない」という事態を表している。それ故、(27)(28)において、文末に「了」がついているのである。

### 3. 4 親密度

Li and Thompson (1981:273-278) では、文末の「了」の有無によって、発話の親近感に相違が生じる場合があることを述べている。次に挙げる例は、Li and Thompson (1981) からの例である。

- (29) a. 你 累 了, 你 可以 去 睡。  
 Ni lei le, ni keyi qu shui.  
 あなた 疲れる あなた 許可 行く 眠る  
 疲れたようだね、寝にいい。
- b. 你 累 了, 你 可以 去 睡 了。  
 Ni lei le, ni keyi qu shui le.  
 あなた 疲れる あなた 許可 行く 眠る  
 疲れたようだね、もうお休みなさい。

彼らの説明によれば、文末の「了」がない(29) aは、冷淡な命令口調的で、「もうあなたは役に立たない」というニュアンスであるのに対し、文末の「了」が加わった(29) bは、相手への気配りを示したニュアンスがあるという。こうしたニュアンスの差はどのような要因によって生じるのだろうか。(29) bの後の文に二つの事態が内包されているとすればどうだろうか。文末に「了」をつけることにより、もうひとつの事態、即ち「これまで、眠らずにがんばって仕事をしてきた相手の状態」を暗示させ、そうした背景にも配慮していることを示すことにより、相手への気配りをより表すニュアンスが生じるのではないだろうか。(29) aは、相手のこれまでの状態を暗示せず、ただ発話時の状態を単純に述べた文である。

また、次のような例もある。

- (30) a. 我們 明 天 再 見 。  
 Women mingtian zai jian.  
 私達 明日 再び 会う  
 明日またお会いします。

b. 我們 明天 再 見 了。

Women mingtian zai jian le.

私達 明日 再び 会う

明日また会おうね。

Li and Thompson (1981)によれば、(30) aは、ビジネスマン同士の会話にふさわしく、(30) bは、親しい友人又は恋人同士の会話にふさわしいという。文末の「了」が、二つの事態を内包するとすれば、(30) bは、発話時点の場面と「明日会う」という場面が関連づけられることによって、見通し相と同様の意味を生じさせているのではないだろうか。つまり、「明日また会う」という事態を、当然実現されるはずの事態として捉えることにより、親近感が生まれると考えるのである。

### 3. 5 文の終止

文末の「了」が「文終止」の機能をもつ語気助詞として働くことは、よく知られている現象である。「了」がもつ文終止の機能と二つの事態は、どのように関わるのだろうか。

筆者は、文末の「了」が、多くの場合、二つの事態のうち、時間的に後行する場面或いは結果を示す事態につくことから、「文の終結」という法性が生まれたと考える。このことを示すLi and Thompson (1981:283)からの例を挙げよう。

(31) A: 你 為 什 麼 肚 子 這 麼 大 ?

Ni weishenme duzi zheme da?

あなた なぜ お腹 こんなに 大きい

なぜこんなにお腹が大きいのか。

B: 我 吃 得 太 飽 。

Wo chi de tai bao

私 食べる 結構 とても 満腹である

食べすぎてお腹いっぱいだから。

(32) (宴会の後で友人への発話)

我 吃 得 太 飽 了 。

Wo chi de tai bao le.

私 食べる 結構 とても 満腹である

私は (たくさん食べて) とてもお腹いっぱいだ。

3. 1において、文末の「了」が程度の強調として、「太～了」という構文をしばしばとることを述べたが、(31)のBの発話においては、文末の「了」は用いられない。なぜなら、この文脈において、「満腹だ」という事態は、Aの質問に対する答えであり、「お腹

が大きい」という事態の原因であるからである。一方、(32)では、「了」が文末につかないと、文が終結したことにならず、「満腹だ」という事態から別の事態へと話が展開するニュアンスが生じることになる。

以上、文末の「了」と法性に関わるいくつかの現象について考察した。以上の例では、全て二つの事態を想定することができる。

この他、「了」の語気助詞の用法としてしばしば挙げられるものとして、「列举」の用法がある。次に挙げる例は、郭(1986:93)によるものである。

- (33) 蘋果 了、香 蕉 了、葡萄 了、我 都 喜 歡。  
Píngguo le, xiāngjiāo le, pútāo le, wǒ dōu xǐhuān.  
りんご バナナ 葡萄 私 みな 好きだ  
りんご、バナナ、葡萄、私はみな好きだ。

こうした列举の用法は、二つの事態というよりも、二つ以上の複数の事物を列举している用法である。これが、二つの事態の内包という文末の「了」の基本的意味の転義なのか、それとも別の、例えば音韻的要因が関連しているのか、ここでは結論がだせない。他の方言で列举の語気助詞がどのような形をとるのか、また「了」そのものの通時的研究にも目配りしたうえで考えなければならないからである。

#### 4. おわりに

本稿では、文末の「了」の多様な用法が、相対的時制・相・法性において、いずれも、「二つの事態の内包」という統一的概念で説明できることを考察した。

Li and Thompson (1981)では、文末の「了」は、語気助詞として分類されており、あくまでも談話・法性という観点から、「眼前関連性」Currently Relevant Stateという概念で、統一的に文末の「了」を説明している。また、Li, S. Thompson and R. M. Thompson (1982)では、文末の「了」をパーフェクトとして捉えているが、その観点は、時制・相という観点というよりも、Li and Thompson (1981)での捉え方と同様、談話的観点からの捉え方である。。

また、劉(1995)では、所謂完結相の接辞的「-了」と文末の「了」が共に「実現」という基本義をもつ、という立場をとり、文末の「了」の用法の基本義は「実現」にある、としている。

「眼前関連性」及び「実現」という概念は、いずれも文末の「了」の説明に役立つと筆者も考えている。しかし、文末の「了」が常に二つの事態を内包している、という筆者の立場の方が、特に法性に関わる用法の文末の「了」の用法をより説得力を以て説明可能であるとを感じるが、さらなる研究を続けたい。(1998. 2. 18)

例文中で用いられている記号一覧

GEN : Genitive	属格
LOC : Locative	処格
PFV : Perfective	完了相
CL : Classifier	類別詞
DUR : Durative	継続相
Prs. Aux. : Prospective Auxiliary	将然の助動詞
Prs. Adv. : Prospective Adverb	将然の副詞
Deon. Aux. : Deontic Auxiliary	義務の助動詞
CONJ : Conjunctive Adverb	接続副詞
NEG : Negative	否定辞

参考文献

- Comrie, Bernard 1976. *Aspect*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 郭春貴 1986. 「關於“了”的問題」『第一屆國際漢語教學討論會論文選』p. 90-94所収。  
北京：北京語言學院出版社
- Li, Charles N. and Sandra A. Thompson 1981. *Mandarin Chinese*. Berkeley & Los Angeles: University of California Press.
- Li, Charles N., Sandra A. Thompson and R. McMillan Thompson 1982. 'The Discourse Motivation for the Perfect Aspect: The Mandarin Particle LE'. In Paul J. Hopper (ed.) *Tense-Aspect: Between Semantics & Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company.
- 劉一之 1995. 「“了”的語法意義」『中國語學』第242号, p. 56-63. 日本中國語學會。
- 呂叔湘 1961. 「漢語研究工作者的當前任務」『中國語文』第103期, p. 1-6. 北京：中國語文雜誌社。
- 望月圭子 1997a. 「中國語的基本語彙“了”について」『言語研究VII』p. 97-116.  
東京外國語大學。
- 望月圭子 1997b. 「中國語のパーフェクト相」『東京外國語大學論集』第55号, p. 55-71.  
東京外國語大學。



【資料集】

## ドイツ語基本動詞1300(1)

## A

### abbrechen

#### I 他

① <et4> (…4 を) [ボキンと] 折り取る (☆ 意図せずに折る場合も含む) :

einen Ast abbrechen

den Bleistift abbrechen

Beim Stürzen hat er sich<sup>3</sup> einen Zahn abgebrochen.

② <et4> (組み立てたもの 4 を) 取り外す、取り払う :

ein Gerüst abbrechen

Er brach das Zelt ab.

③ <et4> (建造物など 4 を) 取り壊す :

ein altes Haus abbrechen

Die Brücke wird bald abgebrochen.

④ <et4> (仕事・交渉など 4 を) 打ち切る、中断する :

die Verhandlungen abbrechen

Er hat seinen Urlaub abgebrochen.

Er brach mitten im Satz ab.

⑤ <et4> (関係など 4 を) 絶つ :

Er bricht den Umgang mit ihr ab.

#### II 自

① [完了 s] 折れて取れる :

Der Zweig brach ab.

Die Messerspitze ist abgebrochen.

② [完了 h] 突然止まる、中断する、とぎれる :

Die Musik bricht ab.

### abfahren

#### I 自 [完了 s]

① (人が) 乗り物で出発する ; (乗り物が) 発車する (反 ankommen) :

Er wird bald abfahren.

Der Zug fährt in vier Minuten ab.

② [スキーで] 滑降する :

Er ist glänzend abgefahren.

③ 《口語》 拒絶される (☆ ふつう lassen と) :

Sie hat ihn ganz schön abfahren lassen.

#### II 他

① <et4> (…4 を) [車などで] 運び去る :

Aus dem Wald hat man Holz abgefahren.

② <et4> (…4 を) [車で] 巡回する ; くまなく旅行する

(☆ 完了の助動詞に sein も用いる) :

In seinem Urlaub hat <ist> er ganz Österreich abgefahren.

③ <j3 et4> (…3 の身体部分 4 を) [車などで] ひいて切断する :

Bei dem Unfall wurde ihm ein Arm abgefahren.

④ 《口語》 <et4> (回数券など 4 を) 使い終わる :

einen Fahrkartenblock abfahren

#### III 再

<sich4> すり減る :

Die Reifen haben sich schnell abgefahren.



## abfinden

### I 再

<sich4 mit et3> (…3で) [仕方なく] 満足する、従う :

Ich habe mich mit meinem Schicksal abgefunden.

### II 他

<j4 mit et3> (…4に…3で) 満足してもらう、うまく片をつける :

Wir konnten ihn mit Geld abfinden.

## abgeben

### I 他

① <et4> (手紙・小包など 4 を) 渡す、手渡す :

Der Briefträger gibt ein Paket beim Nachbarn ab.

② <et4> (手荷物・服など 4 を) 預ける :

Er hat seinen Mantel in der Garderobe abgegeben.

③ <j3 et4> (…3に…4を) 分け与える :

Er gibt ihr die Hälfte davon ab.

④ <et4> (役職・権限など 4 を) 譲り渡す :

Er hat seinen Hof an seinen Sohn abgegeben.

⑤ <et4> (使用した物など 4 を) [安く] 売る :

einen Gebrauchtwagen billig abgeben

⑥ <et4> (部屋など 4 を) 賃貸する :

Er gibt das Zimmer an einen Studenten ab.

⑦ <et4> (熱など 4 を) 放出する :

Der Ofen gibt nur wenig Wärme ab.

⑧ <j4/et4> (…4の) 役割を果たす、(…4で) ある :

Sie gibt eine perfekte Hausfrau ab.

⑨ 《特定の名詞 4 と》

einen Schuß abgeben / eine Erklärung abgeben

◆ es gibt et4 ab …4が生じる (☆ es は非人称) :

Es wird Schnee abgeben.

Es wird Schläge abgeben.

### II 再

<sich4 mit j3/et3> (…3と) かかわり合う :

Mit diesen Leuten geben wir uns nicht ab.

## abhängen

### I 自

① <von j3/et3> (…3に) 依存する :

Er hängt finanziell von seinem Vater ab.

② 《事柄を主語として》 <von j3/et3> (…3) 次第である、左右される :

Von dieser Entscheidung hing seine Zukunft ab.

Das hängt davon ab, wieviel Zeit er hat.

③ [受話器を置いて] 電話を切る :

Sie hat plötzlich abgehängt.

④ (肉が食べ頃になるまで) つり下げて置かれる :

Das Fleisch muß noch einige Tage abhängen.

### II 他

① <et4> (掛けてあるもの 4 を) 取り外す :

Er hängt ein Bild von der Wand ab.

② <et4> (車両など 4 を) 切り離す (反 anhängen) :

Der Speisewagen wird in Berlin abgehängt.

③《口語》<j4> (…4を) 厄介払いする； (…4と) 縁を切る：  
einen Begleiter abhängen

④《スポーツ》<j4> (競争相手4を) [競技で] 引き離す。

abholen

他

①<et4> (持って行くように用意されたもの4を) 取って来る、  
受け取りに行く (→ holen)：

Er holte die Theaterkarten an der Kasse ab.

②<j4> (…4を) [約束の場所で会い] 連れて来る、迎えに行く：  
den Freund am <vom> Bahnhof abholen

Sie holte ihn zum Spaziergang ab.

abkommen

自 [完了 s]

①<von et3> (本来の方向3から) それる：

Er kommt vom Weg ab.

Der Wagen kam von der Fahrbahn ab.

《比喩》Er ist vom Thema abgekommen.

②<von et3> (計画など3を) あきめる：

Er ist ganz von seinem Plan abgekommen.

③ [仕事などから] 手を離す：

Kannst du nicht mal für eine halbe Stunde abkommen?

④ (習慣などが) すたれる：

Diese Sitte ist heute ganz abgekommen.

abkürzen

他

①<et4> (単語など4を) 略語化する、略語で表す：

ein Wort <einen Namen> abkürzen

②<et4> (…4を) [距離的・時間的に] 短縮する：

den Weg abkürzen

Er hat seinen Besuch <seine Rede> abgekürzt.

ablegen

他

①<et4> (服・帽子など4を) 脱ぐ：

Er legte Mantel und Hut ab.

Bitte legen Sie ab!

②<et4> (…4を) [不用になって] 脱ぎ捨てる、もはや着ない：

Sie hat die Trauerkleidung abgelegt.

abgelegte Kleidung 着古し着なくなった衣類.

③<et4> (…4を) [一定の場所に] 置く：

den Hörer ablegen

die Akten ablegen

Wo soll ich das Päckchen ablegen?

④<et4> (悪習など4を) やめる、改める：

Er hat sein schlechtes Benehmen abgelegt.

⑤《特定の名詞4と》

ein Geständnis ablegen  
eine Prüfung ablegen

abmachen

他

①<et4> (…4を) 取り外す、取り除く：

das Schild von der Tür abmachen

Der Arzt machte ihm den Verband ab.

②<et4> (…4を) 申し合わせる：

einen Termin abmachen

Wir haben abgemacht, uns am Mittwoch zu treffen.

Abgemacht! よし決めた、了承した.

③<et4> (事件など4を) 処理する、かたをつける：

Können wir das nicht im guten abmachen ?

abnehmen

I 他

①<et4> (…4を) 取り外す、取り去る：

den Deckel abnehmen

die Gardinen abnehmen

die Wäsche von der Leine abnehmen

Er nahm die Brille ab.

Niemand nahm den Hörer ab.

j3 ein Bein abnehmen

sich3 den Bart abnehmen

②<j3 et4> (…3から…4を) 取り上げる：

Der Polizist wollte ihm den Ausweis abnehmen.

j3 eine Uhr abnehmen

j3 beim Spiel Geld abnehmen

③《口語》<j3 et4> (…3から…4を) [料金として] 要求する：

Er nahm ihr für die Reparatur 400 Mark ab.

④<j3 et4> (…3の荷物・負担など4を) 引き受ける：

einer alten Frau den Koffer abnehmen

Er nahm ihr die Verantwortung nicht ab.

⑤<j3 et4> (…3の…4を) 受け取る：

Sie wollte ihm die Blumen nicht abnehmen.

j3 einen Eid abnehm

⑥<j3 et4> (…3から…4を) [善意から] 買い取る：

Er hat uns die alten Sachen abgenommen.

⑦<et4> (彼は私たちから中古品を買い取ってくれた.

ein Fahrzeug abnehmen

die Parade abnehmen

⑧<et4> (…4を) 写し取る：

die Fingerabdrücke abnehmen

II 自 (反 zunehmen )

① (体重が) 減る；やせる：

Er hat zusehends an Gewicht abgenommen.

② (程度・量などが) 減少する；(月が) 欠ける：

Die Kälte nimmt ab.

Die Vorräte nehmen ab.

Seine Kräfte haben abgenommen.

Der Mond nimmt ab.  
ein abnehmender Mond.

abrechnen

I 他

① <et4> (…4 を) 差し引く :  
die Unkosten abrechnen  
Die Steuer wird vom Lohn abgerechnet.  
et4 abgerechnet

② <et4> (…4 の) 最終的な計算をする :  
die Kasse abrechnen  
Die Kassiererin rechnet gerade ab.

II 自 [完了 h]

① [貸し借りを] 清算する :  
Wann können wir über unsere Ausgaben abrechnen?  
② 決着をつける :  
Mit dem Kerl muß ich noch abrechnen.

abreisen

自 [完了 s]

旅立つ :

Sie reisen heute ab.  
Er ist nach Köln abgereist.

abreißen

I 他

① <et4> (…4 を) 引きはがす、もぎ取る :  
ein Kalenderblatt abreißen  
einen Knopf abreißen  
Er riß ihr die Maske vom Gesicht ab.

② <et4> (建物など 4 を) 取り壊す :  
Sie haben ein altes Haus abgerissen.  
③ 《口語》 <et4> (…4 の) 刑期を終える.

II 自 [完了 s]

① (糸などが) ぷつんと切れる ; (ボタンなどが) ちぎれる :  
Ein Faden reißt ab.

Mir ist der Knopf abgerissen.

② (続いていたものが) 途切れる :  
Der Besucherstrom reißt nicht ab.  
Das Gespräch ist plötzlich abgerissen.

absagen

I 他

① <et4> (計画したもの 4 を) 取りやめにする :  
eine Veranstaltung absagen  
② <j3 et4> (…3 に…4 の) 取りやめ<取り消し>を通知する :

Er sagte ihr seinen Besuch ab.

Er hat uns<sup>3</sup> gestern abgesagt.

Wir müssen leider absagen.

③ <et4> (…4 の) 終了のアナウンスをする :

eine Sendung absagen

Ⅱ 自〔完了 h〕

《雅語》<et3> (・・3 と) 縁を切る：  
dem Alkohol absagen

abschaffen

他

<et4> (法律など 4 を) 廃止する、撤廃する：  
die Todesstrafe abschaffen  
Wir müssen den Hund abschaffen.  
Wir haben das Auto abschaffen müssen.

abschließen

I 他

① <et4> (ドア・部屋など 4 を) かぎをかけて閉める；  
die Tür abschließen  
Er hat das Zimmer abgeschlossen.  
② <et4> (・・4 を) 完了する、修了する、締めくくる (同 beenden) ；  
die Arbeit abschließen  
das Studium mit dem Examen abschließen  
Die Untersuchungen sind abgeschlossen.  
Ein Feuerwerk schloß die Feierlichkeiten ab.  
eine abschließende Bemerkung  
③ <et4> (契約など 4 を) 結ぶ； (・・4 の) 契約を結ぶ：  
einen Vertrag abschließen  
Er hat eine Versicherung abgeschlossen.  
Er hat unter günstigen Bedingungen abgeschlossen.  
④ <j4/et4> (・・4 を) 隔離する、遮断する：  
Die Kabine des Weltraumschiffes ist hermetisch abgeschlossen.  
Er schließt sich von der Umwelt ab.

Ⅱ 自

① <mit et3> (・・3 で) 終わる：  
Der Roman schließt mit einem Happy-End ab.  
② <mit et3/j3> (・・3 との) 関係を断つ：  
mit der Vergangenheit abschließen  
Er hat mit ihr abgeschlossen.

abschneiden

I 他

① <et4> (・・4 を) 切り取る、切り落とす (☆ 意図的でない場合も含む) ；  
eine Scheibe Brot abschneiden  
Sie schnitt ihm ein Stück Kuchen ab.  
Ich habe mir mit dem Messer fast den Daumen abgeschnitten.  
② <et4> (髪・つめなど 4 を) 短くする：  
die Haare abschneiden  
Du mußt dir die Fingernägel abschneiden.  
③ <et4> (発言など 4 を) 遮る：  
einen Einwurf abschneiden  
j3 das Gespräch abschneiden  
j3 den Weg abschneiden  
④ <et4> (・・4 を) 〔周囲から〕遮断する、孤立させる：

Das Dorf war vier Tage lang abgeschnitten.

Ⅱ 自

① 近道をする :

Hier schneiden wir ab.

② 《状態の語句と》 (～の) 成果を収める :

Er hat im Examen gut abgeschnitten.

abschreiben

Ⅰ 他

① <et4> (…4 を) 書き写す ; 清書する :

einen Text abschreiben

Ich habe den Aufsatz noch einmal sauber abgeschrieben.

② <et4> (他人の書いたもの 4 を) 許可なく書き写す、カンニングする :

Er schreibt die Schularbeiten von seinem Nachbarn ab.

③ 《口語》 <et4/j4> (…4 を) [ないものとして] あきらめる :

Das habe ich längst abgeschrieben.

Ich habe ihn schon seit langem abgeschrieben.

④ <et4> (鉛筆など 4 を) 書き減らす :

einen Bleistift abschreiben

Ⅱ 自

<j3> (…3 に) 断りの手紙を書く :

Ich mußte ihm leider abschreiben.

Ⅲ 再

<sich4> (鉛筆などが) 書き減る :

Der Bleistift schreibt sich schnell ab.

absehen

(er sieht ab; sah ab, abgesehen)

Ⅰ 自 [完了 h]

① <von et3> (…3 を) 思いとどまる、見合わせる :

Wir wollen von einer Bestrafung absehen.

Wir bitten Sie, von einem Besuch abzusehen.

② <von et3> (…3 を) 問題にしない、度外視する :

wenn ich von der Erkältung absehe

Von kleinen Fehlern wollen wir zunächst abesehen.

◆ abgesehen davon, daß..

Ⅱ 他

① <et4> (…4 を) 予測する (☆ ふつう否定詞を伴う) :

Die Folgen lassen sich4 nicht absehen.

Das Ende der Kämpfe ist noch nicht abzusehen.

② <j3 et4> (…3 から…4 を) 見て覚える :

Er hat mir den Handgriff abgesehen.

◆ es auf j4/et4 abgesehen haben

Sie hat es auf ihn abgesehen.

Sie hat es nur auf sein Geld abgesehen.

absenden

他

① <et4> (郵便物など 4 を) 発送する (同 abschicken) :

Er sandte <sendete> sofort einen Brief ab.

②<j4> (使者など 4 を) 派遣する：  
einen Boten absenden

absetzen

I 他

①<et4> (帽子・めがねなど 4 を) 取る、取り外す (反 aufsetzen)：

den Hut absetzen

Setz mal die Maske ab!

②<et4> (荷物など 4 を) 下へ置く：

Sie setzte den Koffer ab.

③<j4> (同乗者 4 を) [ある場所で] 降ろす：

Könnten Sie mich bitte am Bahnhof absetzen?

④<et4> (…4 を) わきに置く (☆ その際何かの行為を中断する)：

die Feder absetzen

Er setzte das Glas vom Mund ab.

⑤<et4> (…4 を) 沈積させる、沈殿させる：

Der Fluß setzt Schlamm ab.

⑥<j4> (…4 を) 解任する、罷免する：

Der Minister wurde wegen seiner Verfehlungen abgesetzt.

⑦<et4> (…4 を) [スケジュールなどから] 削除する、とりやめる：

ein Konzert vom Spielplan absetzen

⑧<et4> (…4 を) 控除する：

Das kannst du von der Steuer absetzen.

⑨<et4> (…4 を) [大量に] 売りさばく：

Wir konnten alle Exemplare absetzen.

⑩<et4> (…4 を) 目立たせる、浮き立たせる：

Farben voneinander absetzen

eine Zeile absetzen 改行する

⑪《非人称で》(不愉快なことが) 起きる：

Es wird Schläge absetzen.

II 自 [完了 h]

中断する：

Mitten im Singen setzte sie ab.

ohne abzusetzen

III 再

①<sich4> 沈積する、沈殿する：

Schlamm setzte sich ab.

②<sich4> [他の国へ] 逃走する、逃亡する：

Er hat sich in den Westen abgesetzt.

③<sich4 von et3/j3 (マタハ gegen et4/j4)> 際立つ、目立つ：

Er wollte sich von den anderen absetzen.

absolvieren

他

①<et4> (学校など 4 を) 卒業する；(一定の課程 4 を) 修了する：

das Gymnasium absolvieren

einen Lehrgang mit Erfolg absolvieren

②<et4> (課題など 4 を) やり遂げる；(試験 4 に) 合格する：

ein tägliches Pensum absolvieren

Er hat das Examen mit Auszeichnung absolviert.

### abstammen

自〔完了s；ただし完了形はまれ〕

①<von j3> (・・・の) 子孫である：

Der Mensch stammt vom Affen ab.

②《言語》<von et3> (・・・から) の派生である：

Dieses Wort stammt vom Lateinischen ab.

### abstellen

他

①<et4> (手に持っているもの4を) 下に置く；

Sie stellt ihren Koffer auf dem Bürgersteig ab.

②<et4> (使わないもの4を) 一時的にしまう；

die alten Möbel im Keller abstellen

das Auto in einer Seitenstraße abstellen

③<et4> (機械など4の) 作動を止める；(水道・ガスなど4を) とめる (反 anstellen)：

das Radio abstellen

das Gas abstellen ガスを止める.

④<et4> (欠陥など4を) 除去する：

Mängel abstellen

⑤<et4 auf et4> (・・・を・・・に) 適合させる：

Das Programm wurde ganz auf den Publikumsgeschmack abgestellt.

### abstimmen

I 自

投票する、採決する：

über das neue Gesetz abstimmen

geheim abstimmen

II 他

①<et4 auf et4> (・・・を・・・に) 適応させる：

Er hat seine Rede auf die Zuhörer abgestimmt.

verschiedene Interessen aufeinander abstimmen

②<et4> (楽器4などの) 音合わせ<チューニング>をする：

Die Instrumente sind gut aufeinander abgestimmt.

III 再

<sich4 mit j3> (・・・と) 意見を調整する：

Ich habe mich darüber mit ihm abgestimmt.

Wir müssen uns abstimmen.

### abstürzen

自〔完了s〕

①(高いところから) 墜落する、転落する：

Ein Flugzeug stürzte ab.

Zwei Bergsteiger sind beim Klettern abgestürzt.

②(斜面などが) そそり立つ、切り立つ：

An dieser Stelle stürzt der Berg ab.

eine steil abstürzende Felswand 断崖絶壁

### abtrocknen

I 他



①<et4/j4> (…4を) ぬぐって乾かす、水気をとる：

das Geschirr abtrocknen

Die Mutter trocknet das Kind ab.

Sie hat sich noch nicht abgetrocknet.

②<et4> (汗・涙など4を) ぬぐい取る：

Sie trocknete sich<sup>3</sup> die Tränen ab.

j<sup>3</sup> die Tränen abtrocknen

③<et4> (風などが…4を) すっかり乾かす：

Der Wind hat die Wäsche schnell abgetrocknet.

Ⅱ自〔完了s〕

Die Wäsche ist schnell abgetrocknet.

abwehren

他

①<j4/et4> (敵・攻撃など4を) 撃退する：

den Gegner abwehren

Der Angriff wurde erfolgreich abgewehrt.

②<et4> (災難など4を) 防ぐ、阻止する：

Das Schlimmste konnte gerade noch abgewehrt werden.

③<et4> (非難など4を) 退ける、はねつける：

einen Vorwurf abwehren

Sie wehrte den Dank kühl ab.

eine abwehrende Bewegung machen

④<et4/j4> (好ましくないもの4を) 追い払う、寄せつけない：

Fliegen abwehren

einen Besucher abwehren

abziehen

Ⅰ他

①<et4> (…4を) [引いて] 取り去る、はぎ取る：

den Ring vom Finger abziehen

einem Hasen das Fell abziehen

den Schlüssel abziehen

Er zieht jeden Tag den Bettbezug ab.

②<et4> (…4の) 覆い<皮>をはぎ取る：

Pfirsiche abziehen

einen Hasen abziehen

Sie hat die Betten abgezogen.

③<et4> (…4の) コピーをとる；《写真》(ネガ4を) 焼き付ける：

eine Arbeitsanweisung abziehen

④<et4> (数字など4を) 差し引く：

fünf Mark abziehen

die Steuern vom Gehalt abziehen

⑤<et4> (刃物4を) 研ぐ；(床など4を) みがく：

ein Messer abziehen

das Parkett abziehen

⑥<et4> (酒など4を) つぎ出す：

Er zog den Wein auf Flaschen ab.

⑦<j4> (部隊など4を) 引き揚げる、撤収する。

Ⅱ自〔完了s〕

① (軍隊などが) 撤退する ; 《口語》 立ち去る :  
Die Truppen sind aus den Stellungen abgezogen.

Der Bettler zieht mißmutig ab.

② (煙・水などが) 排出される :

Der Rauch zieht durch den Schornstein ab.

achten

I 他

① <j4> (…4 を) 尊敬する (反 verachten) . :

Das Volk achtet den Präsidenten.

Er ist wegen seiner Tüchtigkeit geachtet.

② <et4> (…4 を) 尊重する :

das Gesetz achten

j2 Gefühle achten …2 の感情を尊重する

II 自〔完了 h〕

① <auf et4/j4> (…4 に) 注意を払う、留意する :

Er achtete nicht auf die Passanten.

Er achtete nicht auf das, was ich sagte.

② <auf et4/j4> (…4 に) 気をつける :

Bitte achte auf das Kind !

auf Pünktlichkeit achten

achtgeben

自〔完了 h〕

<auf j4/et4> (…4 に) 注意する、気をつける :

Gib auf das Kind auf !

Er gibt auf seine Gesundheit acht.

Im Gebirge muß man sehr achtgeben.

ahnen

他

① <et4> (…4 を) 予感する、うすうす感じる :

Er hatte das Unglück geahnt.

Das konnte ich wirklich nicht ahnen.

② <et4> (…4 を) なんとなくわかる :

die Wahrheit ahnen

alarmieren

他

① <j4> (警察・消防署など 4 に) 急を知らせる、出動を要請する :

die Feuerwehr alarmieren

② <j4> (…4 を) 不安に陥れる :

Diese Meldungen alarmierten alle.

alarmierende Nachrichten

anbieten

I 他

① <j3 et4> (…3 に飲み物など 4 を) 勧める :

dem Gast eine Tasse Kaffee anbieten

Darf ich Ihnen ein Stück Kuchen anbieten ?

②<j3 et4> (…3 に…4 を) 申し出る ; 提供する :

Er bietet ihr seinen Platz an.

Ich habe ihm meine Wohnung angeboten.

j3 eine neue Stellung anbieten

Sie hat ihm das Du angeboten.

③<et4> (商品 4 を) 勧める ; 売りに出す :

Der Kaufmann bietet Kartoffeln an.

ein Haus zum Verkauf anbieten

Ⅱ再

①<sich4> (手助けを) 申し出る :

sich als Vermittler anbieten

Er hat sich ihr als Begleiter angeboten.

②《事柄を主語にして》<sich4> (適当なく考慮に値する)ものとして

頭に浮かぶ、考えられる :

Eine andere Möglichkeit bietet sich nicht an.

ändern

I 他

①<et4> (…4 を) [部分的に] 変える、変更する :

den Rock ändern

Das Flugzeug ändert seinen Kurs.

②<et4> (意見・事態など 4 を) [全く異なったものに] 変える :

Er änderte seine Meinung.

Das ist nicht zu ändern.

Das ändert nichts an der Tatsache, daß...

Ⅱ再

<sich4>変わる :

Das Wetter ändert sich.

Er hat sich schon sehr geändert.

andeuten

I 他

①<et4> (…4 を) ほのめかす、それとなく言う :

Er deutete an, daß er teilnehmen werde.

②<et4> (…4 を) ざっと<大まかに>示す :

Der Pianist deutete die Melodie nur an.

eine Verbeugung nur andeuten

Ⅱ再

《事柄を主語にして》<sich4> 兆候が見える :

Es deutet sich eine Verbesserung an.

aneignen

再

①<sich3 et4> (知識など 4 を) 身につける、習得する :

Du hast dir viele Kenntnisse angeeignet.

②<sich3 et4> (…4 を) 横領する、着服する :

Sie hat sich sein Vermögen angeeignet.

anerkennen

他

①<et4> (功績・功勞など4を) 認める、高く評価する :

Wir erkennen seine Verdienste an.

sich4 anerkennend äußern

②<et4/j4> (・・4を) (正当であるとして) 受け入れる、承認する :

Änderungen anerkennen

Wir erkennen seine Forderungen an.

ein Kind anerkennen

einen Staat diplomatisch anerkennen

Sie hat ihn nicht als Vorgesetzten anerkannt.

anfangen

I 自 [完了 h]

① 始まる (反 aufhören, enden) :

Das Konzert fängt um 20 Uhr an.

Hier fängt der Wald an.

Das Wort fängt mit R an.

《zu 不定句と》

Es hat angefangen zu regnen.

②<mit et3> (・・3を) 始める :

mit dem Essen anfangen

③ [受講・勤務を] 始める :

Am 1. April können Sie anfangen.

II 他

①<et4> (・・4を) 始める (反 beenden) :

ein Gespräch anfangen

Er fing einen Streit an.

《zu 不定句と》

Wir fingen an, ein Haus zu bauen.

②<et4> (・・4を) する、行う :

Was fangen wir nun an ?

Mit ihm ist nichts anzufangen.

Mit der Rechenmaschine kann ich nichts anfangen.

angeben

I 他

①<et4> (・・4を) 述べる、挙げる ; 申し立てる :

Namen und Adresse angeben

die Quellen angeben

et4 als Grund angeben

《zu 不定句と》

Er gibt an, zu Hause gewesen zu sein.

②<et4> (・・4を) 指示する、定める :

den Takt angeben

《比喩》 den Ton angeben

③<et4> (・・4を) [点・線などで] 示す :

die Lage des Dorfes angeben

die Umriss des Gebäudes angeben

II 自 [完了 h]

① 《口語》 大ぶろしきを広げる ; 自慢をする :

Gib bloß nicht so an !

Er gab mit seinem neuen Auto an.

② 《スポーツ》サーブをする。

angehen

I 他

① <j4/et4> (…4に) 関係する、かかわる (☆ 完了形は用いない) :

Dieser Fall geht uns alle an.

Das geht dich nichts an.

was deinen Vorschlag angeht

② <j4> (…4を) 襲う、攻撃する (☆ 南部ドイツで 完了 s) :

Das Wildschwein ging den Jäger an.

③ <et4> (…4と) 取り組む (☆ 南部ドイツで 完了 s) :

ein Thema von einer anderen Seite angehen

④ <j4 um et4> (…4に…4を) 頼む、ねだる (☆ 南部ドイツで 完了 s) :

Sie hat ihn um Geld angegangen.

II 自 [完了 s]

① 《口語》 (映画・学校など) 始まる :

Wann geht das Theater an ?

② 《口語》 燃え出す ; (明かりが) つく (反 ausgehen) :

Das Feuer geht nicht an.

③ <gegen et4> (悪・偏見など 4に) 立ち向かう :

gegen eine Krankheit angehen

④ 許容できる、がまんできる :

Die Hitze geht gerade noch an.

Es geht nicht an, daß wir absagen.

angeln

I 他

<et4> (魚 4を) 釣る :

Forellen angeln

《口語》 sich<sup>3</sup> j4 angeln

II 自

① 釣りをする :

Er angelt mit Begeisterung.

angeln gehen

② <nach et3/j3> (少し離れたところにあるもの 3を) つかもうとする :

mit dem Fuß nach dem Schuh angeln

angreifen

I 他

① <j4> (…4を) 攻撃する ; 《スポーツ》 アタックする (反 verteidigen) :

den Feind überraschend angreifen

《目的語なしで》

mit Panzern angreifen

《比喻》

Der Redner wurde heftig angegriffen.

② <et4> (蓄えなど 4に) 手をつける :

Ich habe das Guthaben noch nicht angegriffen.

③ 《事柄を主語にして》 <et4/j4> (… [の健康など] 4を) 損なう、  
疲れさす :

Das Licht greift die Augen an.

Die Krankheit hat ihn sehr angegriffen.

④ <et4> (金属など 4 を) 腐食する :

Der Rost greift das Eisen an.

⑤ <et4> (仕事など 4 に) 取りかかる、着手する :

eine Arbeit angreifen

anhaben

他

《口語》 <et4> (衣服など 4 を) 身につけている (☆ 靴なども含む) :

Sie hat ein neues Kleid an.

◆ j3/et3 nichts anhaben können

Er kann dir nichts anhaben.

anhalten

I 他

① <et4/j4> (車など 4 を) 止める ; (人 4 を) 呼び止める :

das Auto anhalten

den Schritt anhalten

den Atem anhalten

Er hielt mich auf der Straße an.

② <j4 zu et3> (注意などをして) (・4 に・3 が) できるようにする :

Die Mutter hält die Kinder zur Höflichkeit an.

③ <et4> (・4 を) 押し当てる、あてがう :

das Lineal anhalten

II 自

① (車などが) 止まる、停車する :

Das Auto hielt vor dem Haus an.

Halten Sie an !

② (一定の状態が) 長く続く、持続する :

Regen und Kälte halten an.

anklagen

他

① <j4> (・4 を) 起訴する、告訴する、告発する :

Er wurde wegen Mordes angeklagt.

② <j4/et4> (・4 を) 責める、罪を負わせる :

das Schicksal anklagen

ankommen

自 [完了 s]

① 到着する :

Der Zug kommt um 8 Uhr an.

Er ist gestern mit dem Flugzeug angekommen.

Er ist am Bahnhof angekommen.

Sie kamen pünktlich in Berlin an.

Ein Brief ist angekommen.

② (車などが) 近づいて来る :

Der Wagen kam in großem Tempo an.

③ 受け入れられる :

Der Schlager ist gut angekommen.

④ <auf et4/j4> (・4) しだいである ; 重要である :

Es kommt auf dich an, ob wir morgen abreisen.

《非人称で》

Es kommt auf das Wetter an.

Es kam mir sehr darauf an, ihm das zu erklären.

Auf die paar Mark kommt es mir nun wirklich nicht an.

◆ gegen j4<et4>nicht ankommen können ・4 に対抗できない :

Gegen ihn kommt man nicht an.

Er kam gegen die Vorurteile nicht an.

◆ es auf et4 ankommen lassen ・4 に思い切って任せる、尻込みしない :

Ich will es auf seinen Willen ankommen lassen.

Auf den Prozeß werde ich es ankommen lassen.

anlegen

I 他

① <et4> (・4 を) (あるものに接触させて) 置く、立てる、当てる :

eine Leiter an die Wand anlegen

ein Lineal anlegen

den Säugling anlegen

die Ohren anlegen

② <j3 et4> (・3 に・4 を) あてがう、取り付ける :

j3 einen Verband anlegen

dem Hund den Maulkorb anlegen

Er legte dem Verbrecher Handschellen an.

③ <et4> (・4 を) 建設する ; (目録など 4 を) 作成する :

einen Park anlegen

Die Stadt plant, einen neuen Flughafen anzulegen.

ein Verzeichnis anlegen

④ <et4> (燃料 4 を) 火にくべる :

Holz anlegen

⑤ <et4> (・4 を) 投資する ; (比較的大きな金額 4 を) 支出する :

Er legte sein Geld in Gemälden an.

Für das Auto haben wir viel Geld angelegt.

⑥ 《雅語》 <et> (式服など 4 を) 着る ; (装身具 4 を) 身につける :

ein Gewand anlegen

⑦ <et4 auf et4> (・4 の目的を・4 へ) 置く :

Die Parade war auf eine Demonstration der Stärke angelegt.

◆ es auf et4 anlegen ・4 にねらいを置く (☆ es は形式目的語) :

Sie hat es darauf angelegt, ihn zu ärgern.

◆ Hand anlegen 手を貸す :

Er legte fleißig an.

◆ einen strengen Maßstab an et4 anlegen

II 自

① (船が) 接岸する (反 ablegen) :

Das Schiff legte am Kai an.

② 銃を構える :

Er legte an und schoß.

Er legte auf den Flüchtenden an.

③ 燃料をくべる.

### Ⅲ再

< sich4 mit j3 > (・・3 と) いざこざを起こす :

Er wollte sich mit mir anlegen.

### anmelden

他

① < j4 / et4 > (来訪など 4 を) [前もって] 知らせる、通知<連絡>する :

einen Besuch anmelden

《再帰代名詞と》

Er hat sich beim Arzt angemeldet.

sich anmelden lassen

② < j4 > (・・4 の) 転入などを届け出る ; 参加などを申し込む (反 abmelden) :

Er meldet seine Familie polizeilich an.

Er meldete sein Kind im Kindergarten an.

《再帰代名詞と》

sich bei der Polizei anmelden

sich zu einem Kurs anmelden

③ < et > (特許など 4 を) 申請する :

ein Patent anmelden

Er meldete eine Erfindung zum Patent an.

④ < et4 > (考え・要求 4 を) 述べる :

Ansprüche anmelden

starke Bedenken anmelden

### annehmen

I 他

① < et4 > (差し出されるもの 4 を) 受け取る (反 ablehnen) :

ein Geschenk annehmen

einen Brief für den Nachbarn annehmen

Das kann ich doch nicht annehmen !

② < et4 > (申し出・援助など 4 を) 受け入れる ; 承認する :

einen Vorschlag annehmen

die Einladung annehmen

Der Antrag wurde einstimmig angenommen.

③ 《daß 文と》 (・・4 と) 仮定する、前提する :

Man nimmt allgemein an, daß...

angenommen, daß..

④ < et4 > (習慣など 4 を) 身につける :

schlechte Gewohnheiten annehmen

einen anderen Namen annehmen

⑤ < j4 > (・・4 を) 受け入れる、採用する :

neue Arbeiter annehmen

Nach 6 Uhr werden keine Patienten mehr angenommen.

《口語》

eine Waise annehmen

⑥ 《物を主語にして》 < et4 > (染料・インキなど 4 を) 吸収する :

Diese Stoffe nehmen Farben gut an.

⑦ 《特定の名詞 4 と》

unvorstellbare Ausmaße annehmen

konkrete Gestalt annehmen

Vernunft annehmen



Ⅱ再

<such4 j2/et2>・・・の面倒をみる：

Er nahm sich des Verletzten an.

anordnen

他

①<et4> (・・・を) (職務上の権限で) 命じる、指示する：

eine Untersuchung anordnen

Der Arzt hat Bettruhe angeordnet.

《zu 不定句と》

Er ordnete an, die Gefangenen zu entlassen.

②<et4> (・・・を) 秩序立てて並べる、配列する：

die Kartei alphabetisch anordnen

Das Verzeichnis ist nach Sachgebieten angeordnet.

anpassen

Ⅰ他

<et4 j3/et3> (・・・を・・・に) 合わせる、適合させる、調和させる：

einen Mantel der Figur anpassen

Er paßte seine Kleidung der Jahreszeit an.

《相互の意味で》

Bauteile einander anpassen

Ⅱ再

<such4 et3/j3> (・・・に) 順応する、適応する：

sich der Zeit anpassen

Er paßt sich den anderen an.

《相互的に》

Kinder passen sich schnell an.

anprobieren

他

<et4> (服など4を) 試着する (☆靴・手袋なども含む)：

Kleider anprobieren

Schuhe anprobieren

anreden

他

①<j4> (・・・に) 話しかける：

Er hat mich auf der Straße angeredet.

②<j4 mit et3> (・・・に・・・で) 呼びかける：

Sie redete ihn mit "du" an.

Sie redete ihn mit seinem Titel an.

anregen

他

①<et4/j4> (・・・を) (刺激して) 活発にする：

den Kreislauf anregen

Bewegung regt den Appetit an.

Tee regt an.

②<j4 zu et3> (・・・に・・・をする) きっかけを与える：

Prof. Eroms hat diese Dissertation angeregt.  
Das regte ihn zum Nachdenken an.

### anrufen

#### I 他

① <j4> (・・4 に) 電話をかける :

den Freund anrufen

Ruf mich doch morgen nachmittag an !

② <j4> (・・4 に) 声をかける、呼びかける :

Er rief mich auf der Straße an.

③ 《雅語》 <j4> (・・4 に) 嘆願する :

Er fiel auf die Knie und rief Gott an.

#### II 自 [完了 h]

電話をかける :

Er hat schon dreimal angerufen.

《場所の語句と》

bei j3 anrufen

Ich muß noch zu Hause anrufen

### ansagen

#### I 他

<et4> (予定など 4 を) 告げる、知らせる :

Er hat seinen Besuch für morgen angesagt.

das Programm ansagen

#### II 再

<sich4> (自分の訪問などを〜と) 前もって知らせる、連絡する :

sich bei j3 ansagen

Unser Freund hat sich für fünf Uhr angesagt.

### anschauen

#### 他

① <j4/et4> (・・4 を) 見る、見つめる (同 ansehen) :

Sie schaute ihn vorwurfsvoll an.

Er schaut sich im Spiegel an.

② <sich3 j4/et4> (・・4 を) じっくり見る、観察する、観賞する :

sich die Stadt anschauen

Der Arzt schaute sich den Kranken an.

### anschlagen

#### I 他

① <et4> (板など 4 を) [ハンマーなどで] 打ちつける :

ein Brett anschlagen

② <et4> (掲示物 4 を) 張りつける、掲示する :

ein Plakat am Schwarzen Brett anschlagen

das Programm für nächste Woche anschlagen

③ <et4> (・・4 [の角など] を) ぶつけて壊す :

Beim Geschirrspülen wurde ein Teller angeschlagen.

Ich habe mir den Kopf an der Tür angeschlagen.

④ <et4> (ピアノなどのキー 4 を) たたく :

die Tasten anschlagen

⑤<et4> (…4を) 打ち鳴らす :

eine Glocke anschlagen

Ⅱ 自

①〔完了 h〕 (時計・鐘などが) 鳴り出す ; (犬が) 〔警戒して〕 ほえる :

Die Turmuhr hat zwölfmal angeschlagen.

Der Hund schlug plötzlich an.

②〔完了 s〕 激しくぶつかる、打ち当たる :

Die Wellen schlagen am Kai an.

Er ist mit dem Kopf an die Wand angeschlagen.

③〔完了 h〕 (薬などが) 効く :

Die Kur hat nicht angeschlagen.

anschließen

I 他

①<et4> (…4を) 〔鎖などで〕 結びつける :

das Fahrrad am Zaun anschließen

②<et4> (器具など4を) 接続する :

ein elektrisches Gerät anschließen

einen Schlauch an die Wasserleitung anschließen

③<et4> (言葉など4を) 付け加える :

Er schloß an seine Rede einige Worte des Dankes an.

④<et4 an et4> (…4を…4へ) 付属させる :

Der Schule wird ein Internat angeschlossen.

Ⅱ 再

①<sich4> (講演・討論などが) 引き続いて行われる :

An den Vortrag schließt sich eine Diskussion an.

(☆ 自動詞的用法の場合もある :

An den Vortrag schließt eine Diskussion an.)

bei der anschließenden Diskussion

②<sich4 et3/j3> (… [の考え方など] 3に) 同調する ;

加わる、参加する :

sich einer Meinung anschließen

sich einem Streik anschließen

Er hat sich dieser Partei angeschlossen.

Darf ich mich Ihnen anschließen ?

sich leicht anschließen [können]

Ⅲ 自

① 隣接する :

Der Garten schließt an das Haus an.

(☆ 再帰的用法の場合もある :

Der Garten schließt sich an das Haus an.)

② (衣服が体に) ぴったり合う :

Das Kleid schließt am Hals eng an.

ansehen

I 他

①<j4/et4> (…4を) 見る、見つめる :

Sieh mich an !

Er sah seine Hände an.

j4 groß ansehen

Sieh mal an !

② < [sich3] j4/et4 > (・・4 を) じっくり見る :

sich einen Film ansehen

sich eine Stadt ansehen

Ich habe mir die Bilder angesehen.

Der Arzt sah sich die Verwundeten an.

③ < j4/et4 > 《様態の語句と》 (・・4 を…と) 見なす ; 考える :

Wir sehen die Sache ganz anders an.

Ich sehe es als meine Pflicht an, ihm zu helfen.

Ich habe ihn für einen Ausländer angesehen.

Er sieht sich als Held an.

④ < j3/et3 et4 > (外見など 3 から・・4 を) 見てとる ;

Man sieht ihm sein Alter nicht an.

Man sah es seinem Gesicht an, daß...

⑤ < et4 > (・・4 を) 傍観する (☆ ふつう mit と否定詞を伴う) :

Ich kann diese Ungerechtigkeit nicht mit ansehen.

II 再

< sich4 > 《様態の語句と》 (…のように) 見える :

Das sieht sich ganz hübsch an.

◆ anzusehen sein 《様態の語句と》 見た感じが…だ :

Das ist lustig anzusehen.

anstecken

I 他

① < et4 > (・・4 を) 針<ピン>で留める ; (指輪 4 を) はめる :

eine Brosche an das Kleid anstecken

Er steckte sich eine Blume an.

② < j4 > (・・4 に) 病気などをうつす :

Sie hat ihn mit ihrer Erkältung angesteckt

Er hat uns alle mit seiner Fröhlichkeit angesteckt.

③ 《北部・中部ドイツで》 < et4 > (・・4 に) 火をつける :

ein Haus anstecken

II 再

< sich4 > (病気に) 感染する :

Ich habe mich bei ihm angesteckt.

III 自

(病気・あくびなどが) うつる :

Diese Krankheit steckt an.

anstellen

I 他

① < et4 an et4 > (・・4 を・・4 に) 立てかける :

eine Leiter an die Wand anstellen

② < et4 > (・・4 の) スイッチを入れる ; (栓などを開いて・・4 を) 出す (反 abstellen) :

das Fernsehen anstellen

Er hat die Heizung angestellt.

das Gas anstellen

③ < j4 > (・・4 を) 雇う :

Ich habe ihn als Verkäufer angestellt.

Er ist bei der Post angestellt.

④《口語》<et4> (…4を) する (☆ふつう否定的な意味合いで) :

Er hat etwas Dummes angestellt.

alles mögliche anstellen

⑤《特定の名詞4と》

Betrachtungen anstellen

Vermutungen über et4 anstellen

Ⅱ再

①<sich4>列に並ぶ :

Sie müssen sich hinten anstellen.

②《口語》<sich4>《様態の語句と》 (…のように) 振舞う :

sich wie ein Verrückter anstellen

anstreichen

他

①<et4> (…4に) ペンキ・うるしなどを塗る :

den Zaun anstreichen

Frisch angestrichen !

②<et4> (…4に) (目立つように) 線を引く :

eine Stelle im Buch anstreichen

antreten

Ⅰ他

①<et4> (旅など4に) 出る :

eine Reise nach Frankreich antreten

den Heimweg antreten

②<et4> (職務など4に) 取りかかる ; 引き継ぐ ; 譲り受ける :

Wann können Sie diese Stelle antreten?

Sie tritt seine Nachfolge an.

ein Erbe antreten

③<et4> (…4を) 踏んで作動させる :

die Bremse antreten

Er hat das Motorrad angetreten.

④<et4> (土などを) 軽く踏み固める :

die Erde antreten

Ⅱ自 [完了s]

① 整列する :

Die Schüler sind der Größe nach angetreten.

Angetreten ! 整列.

② (仕事場などに) 現れる、出て来る :

Sie sind pünktlich zum Dienst angetreten.

antun

他

<j3 et4> (…3に危害など4を) 加える ; (…3に好意など4を) 示す :

Tu mir das nicht an !

j3 etwas Gutes antun

◆ es j3 angetan haben

Diese Landschaft hat es mir angetan.

antworten

自〔完了h〕

答える、返事をする：

höflich antworten

Kannst du nicht antworten ?

Antworte mir auf meine Frage !

《返事の内容を4格で》

Was hast du ihm geantwortet ?

Er antwortete, daß...

Er antwortete mit einem Achselzucken.

anvertrauen

I 他

①<j3 et4/j4> (…3に…4を)〔信頼して〕任せる：

Er vertraute ihr sein ganzes Vermögen an.

Während der Reise vertraute er sein Kind seiner Tante an.

②<j3 et4> (…3に秘密など4を)打ち明ける：

Ich vertraue dir mein Geheimnis an.

II 再

①<sich4 j3> (…3に)心中を打ち明ける：

Du kannst dich mir ruhig anvertrauen.

②<sich4 et3/j3> (…3に)身をゆだねる：

Er hat sich dem Arzt anvertraut.

anweisen

他

①<j4>《zu 不定句と》(…4に…するように)指図する：

Ich habe ihn angewiesen, die Sache sofort zu erledigen.

Er war angewiesen, darüber nicht zu sprechen.

②<j3 et4> (…3に仕事・部屋など4を)割り当てる：

Man hat mir diese Arbeit angewiesen.

③<et4> (お金4を) (為替で)送金する：

das Gehalt anweisen

Weisen Sie das Geld bitte durch die Post an.

anwenden

他

①<et4> (…4を)用いる、使用する：

eine Methode anwenden

ein Heilmittel richtig anwenden

Gewalt anwenden

eine List anwenden

②<et4> (…4を)適用する：

eine Regel anwenden

Wir haben diese Prinzipien auf die Wirtschaft angewendet <angewandt>.

anzeigen

他

①<et4> (犯罪など4を)届け出る：

einen Diebstahl bei der Polizei anzeigen

②<j4> (犯人など4を)訴える、告発する：

Sie haben ihn wegen Diebstahls angezeigt.

③<et4> (…4を) [計器類で] 表示する; (計器類が…4を) 示す:  
die Änderung der Fahrtrichtung rechtzeitig anzeigen

Die Uhr zeigt fünf Minuten nach acht an.

④<et4> (…4の) 広告を出す; (前もって) 知らせる:

Der Verlag hat die neuen Bücher angezeigt.

Ich werde dir meine Ankunft noch anzeigen.

anziehen

I 他

①<et4> (衣類など4を) 身につける (☆ 帽子・靴・手袋にも用いる):

ein Kleid anziehen

Sie zieht Strümpfe an.

②<j3 et4> (…3に…4を) 着せる:

Die Mutter zieht dem Kind frische Wäsche an.

③<j4> (…4に) 服を着せる:

Die Mutter zieht das Kind an.

④<et4> (足・あごなど4を) 引き寄せる:

das Kinn anziehen

ein Bein anziehen

⑤<et4> (磁石が) (…4を) 引き寄せる; (湿気・においなど4を)  
吸収する:

Das Magnet zieht Eisen an.

Salz zieht Feuchtigkeit an.

⑥<j4> (…4の) 心を引きつける:

Sein heiteres Wesen zieht alle an.

Die Buchmesse hat wieder zahlreiche Besucher angezogen.

⑦<et4> (綱など4を) 引っ張る、引き締める、引き絞る:

ein Seil anziehen

die Zügel anziehen

Er zog zwei Saiten leicht an.

⑧<et4> (ねじなど4を) 締める:

die Schraube anziehen

Ich habe vergessen, die Handbremse anzuziehen.

II 再

<sich4>衣服を着る:

sich zum Ausgehen anziehen

Das Kind kann sich schon allein anziehen.

Sie ist elegant angezogen.

III 自〔完了h〕

①(列車などが) [物を引きながら] 動き始める:

Der Zug zog langsam an.

Die Pferde ziehen an, der Wagen fährt fort.

②(価格などが) 上昇する:

Die Preise ziehen mächtig an.

anzünden

他

<et4> (…4に) 火をつける:

ein Streichholz anzünden

### ärgern

I 再

< sich 4 > 怒る、腹を立てる :

Ich habe mich über ihn geärgert.

II 他

① < j 4 > ( … 4 を ) 怒らせる :

Sie hat mich mit ihrem Verhalten sehr geärgert.

Es ärgert ihn, daß.

② < j 4 > ( … 4 を ) かまう、からかう :

den kleinen Bruder ärgern

### atmen

I 自 [完了 h]

呼吸をする、息をする :

tief atmen

II 他

《雅語》 < et 4 > ( 空気など 4 を ) 吸い込む.

### aufbewahren

他

< et 4 > ( … 4 を ) 保管する、保存する ; ( 貴重品など 4 を ) しまっておく :

die Medikamente kühl aufbewahren

Gepäck auf dem Bahnhof aufbewahren lassen

### aufbleiben

自 [完了 s]

① 寝ないで起きている :

Sie sind die ganze Nacht aufgeblieben.

② ( 戸・窓などが ) 開いたままになっている :

Das Fenster soll noch aufbleiben.

### aufblühen

自 [完了 s]

① ( 花などが ) 開く、開花する ; ( 国などが ) 栄える :

Die Rose ist aufgeblüht.

② ( 人が ) 元気になる :

Sie blühte allmählich wieder auf.

### aufbrechen

I 他

< et 4 > ( … 4 を ) こじ開ける :

Er brach die Kiste mit einem Stemmeisen auf.

II 自 [完了 s]

① ( 花・つぼみなどが ) 開く :

Die Knospen brechen auf.

② ( 傷口などが ) ぱっくり口を開ける :



Die Eisdecke ist aufgebrochen.

③〔旅行などに〕出発する、出かける：  
Sie sind vor einer Stunde aufgebrochen.

auffallen

自〔完了s〕

①目立つ、人目を引く：

Seine Abwesenheit fiel nicht auf.

Er fällt durch seine hohe Stimme überall auf.

②<j3> (…3の) 注意を引く、目にとまる：

Er ist mir sofort aufgefallen.

auffordern

他

①<j4 zu et3> (…4に…3を) 要求する、求める：

Sie forderte ihn zum Sitzen auf.

Der Polizist forderte ihn auf, seinen Ausweis zu zeigen.

②<j4> (…4を)〔ダンス・食事などに〕誘う：

eine Dame zum Tanz auffordern

aufführen

I 他

①<et4> (劇など4を) 上演する；(楽曲4を) 演奏する；(映画4を)

上映する；(催し物4を) 興行する：

eine Oper aufführen

einen neuen Film aufführen

②<j4/et4> (理由・事例・名前など4を) 挙げる、〔リストに〕記載する：

Gründe<Beispiele> aufführen

Sein Name war in der Liste nicht aufgeführt.

③<et4> (家など4を) 建てる；(塀など4を) 築く。

II 再

<sich4>《様態の語句と》(…のように) 振舞う：

sich anständig aufführen

aufgeben

他

①<et4> (…4を) 放棄する、断念する、あきらめる：

Er gibt allen Widerstand auf.

《目的語なしで》

In der dritten Runde gab der Boxer auf.

②<et4> (ある業務を行ってもらうために) (…4を) 窓口に出す：

einen Brief bei der Post aufgeben

den Koffer bei der Bahn aufgeben

Er gibt eine Anzeige bei einer Tageszeitung auf.

③<j3 et4> (…3に仕事・任務など4を) 課する：

Der Lehrer gibt den Schülern einen Aufsatz auf.

Unser Lehrer gibt immer zuviel auf.

④ 〈j4〉 (…4 を) 見放す：  
Der Arzt gab den Kranken auf.

### aufgehen

自〔完了s〕

① (天体が) 昇る (反 untergehen) :

Der Mond ist aufgegangen.

② (ドアなどが) 開く、あく :

Das Fenster geht nur schwer auf.

③ (結び目などが) 緩む :

Der Knoten ging immer wieder auf.

④ (つぼみが) ほころびる ; 発芽する ; (ケーキなどが酵母菌によって) 膨れ□□る :

Die Knospe geht auf.

Die Saat ist aufgegangen.

⑤ (計算で) 割り切れる :

Die Division geht auf.

⑥ 〈j3〉 (…3 に) 明らかになる、わかるようになる :

Mir ist erst jetzt der Sinn deiner Bemerkung aufgegangen.

⑦ 〈in et3〉 (…に) 没頭する、熱中する :

Sie ging ganz in ihrem Beruf auf.

### aufhalten

I 再

① <sich4> 《場所の語句と》 (…に) 滞在する、〔一定の期間〕 留まる :

Sie halten sich zur Zeit an der See auf.

② <sich4 mit j3/et3> (…3 に) かかずらう :

Sie haben sich mit diesen Fragen zu lange aufgehalten.

③ <sich4 über j4/et4> (…4 を) けなす、文句をつける :

Sie hält sich über sein Benehmen auf.

II 他

① <j4/et4> (…4 を) 阻止する ; 引き留める :

den Vormarsch des Feindes aufhalten

Ich will Sie nicht länger aufhalten.

② <et4> (災害など 4 を) 食い止める :

Sie konnten die Katastrophe nicht mehr aufhalten.

④ 《口語》 <et4> (ドア・手など 4 を) 開けたままにしておく :

Halt mal bitte die Tür auf!

### aufheben

I 他

① <et4> (落ちている物 4 を) 拾い上げる :

ein Handtuch vom Boden aufheben

② <j4> (…4 を) 助け起こす :

einen Gestürzten aufheben

③ <et4> (…4 を) 取っておく、保存する、保管する :

für j4 ein Stück Kuchen aufheben

Sie hob alle seine Briefe zur Erinnerung auf.

④<et4> (法令・条約など 4 を) 廃棄<廃止>する :

einen Vertrag aufheben

die Todesstrafe aufheben

⑤<et4> (…4 を) 相殺する ; (矛盾など 4 を) 解消する :

Der Verlust hebt den Gewinn auf.

⑥<et4> (会議など 4 を) [公式に] 終える :

die Tafel aufheben

Ⅱ再

<sich4> 相殺される :

Plus drei und minus drei heben sich auf.

aufhören

自 [完了 h]

① (出来事が) やむ、とぎれる (反 anfangen, beginnen) :

Der Regen hörte endlich auf.

Es wird bald aufhören zu schneien.

《非人称で ; mit 前置詞句と》

Es hat mit dem Schneien aufgehört.

雪が降りやんだ

② <mit et3> (…3 を) やめる, 中断する :

Er hört frühzeitig mit der Arbeit auf.

《zu 不定句と》

Er hört auf zu lachen.

aufklären

I 他

①<et4> (なぞなど 4 を) 解明する、明らかにする :

ein Verbrechen aufklären

②<j4 über et4> (…4 に…4 を) 教えてやる :

Sie hat ihn über die Gefahr aufgeklärt.

③<j4> (子供 4 に) 性教育をする :

Sie ist noch nicht aufgeklärt.

Ⅱ再

①<sich4> (天氣が) 晴れる :

Der Himmel klärt sich auf.

②<sich4> 明らかになる :

Das Mißverständnis klärte sich auf.

aufkommen

自 [完了 s]

① (あらしなどが) 起こる、生じる ; (うわさ・流行などが) 広まる :

Ein Gewitter kommt auf.

Wie ist das Gerücht aufgekomen ?

② 健康になる :

Sie ist von ihrer Krankheit nur langsam aufgekomen.

③<für j4/et4> (…4 の) 經濟上の責任を負う、賠償<補償>する :

Er muß für den Schaden aufkommen.

④ <gegen j4/et4> (…4 に) 逆らえる、張り合える、対抗できる  
(☆ ふつう否定詞と) :

Wir kommen gegen ihn nicht auf.

**auflegen**

他

① <et4> (…4 を) 上に置く、のせる ;  
(食器など 4 を) 並べる ; (膏薬など 4 を) はる :

eine Schallplatte auflegen

eine Pflaster auf die Wunde auflegen

Sie hat [den Hörer] einfach aufgelegt.

② <et4> (本 4 を) 出版する :

ein Buch neu <wieder> auflegen

**auflösen**

I 他

① <et4> (…4 を) 溶かす :

Er löst Salz in Wasser auf.

② (結んであるもの 4 を) ほどく :

Er löste eine Schleife auf.

③ (取り決めなど 4) 解消する ; (団体・集会など 4 を) 解散する :

Sie haben die Verlobung aufgelöst.

II 再

① <sich4> 溶ける :

Zucker löst sich in Wasser auf.

② <sich4> (結び目などが) ほどける ; (誤解などが) 解ける ;

Die Schleife löst sich auf.

③ <sich4> (団体・集会などが) 解散する :

Die Menschenmassen lösen sich auf.

**aufmachen**

I 他

① 《口語》 <et4> (…4 を) 開く、開ける (反 zumachen) :

eine Tür aufmachen

einen Brief aufmachen

eine Flasche aufmachen

② 《口語》 <et4> (…4 を) 開店する :

eine Filiale aufmachen

③ <j3 et4> (…3 に請求書など 4 を) 出す :

Er hat uns eine anständige Rechnung aufgemacht.

④ <et4> (ショーウィンドーなど 4 を) 飾りつける ; (本 4 を) 装丁する ;  
(品物 4 を) 包装する.

II 自 [完了 h]

《口語》

(店などが) 開く、あく :

Das Geschäft macht um 9 Uhr auf.

Ⅲ再

①< sich4 > 出かける、出発する :

Wir haben uns um sechs Uhr aufgemacht.

②《口語》< sich4 > おめかしをする :

Sie hatte sich auf jung aufgemacht.

aufnehmen

他

①< et4 / j4 > (…4 を) 持ち上げる :

ein Taschentuch vom Boden aufnehmen

den Hörer aufnehmen

②< et4 > (仕事など 4 を) 新たに始める ; (関係など 4 を) つける :

Verhandlungen wieder aufnehmen

einen Kontakt mit j3 aufnehmen

③< et4 > (提案など 4 を) 取り入れる、受け入れる :

eine Anregung aufnehmen

《様態の語句と》

eine Nachricht gelassen aufnehmen

④< j4 > (客など 4 を) 迎え入れる ; 泊める、収容する :

Wir sind freundlich aufgenommen worden.

⑤< j4 > (学校・団体などが…4 を) 受け入れる :

einen Schüler in die Klasse aufnehmen

⑥< et4 / j4 in et4 > (…4 を…4 に) 取り入れる、加える :

ein Wort in ein Wörterbuch aufnehmen

⑦< j4 / et4 > (…4 を) 収容できる、入れられる (☆ 多く können と共に) :

Der Saal kann 350 Personen aufnehmen.

⑧< et4 > (水など 4 を) 吸収する ; (栄養 4 を) 摂取する :

Der Boden hat das Wasser aufgenommen.

⑨< et4 > (知識など 4 を) 吸収する ; (印象・感銘など 4 を) 受ける :

Das Kind nimmt alles schnell auf.

⑩< et4 > (貸付金 4 を) 借入れ :

einen Kredit aufnehmen

⑪< et4 > (…4 を) 記録する、書き留める :

Die Polizei nahm den Unfall auf.

⑫< j4 / et4 > (…4 を) 録音<録画>する ; 写真にとる :

eine Fernsehsendung aufnehmen

eine Oper auf Tonband aufnehmen

Sie läßt sich nicht gern aufnehmen.

◆ es mit j3 aufnehmen

Mit ihm nehme ich es im Trinken noch allemal auf.

aufpassen

自

①< auf et4 / j4 > (…4 に) 気をつける :

An der Kreuzung muß man auf die Autos aufpassen.

Paß auf die Kinder auf!

② (人の言葉などに) 注意を払う :

beim Unterricht gut aufpassen

Paß auf!

aufräumen

I 他

<et4> (…4 を) 片づける、整頓する :

die Spielsachen aufräumen

Er räumte sein Zimmer auf.

II 自〔完了 h〕

<mit et3/j3> (…3 を) 取り除く、一掃する :

Der Staat hat mit den Verbrechern aufgeräumt.

aufregen

I 再

① <sich4> 興奮する :

Regen Sie sich nicht auf!

Sie war sehr aufgeregt.

② 《口語》 <sich4 über et4> (…4 に) 怒る :

Das ganze Dorf regte sich über ihn auf.

II 他

<j4> (…4 を) 興奮させる :

Die Nachricht regte mich auf.

aufrichten

I 他

① <j4/et4> (…4 を) [まっすぐに] 起こす、立てる :

eine zusammengesunkene alte Frau aufrichten

Er hat einen umgestürzten Zaun aufgerichtet.

② <j4> (…4 を) 元気づける :

Sie richtete ihn durch freundlichen Zuspruch auf.

II 再

① <sich4> 起き上がる、立ち上がる :

Der Kranke richtet sich im Bett auf.

② <sich4> 立ち直る :

Ich habe mich in meiner Verzweiflung an seinen Worten aufgerichtet.

aufschlagen

自

① [完了 s] <auf et4/3> (…4 に) 激しくぶつかる :

Das Flugzeug schlug auf den <dem> Boden auf.

② [完了 h] (値段が) 上がる ; 値段を上げる :

Die Miete hat wieder aufgeschalgen.

Der Kaufmann schlägt erheblich auf.

③ [完了 h] 《球技》サーブをする :

Wer schlägt auf?

Ⅱ 他

① <et4> (…4 を) 打ち割る :

ein Ei aufschlagen

卵を割る

② <sich3 et4> (…4 を) ぶつける、打ちつける :

Er hat sich das Knie aufgeschlagen.

彼はひざをぶつけてしまった

③ <et4> (ページ・目など 4 を) 開く、開ける :

Schlagt die Seite 7 auf!

7 ページを開いてください

④ <et4> (…4 を) 組み立てる :

Sie haben ein Zelt aufgeschlagen. 彼らはテントを張った

aufschließen [アオフシュリーセン]

(schloß auf, aufgeschlossen)

他

① <et4> (…4 を) 鍵で開ける (反 zuschließen) :

die Tür aufschließen

Ⅱ 自 [完了 h]

(列などの) 間隔をつめる :

Wir müssen mehr aufschließen.

aufstehen

自

① [完了 s] [座っている・寝ている状態から] 立ち上がる、起き上がる :

vom Stuhl aufstehen

Der Gestürzte steht mühsam auf.

② [完了 s] 起きる、起床する :

Er steht jeden Tag um 5 Uhr auf.

③ [完了 h] 《口語》 (窓などが) 開いたままである :

Die Tür hat die ganze Nacht aufgestanden.

④ [完了 s] 《雅語》 反乱を起こす、蜂起する :

Das Volk stand gegen die Unterdrücker auf.

aufsteigen

自 [完了 s]

① (自転車・馬などに) 乗る (反 absteigen) :

Er steigt auf das Fahrrad auf.

② (山などに) 登る (反 absteigen) :

zum Gipfel aufsteigen

③ (飛行機などが) 上昇する ; (煙などが) 立ちのぼる ; (星などが) 昇る :

Rauch steigt aus dem Schornstein auf.

Die Tränen stiegen in seinen Augen auf.

④ (考え・疑惑などが) 生じる :

Angst stieg in ihm auf.

- ⑤ 出世する、昇進する：  
**Er ist zum Direktor aufgestiegen.**  
 ⑥ 《スポーツ》〔上位リーグに〕昇格する。

### aufstellen

I 他

- ① <et4> (…4 を)〔特定の場所に〕置く：  
**ein Denkmal aufstellen**  
**Stühle im Saal aufstellen**  
 ② <et4> (足場・テントなど 4 を)組み立てる、建てる；  
**eine Baracke aufstellen**  
 ③ <j4> (部隊など 4 を)配置する；(チームなど 4 を)編成する：  
**Wachen aufstellen**  
**eine Fußballmannschaft aufstellen**  
 ④ <j4> (候補者・証人など 4 を)立てる：  
**einen Kandidaten aufstellen**  
 ⑤ <et4> (学説・計画など 4 を)立てる；(プログラム・リストなど 4 を)作成する。  
 ⑥ 《特定の名詞 4 と》  
**eine Behauptung aufstellen**  
**einen neuen Rekord aufstellen**

II 再

- <sich4>並んで立つ、整列する；：  
**Viele Leute stellten sich an der Straße entlang auf.**

### aufstoßen

I 他

- ① <et4> (ドアなど 4 を)強く押して開ける：  
**die Fensterläden aufstoßen**  
**Er stößt die Tür mit dem Fuß auf.**  
 ② <sich3 et4> (…4 を)ぶつける：  
**sich den Kopf aufstoßen**  
 II 自  
 ① [完了 h] げっぷをする：  
**Sie hat laut aufgestoßen.**  
 ② [完了 s] 《口語》<j3> (…3 の)目にとまる、注意をひく：  
**Mir ist nichts Verdächtiges aufgestoßen.**

### auftragen

I 他

- ① <et4> (塗料・膏薬など 4 を)塗る：  
**Er trug die Salbe dünn auf die Wunde auf.**  
 ② <et4> (衣類など 4 を)〔着られなくなるまで〕着古す：  
**die Sachen des älteren Bruders auftragen**  
 ③ <j3 et4> (…3 に…4 を)委託する、依頼する：  
**Sie hat mir aufgetragen, ihn zu besuchen.**  
 ④ 《雅語》<et4> (料理など 4 を)食卓に供する：



Das Essen ist aufgetragen.

Ⅱ 自〔完了 h〕

Die Jacke trägt nicht auf.

dick auftragen

**auftun**

Ⅰ 他

①《口語》<et4> (食べ物 4 を) 皿にのせる :

die Suppe auftun

②<et4> (…4 を) 開ける :

den Mund auftun

③《口語》<j4/et4> (…4 を) 発見する、偶然見つける :

Ich habe einen guten Friseur aufgetan.

Ⅱ 再

《雅語》<sich4> (ドアなどが) 開く ; 《比喩》 (新しい世界などが) 急に開ける.

**aufwachen**

自〔完了 s〕

目が覚める :

Ich bin heute früh aufgewacht.

**aufziehen**

Ⅰ 他

①<et4> (いかり・ブラインドなど 4 を) 引き上げる :

Er hat eine Fahne aufgezogen.

②<et4> (カーテンなど 4 を) 引いて開ける :

Er zog vorsichtig die Schublade auf.

③<et4> (写真など 4 を) はりつける ; (弦 4 を) 張る :

Ich habe das Photo auf Pappe aufgezogen.

④<et4> (…4 の) ぜんまいを巻く :

Er zieht seine Uhr auf.

⑤<j4/et4> (…4 を) 育てあげる :

Sie hat vier Kinder aufgezogen.

⑥《口語》<et4> (事業など 4 を) 興す ; (祝典など 4 を) 準備し、開催する :

Das Fest wurde groß aufgezogen.

⑦《口語》<j4> (…4 を) からかう :

Sie haben den neuen Schüler wegen seines Namens aufgezogen.

Ⅱ 自〔完了 s〕

① (行進しながら) しかるべき場所に立つ :

Die Wache ist aufgezogen.

② (嵐などが) 近づいて来る :

Ein Gewitter zieht auf.

**ausbilden**

Ⅰ 他

①<j4> (…4を) (職業につけるように) 養成する、育成する：

Nachwuchs ausbilden

sich4 als Krankenschwester ausbilden lassen

②<et4> (能力など4を) (訓練によって) 発達させる。

Ⅱ再

<sich4> (特定のものに) 発達する；(花が) 開花する：

Die Larve bildet sich zum Schmetterling aus.

ausbrechen

Ⅰ他

①<et> (…4を) 壊して<はがして>取る、もぎ取る：

Steine aus der Mauer ausbrechen

《3格の再帰代名詞と》

Ich habe mir einen Zahn ausgebrochen

②<et4> (…4を) 吐く：

Der Kranke hat den Tee ausgebrochen.

Ⅱ自〔完了s〕

①(囚人・動物などが) 脱走する、逃げ出す：

Der Häftling ist wieder ausgebrochen.

②(汗などが) 噴き出る；(火事・戦争などが) 突然起こる：

Ihr ist der Schweiß ausgebrochen.

Ein Streik ist ausgebrochen.

③<in et4> (…4の) 状態に陥る、突然(…4) し出す：

Er brach in Zorn aus.

ausbreiten

Ⅰ他

①<et4> (畳んであるもの4を) 広げる；(腕・翼など4を) 広げる：

die Zeitung ausbreiten

Der Baum breitet seine Zweige aus.

mit ausgebreiteten Armen 両手を広げて

②<et4> (…4を) 並べて置く、広げる：

den Inhalt eines Pakets auf dem Tisch ausbreiten

Ⅱ再

①<sich4> (火・うわさ・病気などが) 広がる：

Das Unkraut breitet sich aus.

②<sich4> (景色などが) 展開する：

Vor uns breitete sich eine Ebene aus.

ausdehnen

Ⅰ他

①<et4> (…4を) 膨張させる：

Die Hitze dehnt die Schienen aus.

②<et4> (影響力・領域など4を) 広げる、拡大する：

Er dehnt seinen Einfluß auf andere aus.

③<et4> (…4〔の期間〕を) 延ばす：

Er dehnte seinen Besuch bis zum nächsten Tag aus.

Ⅱ 再

① <sich4> (金属などが) 膨張する ; 《比喩》 (取引などが) 拡大する :

Wasser dehnt sich bei Erwärmung aus.

② <sich4> (会議・祝いなどが) 長引く :

Die Besprechung dehnte sich bis nach Mitternacht aus.

③ <sich4> (霧などが) 広がる ; (平地などが) 広がる :

Vor uns dehnt sich ein See aus.

ausdrücken

Ⅰ 他

① <et4> 《様態の語句と》 (…4 を…のように) 表現する (英 express) :

einen Gedanken richtig ausdrücken

② <et4> (気持ち 4 を) 述べる :

Er drückte ihr seinen Dank aus.

③ <et4> (…4 を) 表す :

Ihre Augen drückten unendliche Trauer aus.

④ <et4> (果汁など 4 を) 絞る ; (…4 から) [果汁などを] 絞り出す :

den Saft aus einer Zitrone ausdrücken

eine Zitrone <den Schwamm > ausdrücken

Ⅱ 再

<sich4> 《様態の語句と》 (気持ち・考えなどを) (…のように) 表現する :

Habe ich mich richtig ausgedrückt ?

auseinandersetzen

Ⅰ 再

① <sich4 mit et3> (…3 と) 正面から取り組む :

sich mit einem Problem kritisch auseinandersetzen

② <sich4 mit j3> (問題を解決するため) (…3 と) 議論を戦かわす :

Er hat sich mit dem politischen Gegner auseinandergesetzt.

Ⅱ 他

<j3 et4> (…3 に…4 を) 詳細に説明する :

Er hat ihr die Pläne eingehend auseinandergesetzt.

ausfallen

自 [完了 s]

① (歯・髪などが) 抜ける ; (給料などが) 入らなくなる :

Die Haare fallen aus.

② (催し物などが) 中止になる、取りやめになる :

Das Konzert fiel aus.

Der Unterricht fällt heute aus.

③ (電流などが) 急に止まる ; (機械などが) 急に機能しなくなる :

Der Strom fällt aus.

Die Klimaanlage ist ausgefallen.

④ (参加者などが) 突然欠席する :

Zwei Kollegen fallen wegen Krankheit aus.

⑤《様態の語句と》(…という)結果になる：  
Die Arbeit ist gut ausgefallen.

### ausführen

他

①<et4>(仕事など4を)行う；(命令など4を)実行する：

eine Reparatur ausführen

eine Anordnung ausführen

②<et4>(…4を)輸出する(反 einführen)：

Unser Land führt hauptsächlich Getreide aus.

③<et4>(…4を)製作<制作>する；完成する：

ein Bild in Öl ausführen

Er konnte den Schluß seines Stückes nicht mehr ausführen.

④<et4>(考えなど4を)詳しく述べる、説明する：

Er führte seine Ideen umständlich aus.

wie ich oben ausgeführt habe

⑤<j4>(…4を)[劇場・レストランなどに]連れて行く：

Er hat den Besuch ausgeführt.

den Hund ausführen 犬を散歩に連れて行く

### ausfüllen

他

①<et4>(用紙など4に)記入する：

ein Formular<einen Fragebogen> ausfüllen

②<et4>(穴など4を)埋める：

einen Graben mit Kies ausfüllen

③<et4>(空間4を)ふさぐ：

Der Schrank füllt die ganze Ecke des Zimmers aus.

④<et4>(時間4を)つぶす：

Er füllte die Wartezeit mit Lesen aus.

⑤<et4>(地位4に)ふさわしい働きをする、職責を果たす：

Sie füllt ihre Stellung gut aus.

⑥<j4>(…4の)心をいっぱいにする；満足させる：

Dieser Gedanke füllt ihn ganz aus.

Die Hausarbeit füllt sie nicht aus.

### ausgeben

他

①<et4>(お金4を)支出する、使う：

Er hat sein ganzes Geld ausgegeben.

②<et4>(食料・本など4を)配る、支給する：

Der Koch gibt das Essen aus.

③<j4/et4 als<für>et4>(偽って)(…4を…だと)言う、称する：

et4 als Tatsache ausgeben

Er gibt sich für unverheiratet aus.

④<et4>(…を)おごる：

ein Bier für j4 ausgeben

ausgehen

自〔完了s〕

① (用事・レジャーのために) 外出する :

Wir gehen oft zum Essen aus.

② (火・ランプなどが) 消える :

Plötzlich ging das Licht aus.

③ <j3> (…3 の) 蓄えなどがなくなる ; (髪が) 抜ける :

Ihm sind die Zigaretten ausgegangen.

④ 《様態の語句と》 (…の) 結果に終わる :

Die Geschichte ging tragisch aus.

⑤ <von et3> (ある仮定・前提 3 から) 出発する :

Er ist von falschen Voraussetzungen ausgegangen.

⑥ <von et3> (道などが) (…3 から) 出ている :

Von dem Platz gehen mehrere Straßen aus.

⑦ <von j3> (…3 に) 由来する :

Der Plan ging vom Lehrer aus.

⑧ <von et3/j3> (においなどが…3 から) 広がる :

Von der Rose geht ein zarter Duft aus.

Große Wirkung geht von ihm aus.

⑨ <auf et3> (…3 を) 目指す :

Er geht nur auf Gewinn aus. 彼は利益ばかり追いかけている

ausgleichen

I 他

① <et4> (不足など 4 を) 埋め合わせる、補う :

einen Mangel ausgleichen

② <et4> (対立など 4 を) (調整によって) 取り除く :

Die Meinungsverschiedenheiten wurden ausgeglichen.

II 再

<sich4> (対立などが) [調整によって] 取り除かれる :

Die Unterschiede glichen sich wieder aus.

aushalten

I 他

① <et4> (困難・苦痛など 4 を) 耐え抜く、持ちこたえる (→ ertragen) :

Ich kann diese Hitze nicht aushalten.

Ich halte es vor Hunger nicht mehr aus.

② 《音楽》 <et4> (…4 を) 長く響かす :

einen Ton aushalten ある音を長く響かせる

③ 《口語》 <j4> (愛人など 4 の) 生活費を払う :

Er hält eine Geliebte aus.

II 自〔完了h〕

持ちこたえる、辛抱する :

Sie hielt bei ihm bis zum Ende aus.

### auskommen

自〔完了s〕

①<mit et3> (…3で) 足りる、間に合う：

Er kommt mit seinem Gehalt nicht aus.

②<ohne j4/et4> (…4なしで) すませる：

Ich komme ohne Uhr aus.

③<mit j3> (…3と) 仲よく<うまく>やっていく：

Mit ihm kann man nicht auskommen.

### ausmachen

他

①《口語》〈et4〉 (電気・火などを) 消す； (ラジオなどの) スイッチを切る  
(反 anmachen)：

das Licht ausmachen

den Fernseher ausmachen テレビを消す

②《口語》〈et4〉 (…4を) 取り決める：

einen Termin ausmachen

wie ausgemacht

③〈et4〉 (…4を) 形成する； (…4の) 本質をなす：

Seen und Wälder machen den Zauber dieser Landschaft aus.

④〈et4〉 (総計して) (…4に) なる：

Die Kosten machen zwanzig Mark aus.

⑤〈et4〉 (遠方のものなど4を) 発見する、見つける：

ein Schiff am Horizont ausmachen

⑥《nichts, wenig, viel などと》 (…の) 重要性をもつ：

Macht es Ihnen etwas aus, den Platz zu tauschen?

Das macht nichts aus.

### ausreichen

自〔完了h〕

足りる、十分である：

Das Geld reicht nicht aus.

Dafür reichen seine Kenntnisse völlig aus.

### ausrufen

他

①<et4> (…4と) (急に) 大声を上げる：

"Nein!" rief sie aus.

②<et4/j4> (…4を) 大きな声で知らせる、アナウンスする：

Sie ließ ihr Kind durch den Lautsprecher ausrufen.

③<et4> (…4を) 宣言する、布告する：

die Republik ausrufen

### ausruhen

再

<sich4> 休む、休息する、休養する：

Wir ruhen uns zu Hause aus.

Sie haben ein paar Stunden ausgeruht.

aussagen

I 自〔完了 h〕

供述する、証言する：

Sie hat gegen ihn ausgesagt.

II 他

<et4> (考えなど 4 を) 述べる； (作品などが…4 を) 表現する：

Das Bild sagt etwas aus.

ausschalten

他

① <et4> (…4 の) スイッチを切る (反 einschalten)：

den Motor ausschalten

den Strom ausschalten

② <et4/j4> (…4 を) 除去する、排除する：

eine Fehlerquelle ausschalten

Er konnte seinen Rivalen ausschalten.

ausschneiden

他

<et4> (…4 を) 切り取る、切り抜く：

einen Artikel aus der Zeitung ausschneiden

aussehen

自〔完了 h〕

① 《様態の語句と》 (…のように) 見える、(…の) 印象を与える：

Er sah traurig aus.

Das sieht wie Gold aus.

Sie sieht älter aus, als sie ist.

Er sieht aus, als ob er krank wäre.

Sie ist nicht so jung, wie sie aussieht.

Mit ihm sah es schlimm aus.

② 《非人称》 <nach et3> (…3 の) ように見える：

Es sieht nach Regen aus.

äußern

I 他

<et4> (意見など 4 を) 述べる：

Äußern Sie Ihre Meinung!

II 再

① <sich4> 意見などを述べる：

Er hat sich zu diesem Thema geäußert.

② <sich4> (感情・病気などが) 外に現れる：

Die Krankheit äußert sich durch hohes Fieber.

aussetzen

I 他

①<et4> (…4 を) 中断する :

einen Streik aussetzen

die Kur auf einige Zeit aussetzen

②<j4/et4> (子供など 4 を) 置き去りにする :

einen Säugling aussetzen

③<j4 et3> (…4 を…3 に) さらす :

Sie setzte ihn einer Gefahr aus.

Er setzt sich damit dem Spott aus.

④<et4> (賞金など 4 を) 懸ける :

Auf seinen Kopf sind 50 000 DM ausgesetzt.

◆ et4 an et3 auszusetzen haben

Sie hat immer etwas an meiner Arbeit auszusetzen.

II 自〔完了 h〕

(機械・脈などが突然) 止まる、停止する :

ausprechen

I 他

①<et4> (…4 を) 発音する :

Wie spricht man dieses Wort aus?

②<et4> (考え・気持ちなど 4 を) 口に出す、述べる :

Er sprach offen aus, was jeder dachte.

Ich spreche Ihnen meinen herzlichsten Dank aus.

③<et4> (判決・解雇通知など 4 を) 言い渡す、宣告する.

II 再

①<sich4> 意見などを述べる :

Er sprach sich für<gegen> das Projekt aus.

sich über j4 lobend aussprechen …4 のことをほめる

②<sich4> 心中を打ち明ける :

Er wollte sich einmal bei ihr offen aussprechen.

③<sich4> 《様態の語句と》発音するのが (…) だ :

Das Wort spricht sich schwer aus. この単語は発音が難しい.

aussteigen

自〔完了 s〕

(乗り物から) 降りる (反 einsteigen) :

Der Zug hielt, und wir stiegen aus.

Alles aussteigen! Endstation!

Er wollte aus dem Projekt aussteigen.

ausstellen

他

①<et4> (商品など 4 を) 陳列する、展示する :

im Schaufenster Badeanzüge ausstellen

②<et4> (文書類 4 を) 発行する、交付する :

eine Quittung ausstellen



Der Kunde stellte einen Scheck aus.

ausüben

他

①<et4> (作用・影響など 4 を) 及ぼす :

Sie übt einen schlechten Einfluß auf ihn aus.

②<et4> (権力・権利など 4 を) 行使する :

Er hat sein Wahlrecht nicht ausgeübt.

③<et4> (職務 4 を) 果たす ; (職業など 4 を) 営む :

eine Pflicht ausüben

Er übt keinen Beruf aus.

ausweisen

I 他

①<j4> (…4 を) 追放する、放逐する :

einen Ausländer aus dem Lande ausweisen

②<j4/et4> 《様態の語句と》 (書類などが) (…4 が…であることを)

証明する :

Der Paß weist ihn als Japaner aus.

II 再

<sich4> (書類などによって) 本人であることを証明する :

Können Sie sich ausweisen ?

Er wies sich durch seinen Führerschein aus.

auszeichnen

I 他

①<j4/et4> (…4 を) 表彰する :

Er ist ausgezeichnet worden.

j3 mit einer Medaille auszeichnen

②《事物を主語にして》 <j4/et4> (…4 を) 際立たせる、特徴づける :

Fleiß zeichnet ihn aus.

II 再

<sich4> 際立つ、抜きん出る :

Hans zeichnet sich durch Fleiß aus.

ausziehen

I 他

①<j4> (…4 (の衣服など) を) 脱がせる (→II 再) :

Die Mutter zieht das Kind aus.

②<et4> (衣服・靴など 4 を) 脱ぐ (反 anziehen) :

Schuhe und Strümpfe ausziehen

sich3 et4 ausziehen

Sie zieht dem Kind das Hemd aus.

③<et4> (縮められているもの 4 を) 引き伸ばす :

die Antenne am Auto ausziehen

Man kann den Tisch ausziehen.

④<et4> (…4 を) 引き抜く :

Unkraut ausziehen

Ⅱ再

< sich4 > 衣類を脱ぐ:

Er hat sich schnell ausgezogen.

Ⅲ自〔完了s〕

(住いなどを) 引き払う (反 einziehen) :

Am 31. März müssen wir ausziehen.

教育改善推進経費

言語研究 VIII

1998年3月

編者 在間 進, 敦賀陽一郎

発行所 東京外国語大学

〒114-0024

東京都北区西ヶ原4-51-21

電話 03-3917-6111